仙台市文化財調査報告書第346集

仙台平野の遺跡群XIX

－平成20年度発掘調査報告書－

南小泉遺跡第58～60次・鴻ノ巣遺跡第11次
今泉遺跡第７次・沖野城跡第３次
洞ノ口遺跡第13次・養種園遺跡第７次など

２００９年３月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第346集

仙台平野の遺跡群XIX

－平成20年度発掘調査報告書－

南小泉遺跡第58～60次・鴻ノ巣遺跡第11次
今泉遺跡第７次・沖野城跡第３次
洞ノ口遺跡第13次・養種園遺跡第７次など

２００９年３月

仙台市教育委員会

序　　文

仙台市は「杜の都・仙台」という愛称で広く親しまれ、四季折々の豊かな自然にあふれる仙台の風景は、私たち市民の誇りであると同時に将来へ守るべき大切な財産であります。

この仙台市の素晴らしい自然・風景と同様に、私たち市民の誇りであり大切な財産の一つに、悠久の歴史に育まれ守れてきた文化遺産の存在が挙げられます。実は、仙台市内には現在約800ヵ所もの遺跡が確認されております。これらの埋蔵文化財は、これまでの大きな時の流れの中でその存在価値を高めるとともに、現在においては各種開発事業によって絶えず破壊・消滅の恐れにさらされています。当教育委員会としましては、皆様のご理解とご協力を賜りながら、これらの貴重な文化財を保存し、次世代へと継承いくことに日々努めております。

本報告書には、各種開発に先立ち、平成20年度に発掘調査を実施した南小泉遺跡、鴻ノ巣遺跡、今泉遺跡、沖野城跡、洞ノ口遺跡、養種園遺跡の調査結果を収録しております。

先人達の遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たち市民の大事な仕事であると思います。つきましては、本報告書が、学術研究のみならず学校教育や生涯学習などのあらゆる場面で活用され、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書刊行に際しましてご協力、ご助言をいただきました多くの方々に、心より深く感謝申し上げます。

平成21年３月

仙台市教育委員会
教育長　荒　井　　崇

例　　言

1．本書は、国庫補助事業による個人専用住宅他補助対象事業に伴う「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。

2．本書は、仙台市教育委員会が実施した個人住宅建設に伴う南小泉遺跡第58・59・60次、鴻ノ巣遺跡第11次、今泉遺跡第7次、沖野城跡第3次、洞ノ口遺跡第13次、養種園遺跡第7次の各発掘調査報告書の合本である。

3．本書の執筆・編集は、仙台市教育委員会文化財課調査係の担当調査員の協議のもとに主濱光朗がとりまとめ、次のように分担して行った。

主　　事　鈴木　隆　：南小泉遺跡第58次、今泉遺跡第７次、沖野城跡第3次
主　　事　加藤　隆則：南小泉遺跡第59・60次、養種園第７次
主　　事　森田　義史：洞ノ口遺跡第13次
主　　事　大久保弥生：南小泉遺跡第58次
文化財教諭　佐藤　正弥：南小泉遺跡第59次
文化財教諭　熊谷　敏哉：鴻ノ巣第11次

4．遺物実測やトレース等の整理作業は、主に仙台市向田文化財整理収蔵室の作業員が行った。

5．本書に掲載した陶器・磁器に関する産地及び年代の所見は、文化財課仙台城史跡調査室の佐藤洋主査によるものである。

6．本書にかかわる遺物・写真・実測図面等の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

7．本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1976）に準拠した。

8．断面図・平面図の標高値は、海抜高度を示している。

9．遺物図版の縮尺は、任意とする。

10．遺構は種別ごとに次の略号を用いた。

SI：竪穴住居跡　　SD：溝跡　　SK：土坑
SE：井戸跡　　P：ピット　　SX：性格不明遺構

11．遺物の登録は、以下の分類と略号を用いた。

A：縄文土器　B：弥生土器　C：土師器（非ロクロ）　D：土師器（ロクロ）　E：須恵器
F：丸瓦　G：平瓦　I：陶器　J：磁器　K：石器・石製品
L：木製品・杭材　N：金属製品　P：土製品

12．竪穴住居跡の網かけは、被熱範囲を示している。

13．土師器実測図における網かけは、黒色処理されていることを示している。

14．遺物観察表のカッコ内の法量のうち、器高は残存値を、また口径及び底径は復元値を示している。

15．本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田1980）は、「十和田a（To－a)」を示し、降下年代は現在、西暦915年初夏とされている。

庄子貞雄・山田一郎1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城－昭和54年度発掘調査概報－』宮城県多賀城跡調査研究所

目　　次

序文
例言
目次

Ⅰ　はじめに

1　調査体制……1
2　調査計画……1
3　調査実績……1

Ⅱ　南小泉遺跡第58次発掘調査報告書

1　調査要項……2
2　調査に至る経過と調査方法……2
3　遺跡の位置と環境……3
4　基本層序……4
5　発見遺構と出土遺物……4
6　まとめ……6
7　寄贈された須恵器……9

Ⅲ　南小泉遺跡第59次発掘調査報告書

1　調査要項……10
2　調査に至る経過と調査方法……10
3　遺跡の位置と環境……10
4　基本層序……10
5　発見遺構と出土遺物……12
6　まとめ……21

Ⅳ　南小泉遺跡第60次発掘調査報告書

1　調査要項……32
2　調査に至る経過と調査方法……32
3　遺跡の位置と環境……32
4　基本層序……32
5　発見遺構と出土遺物……32
6　まとめ……35

Ⅴ　鴻ノ巣遺跡第11次発掘調査報告書

1　調査要項……38
2　調査に至る経過と調査方法……38
3　遺跡の位置と環境……38

4　基本層序……39
5　発見遺構と出土遺物……40
6　まとめ……40

Ⅵ　今泉遺跡第７次発掘調査報告書

1　調査要項……43
2　調査に至る経過と調査方法……43
3　遺跡の位置と環境……43
4　基本層序……43
5　発見遺構と出土遺物……44
6　まとめ……45

Ⅶ　沖野城跡第３次発掘調査報告書

1　調査要項……49
2　調査に至る経過と調査方法……49
3　遺跡の位置と環境……50
4　基本層序……50
5　発見遺構と出土遺物……51
6　まとめ……53

Ⅷ　洞ノ口遺跡第13次発掘調査報告書

1　調査要項……56
2　調査に至る経過と調査方法……56
3　遺跡の位置と環境……57
4　基本層序……58
5　発見遺構と出土遺物……59
6　まとめ……63

Ⅸ　養種園遺跡第７次発掘調査報告書

1　調査要項……73
2　調査に至る経過と調査方法……73
3　遺跡の位置と環境……74
4　基本層序……75
5　発見遺構と出土遺物……75
6　まとめ……77

Ⅹ　郡山遺跡 …… 80

Ⅺ　砂押古墳 …… 81

Ⅰ　はじめに

1　調査体制

調 査 主 体　　仙台市教育委員会

調 査 担 当　　文化財課　　課長　田中則和

整備活用係　　主幹兼係長　吉岡恭平、主査　長島栄一、主事　宮田晋、主事　森田賢治

調査係　　係長　佐藤甲二、主査　主濱光朗、主事　鈴木隆、主事　加藤隆則、主事　森田義史

文化財教諭　佐藤正弥、文化財教諭　熊谷敏哉

調査担当職員　　第２表参照

2　調査計画

主に個人専用住宅の建設に伴う発掘調査費用の補助を目的とし、個人専用住宅他補助対象事業費として、総経費8,073千円、国庫補助金額3,976千円の予算で計画した。発掘調査の実施については、以下の実施計画を立案した。

調査対象地	調査予定地点数	調査予定期間	調査原因
仙台市各区内	30地点	平成20年4月～平成21年1月	個人住宅建築

第１表　調査計画

3　調査実績

今年度の調査実績は、第２表に示したとおりである。調査原因は、全て個人専用住宅の建築である。なお、第２表中で調査次数がついている遺跡については、郡山遺跡を除いて、本書にその成果を掲載している。

NO.	遺跡名	対象面積	調査面積	調査期間	調査次数	届出NO.	調査担当職員
1	南小泉遺跡	57.29㎡	18㎡	4月21日		H19,2-306	加藤、佐藤（正）
2	沖野城跡	81.37㎡	23.56㎡	4月21日		H19,2-288	森田（義）、熊谷
3	堤町Ｂ窯跡	120㎡	16㎡	5月7日		H20,184-22	鈴木、熊谷
4	南小泉遺跡	154.44㎡	48㎡	5月12日～5月16日	58次	H20,184-4	鈴木、熊谷
5	鴻ノ巣遺跡	72㎡	15㎡	5月19日、5月21日	11次	H20,184-11	鈴木、熊谷
6	南小泉遺跡	105.3㎡	30㎡	5月26日		H20,184-18	鈴木、熊谷
7	今泉遺跡	70㎡	15㎡	6月2日、6月4日	7次	H20,184-35	鈴木
8	明屋敷遺跡	84.83㎡	24㎡	7月7日		H20,184-83	鈴木、熊谷
9	六反田遺跡	106.16㎡	22.5㎡	7月15日		H20,184-38	加藤、熊谷
10	安久東遺跡	117.9㎡	24㎡	7月22日～7月25日		H20,184-39	森田（義）、熊谷
11	南小泉遺跡	73.28㎡	55㎡	7月26日～8月6日	59次	H20,184-85	加藤、佐藤（正）
12	郡山遺跡	105㎡	11㎡	7月22日	190次	H20,184-111	鈴木、藤田、早川
13	養種園遺跡	70.5㎡	15㎡	7月28日		H20,184-88	森田（義）
14	沖野城跡	66.58㎡	20㎡	8月4日～8月7日	3次	H20,184-100	鈴木
15	富沢遺跡	65.41㎡	16.5㎡	8月20日		H20,184-142	加藤、佐藤（正）
16	台原七丁目五番窯跡	67.5㎡	19.5㎡	8月26日～8月27日		H20,184-101	森田（義）、熊谷
17	東昌寺経石出土地	72.04㎡	18㎡	9月8日		H20,184-150	鈴木、佐藤（正）
18	富沢遺跡	61.71㎡	12㎡	9月11日		H20,184-141	森田（義）、熊谷
19	南小泉遺跡	48.02㎡	10㎡	9月24日～9月26日	60次	H20,184-170	加藤、佐藤（正）
20	伊古山B遺跡	75.29㎡	27.9㎡	9月24日		H20,184-130	森田（義）、熊谷
21	南小泉遺跡	85.89㎡	30㎡	9月29日～10月1日		H20,184-129	加藤、佐藤（正）
22	洞ノ口遺跡	226.48㎡	94㎡	9月29日～10月31日	13次	H20,184-165	森田（義）、熊谷
23	中田北遺跡	65㎡	19㎡	10月6日～10月9日		H20,184-140	鈴木、加藤
24	南小泉遺跡	69.56㎡	15㎡	10月14日		H20,184-190	鈴木
25	大野田古墳群	91.63㎡	33㎡	11月4日～11月6日		H20,184-186	森田（義）、熊谷
26	今泉遺跡	108.33㎡	24.6㎡	11月11日～11月13日		H20,184-160	森田（義）、熊谷
27	養種園遺跡	53.81㎡	21.8㎡	11月17日～11月20日	7次	H20,184-182	加藤、熊谷
28	郡山遺跡	80.11㎡	1.5㎡	11月25日	191次	H20,184-213	加藤
29	富沢遺跡	59.05㎡	15㎡	11月27日		H20,184-226	鈴木、米川
30	田母神屋敷跡	192.94㎡	33㎡	12月15日		H20,184-218	米川、佐々木
31	南小泉遺跡	62.49㎡	15㎡	12月22日～12月26日		H20,184-228	米川、佐々木
32	南小泉遺跡	185.95㎡	27㎡	1月6日		H20,183-22	小泉、佐藤（典）
33	南小泉遺跡	44.16㎡	8.75㎡	1月19日		H20,184-223	小泉、佐藤（典）
34	南小泉遺跡	116.55㎡	28.8㎡	1月26日～1月27日		H20,184-231	小泉、佐藤（典）

第２表　調査実績

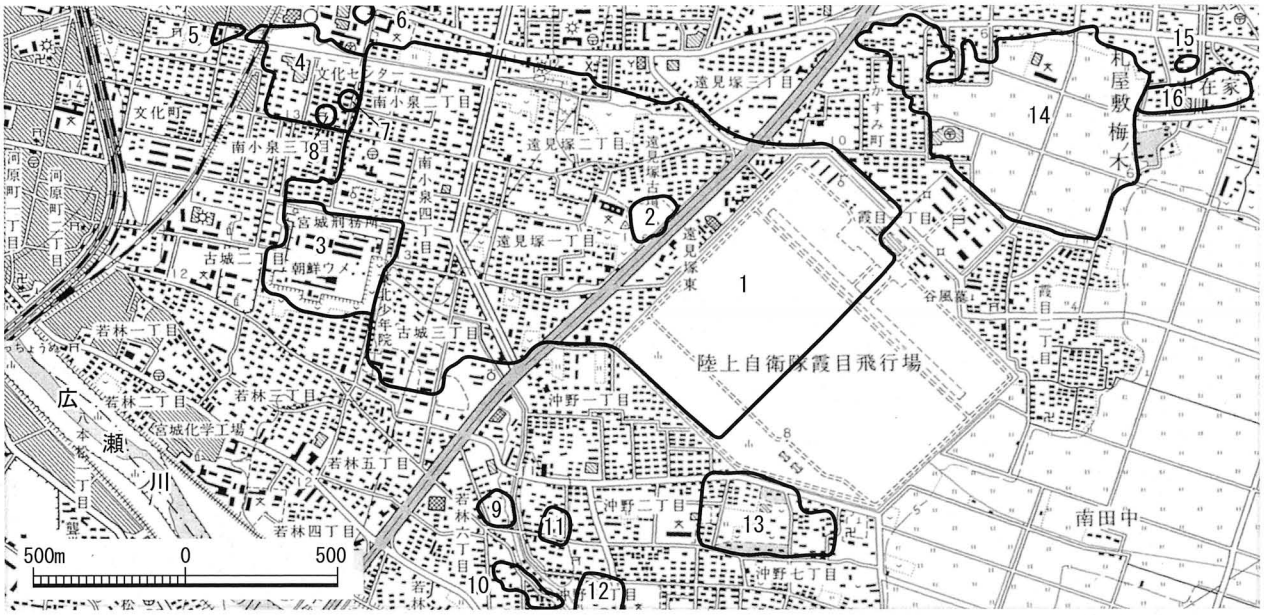
Ⅱ　南小泉遺跡第58次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点　　仙台市若林区南小泉二丁目105－29
調 査 期 間　　平成20年５月12日～５月16日
調査対象面積　　154.44㎡
調 査 面 積　　48㎡（１,２トレンチ各24㎡）
調 査 原 因　　個人住宅建設工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主事　鈴木　隆　　文化財教諭　熊谷　敏哉

2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成20年４月８日付けで地権者より提出された、個人住宅建設に係る発掘届（H20教生文第184－４号）に基づき実施した。確認調査は平成20年５月12日に着手し、遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。建築範囲に東西８ｍ×南北３ｍの１トレンチ,東西３ｍ×南北８ｍの２トレンチを設定し、重機により盛土お



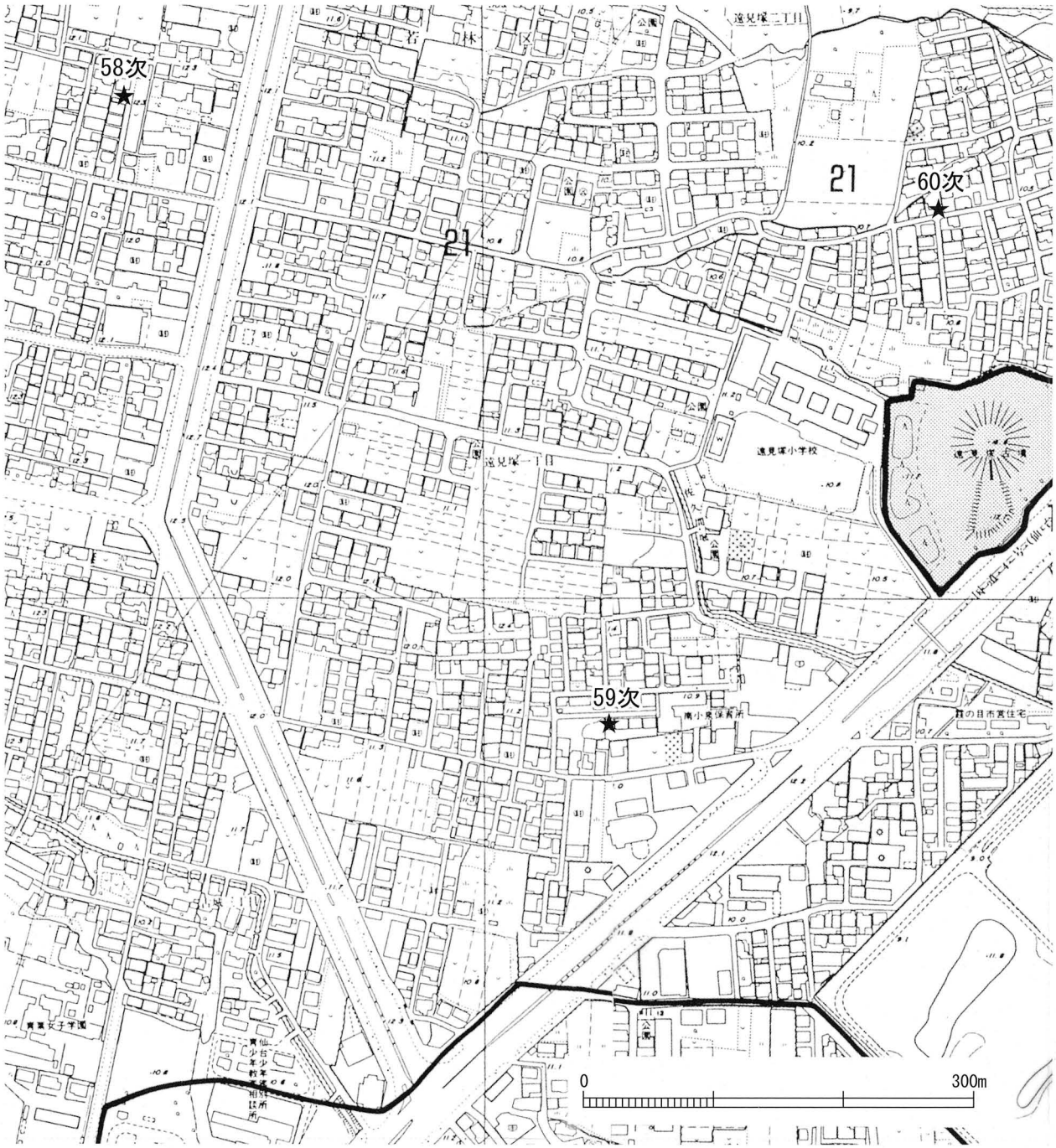
番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	南小泉遺跡	集落、屋敷	自然堤防	弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世	9	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
2	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	10	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
3	若林城跡	円墳、集落、城館	自然堤防	古墳、平安、中世、近世	11	神柵遺跡	官衙関係	自然堤防	奈良、平安
4	養種園遺跡	集落、屋敷、包含地	自然堤防	縄文、古墳、平安、中世、近世	12	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生、古墳、奈良、平安
5	保春院前遺跡	集落	自然堤防	古代、中世、近世	13	沖野城跡	城館	自然堤防	中世
6	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	14	仙台東郊条里跡	条里	後背湿地	奈良、平安
7	蛇塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	15	中在家遺跡	包含地	自然堤防	平安
8	猫塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	16	中在家南遺跡	集落、墓地	自然堤防、後背湿地	弥生、古墳、平安、中世、近世

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

よびⅠ層を掘削した。１・２トレンチ共にⅢ層上面で溝跡、土坑、ピット等を検出した。検出状況を写真により記録し、掘削後写真・図面により記録した。

3　遺跡の位置と環境

本書所収の南小泉遺跡の調査は第58～60次で、各調査地点は第２図に示したとおりである。各地点の詳細はそれぞれの報告に譲り、以下では南小泉遺跡の位置と環境について概要を述べる。

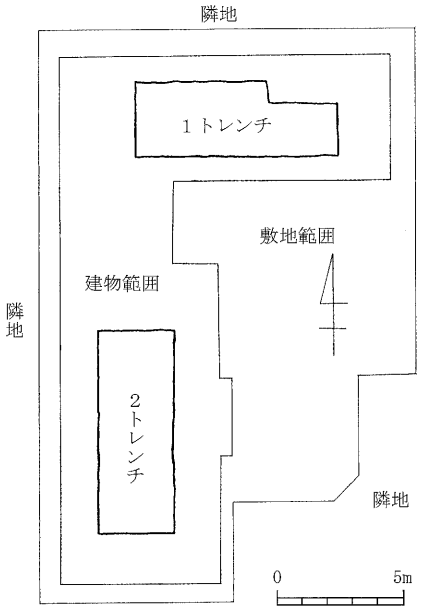


第２図　調査地点の位置

仙台市は西部と東部で地形が大きく二分され、西部は奥羽山脈から派生する丘陵ないし段丘地形となっている。東部は、北から七北田川、名取－広瀬川、阿武隈川の３河川が形成した「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野が広がり、河川の流域には扇状地、自然堤防、後背湿地、旧河道からなる複雑な地形を形成している。

南小泉遺跡は仙台市の東部に位置し、七北田川と名取－広瀬川に挟まれた沖積平野の自然堤防上に立地している。遺跡の規模は、東西約２km、南北約１kmの範囲に広がり、市内でも最大規模の遺跡である。遺跡内には遠見塚古墳を含んでおり、西側では、南部で若林城跡と、また北部で養種園遺跡や法領塚古墳、蛇塚古墳、猫塚古墳などの古墳群と接している。標高は西側で約13m、東側で約7.5mの西高東低である。

遺跡は、これまでに57次の調査が実施されており、縄文時代～近世の複合遺跡として理解されている。各時代における過去の調査成果については、仙台市文化財報告書第326集「南小泉遺跡他」を参照されたい。



第３図　調査区配置図

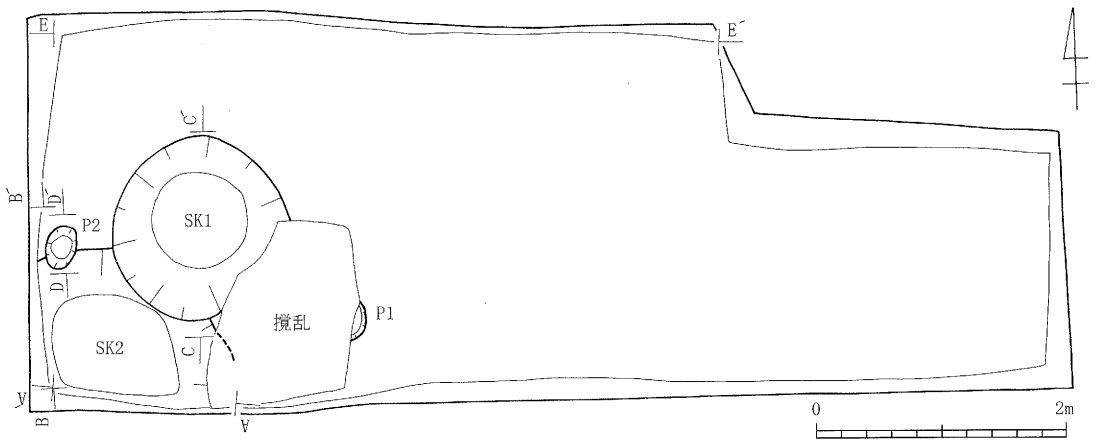
４　基本層序

基本層は４層に分かれる。盛土は１トレンチで28～70cm、第2トレンチでは20～40cmの厚さがある。Ⅰ層は現代の耕作土である。Ⅲ層はその上面で遺構が検出されており基盤層である。Ⅳ層はⅢ層と同様の砂質シルト層である。

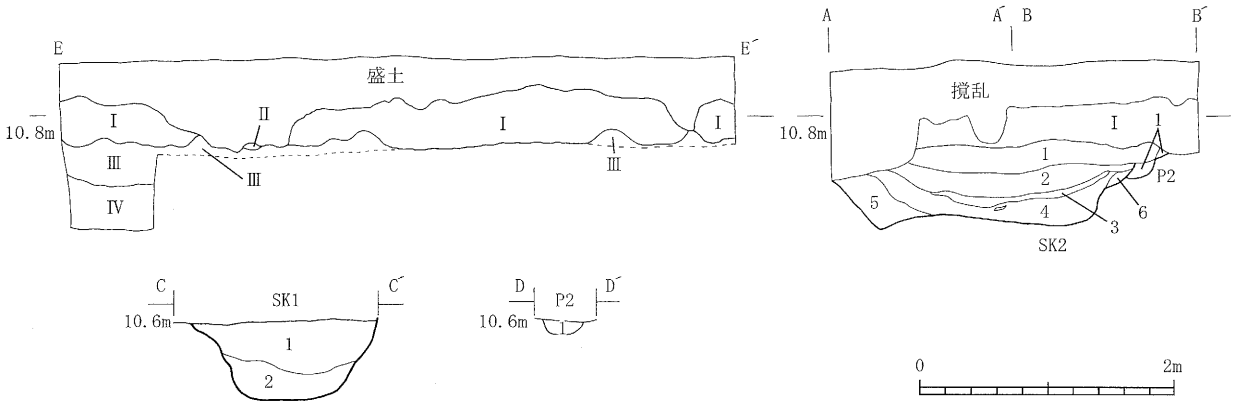
５　発見遺構と出土遺物

①１トレンチ

建物範囲の北側に東西８m、南北３mの調査区を設定した。Ⅲ層上面で土坑２基、ピット２基を検出した。遺構は全て西側に集中している。



第４図　1トレンチ遺構配置図



基本層	土色	土性	備考
1TⅠ層	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒子をやや多量に含む。酸化鉄を少量含む。
1TⅡ層	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土をまだら状に多量含む。
1TⅢ層	10YR4/6　褐色	砂質シルト	基盤層。
1TⅣ層	10YR4/4　褐色	砂質シルト	
2TⅠ層	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒子をやや多量に含む。酸化鉄を少量含む。
2TⅡ層	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土をまだら状に多量含む。
2TⅢ層	10YR4/6　褐色	砂質シルト	基盤層。

第５図　１トレンチ北壁、西・南壁、SK1、P2断面図

１）土坑

ＳＫ１土坑　ＳＫ２と重複しており、本遺構が新しい。平面形は円形である。規模は、上端での径が140cm、下端での径が80cm、深さは70cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は２層に分かれる。遺物は堆積土１層中から非ロクロ土師器片５点、須恵器片２点(第８図１)、平瓦片２点(第８図３)、堆積土２層中から平瓦片１点が出土した。

ＳＫ２土坑　調査区南西角で部分的に検出した。ＳＫ１土坑と重複しており、本遺構が古い。平面形は不明である。規模は東西150cm以上、南北120cm以上、深さ70cmである。堆積土は6層から成る。遺物は堆積土２～４層中から非ロクロ土師器片１点、ロクロ土師器片１点、須恵器片１点(第８図２)、瓦片１点が出土した。

２）ピット

２基検出した。Ｐ１は撹乱に切られており詳細は不明である。Ｐ２はＳＫ２土坑より新しい遺構である。平面形は楕円形で、長径約30cm である。遺物は出土していない。

②２トレンチ

建物範囲の南側に東西３m、南北８mの調査区を設定した。Ⅲ層上面で溝跡２条、ピット13基を検出した。

１）溝跡

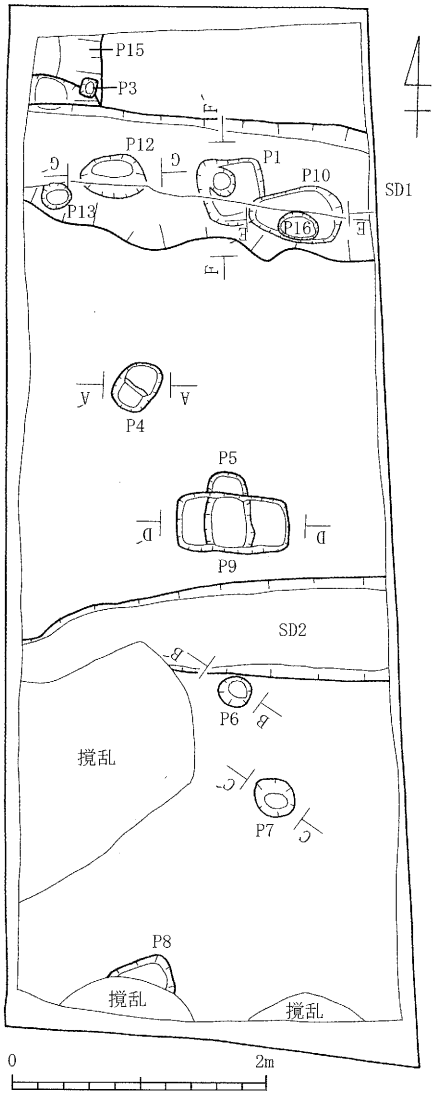
ＳＤ１溝跡　トレンチの北側で検出した。東西に延び、調査区域外に延びている。規模は、上端幅100cm、下端幅50cm、深さ55cmである。堆積土は１層である。遺物は、堆積土中から非ロクロ土師器片22点が出土した。

ＳＤ２溝跡　トレンチの中央やや南寄りで検出した。東西に延び調査区域外に延びている。規模は、上端幅90cm、下端幅60cm、深さ25cm である。堆積土は１層である。遺物は出土していない。

2）ピット

13基検出した。なお、13基のうち5基のピットは、ＳＤ１溝跡完掘後にその底面で検出したものである。ピットは調査区中央及び北側で多く検出された。平面形は円形、楕円形、方形のものがある。規模は、長軸で25～90cmのばらつきがあるが、20～40cmのものが多数を占める。深さは、Ⅲ層上面から検出されたもので10～40cmである。ＳＤ１溝跡の底面から検出されたものは、本来Ⅲ層上面を掘り込み面としていた遺構であれば、少なくとも50cm以上の深さがあったものと推定される。

これらのピットについて、平面形、規模の点で特にまとまった特徴は見られず、建物跡として組むものも確認できない。ただし、ＳＤ１溝跡の底面で検出されたピット１については、平面形が隅丸方形を呈し柱痕跡が確認されたことから、柱穴と考えられる。規模は、径50cm、深さ50cm 以上である。柱痕跡は掘り方の北東角寄りにあり、直径は約20cmである。この遺構については、他に類似するものが無く建物跡となるか否かは不明である。遺物は、Ｐ９、４、７の堆積土中から非ロクロ土師器の小片が出土している。



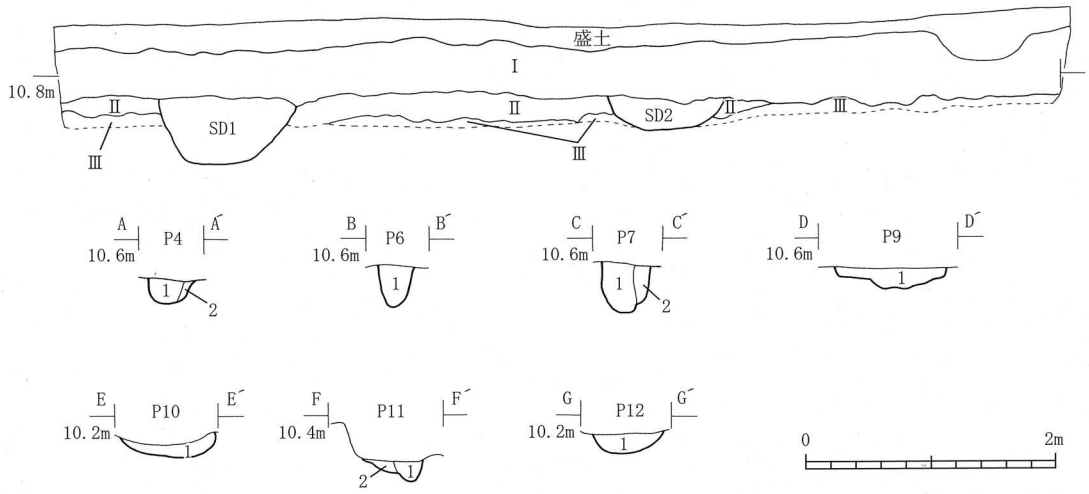
第６図　２トレンチ遺構配置図

６　まとめ

今回の調査により、１トレンチで土坑２基、ピット２基、２トレンチで溝跡２条、ピット13基を検出した。遺構の年代については、いずれの遺構も堆積土中より小片の遺物が出土しているに過ぎないため、その形成年代を知る事は困難である。

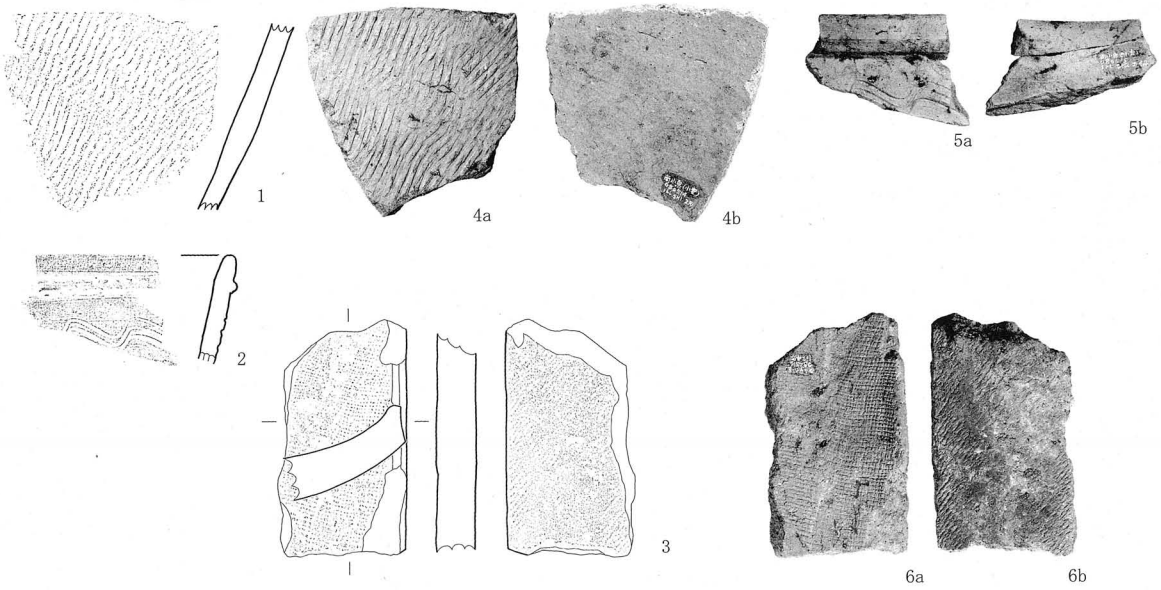
まず１トレンチの２基の土坑については、どちらも平瓦の小片を含むことから古代以降に埋没したものと推定される。なお、ＳＫ２土坑から出土した波状沈線をもつ須恵器甕の口縁部破片は、７世紀頃のものと考えられる。２トレンチの遺構から出土した遺物は、全て非ロクロ土師器の小片である。しかし出土量も少ないことから、遺構の形成年代を示す可能性は低く、後世の混入によるものと考えられる。

遺構の年代を知る手がかりはいずれも断片的で、その詳細を示すことは出来ないが、古墳時代以降で概ね古代を中心とする遺構群であると考えられる。



層　位	土　色	土　性	備　考
SK1－1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土をまだら状に多量に含む。酸化鉄を多量に含む。
2	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む。
SK2－1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土をまだら状に多量含む。酸化鉄を多量に含む。
2	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む。
3	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む。
4	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	シルト質粘土（10YR2/3）をブロック状にやや多量に含む。
5	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土を粒状にやや多量に含む。
6	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土を粒状に少量含む。
SD1－1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土を径3～5cmのブロック状に多量に含む。
SD2－1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土を径2～4cmのブロック状に少量含む。
P1－1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土を粒状に少量含む。
P4－1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	
2	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土を粒状に多量に含む。
P6－1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	
P7－1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	
2	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土を粒状に多量に含む。
P9－1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒を少量含む。基本層Ⅰ層土に同じ。
P10－1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	
P11－1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	
2	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	
P12－1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	

第７図　2トレンチ東壁・溝跡・ピット断面図



図中番号	登録番号	出土地点		分類		法量（cm・g）				特徴・備考（調整等）	写真図版
		遺構名	遺構層	種別	器種	器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重		
1	E－2	SK1	2層	須恵器	甕	－	－	－	－	外面：タタキ	4
2	E－3	SK2	2～4層	須恵器	甕	－	－	－	－	外面：波状沈線　壺？	5
3	G－1	SK1	2層	瓦	平瓦	－	－	－	－	外面：縄叩き　内面：布目	6

第８図　遺物実測図・写真

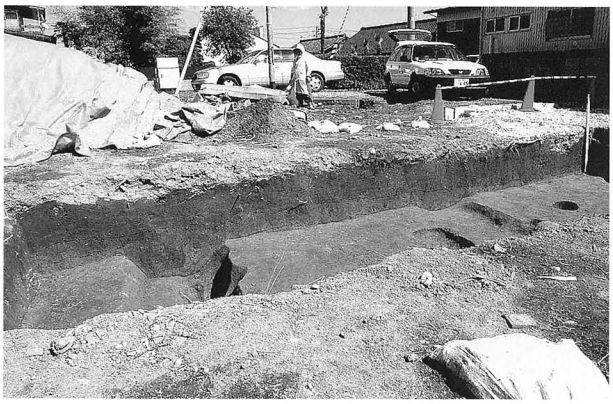
1　1トレンチ完掘状況全景（西から）

2　1トレンチ北壁断面状況（南から）

3　1トレンチSK1・2土坑完掘状況（西から）

4　1トレンチSK2土坑断面状況（北東から）

5　2トレンチ完掘状況全景（北から）



6　2トレンチ東壁断面状況（北西から）

7　2トレンチP1・10・16完掘状況

8　2トレンチSD1溝跡断面状況（西から）

図版1　調査区全景、基本層序、検出遺構

7　寄贈された須恵器（横瓶）

1）寄贈の経緯

本資料は、南小泉第58次調査実施時に、調査地の隣接地に住む方より仙台市に対し寄贈を受けたものである。寄贈者によれば、40～50年程前に現宅地の近隣において耕作中に発見し、現在まで保管していたとの事である。なお、寄贈者より、仙台市教育委員会教育長あて寄贈する旨の文書を提出していただいた。

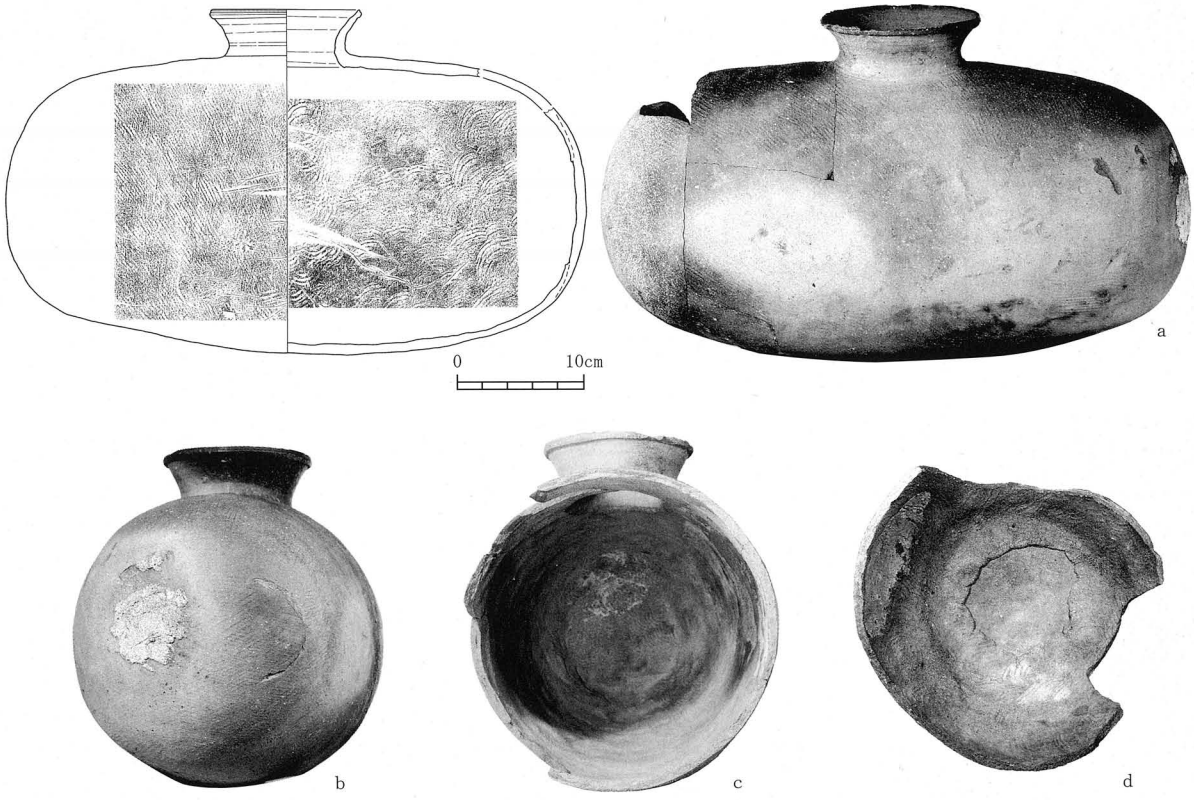
2）横瓶について

口径11.0cm、器高30.0cm、胴部横幅の最大径は50.6cm である。口縁部は、体部との接合部からなだらかに外傾し、端部はわずかに上部へつまみ上げられている。頸部の装飾はない。胴部は、肩が大きく張る隅丸の長方形に近い形を呈する。外面には平行タタキが全面に施されており、その内面には、同心円状の当て具痕が見られる。胴部の右側面は、粘土板によって閉塞されている（第９図ｄ）。左側面の外面には、弧を描くように、縦に器面の剥がれが見られ(第９図ｂ)、また内面には、側面と胴部の間に器壁の盛り上がりが観察できることから(第９図ｃ)、左側面も粘土板によって閉塞されている可能性が考えられる。

現在のところ、宮城県内において横瓶の出土が報告されているのは、大崎市混内山横穴墓群、利府町菅谷道安寺横穴群が挙げられるが、例はわずかである。採集品のため、その出自等は不明と言わざるを得ないが、完形に近く、製作痕跡もよく観察できることから、製作方法を復元できる資料として貴重であると思われる。

【参考文献】

春日真実2001「横瓶の製作方法」『つぼとかめのつくり方』北陸古代土器研究第９号　北陸古代土器研究会
東北古代土器研究会2008『東北古代土器集成－須恵器・窯跡編－〈陸奥〉』



図中番号	登録番号	出土地点		分類		法量（cm・g）			特徴・備考（調整等）
		遺構名・位置	遺構層	種別	器種	器高・長	口径・幅	体部径・厚	
1	E-1	寄贈品		須恵器	横瓶	30.0	11.0	50.6	外面：平行叩き　内面：アテ具痕（同心円状）

第９図　横瓶実測図・写真

Ⅲ　南小泉第59次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点　　仙台市若林区遠見塚１丁目35－１の一部
調 査 期 間　　平成20年７月22日～８月6日
調査対象面積　　73.28㎡
調 査 面 積　　約55㎡
調 査 原 因　　個人住宅建設工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主事　加藤　隆則　　文化財教諭　佐藤　正弥

2　調査に至る経過と調査方法

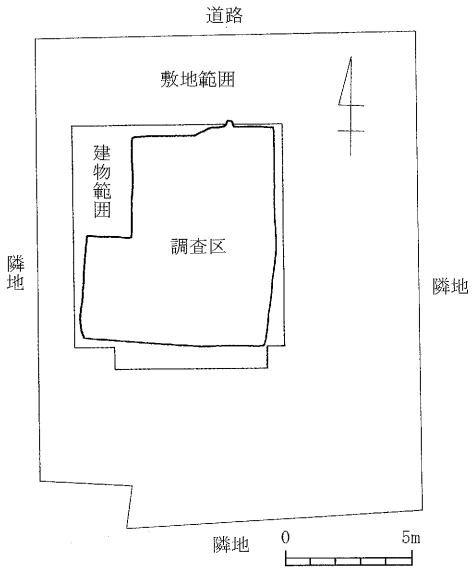
今回の調査は、平成20年４月８日付けで地権者より提出された、個人住宅建設に係る発掘届（H20教生文第184－85号）に基づき実施した。確認調査は、平成20年７月22日に着手した。建築範囲中央に初め東西３m×南北8.5mの調査区を設定し、重機により盛土およびⅠ～Ⅴ層を除去した。Ⅵ層上面で人力により遺構を精査したところ、同面で遺構を検出したため、引き続き本調査を実施した。調査区南部で竪穴住居跡が東西両側に延びていたため、申請者および施工業者との協議の上、調査区を西側は２m（東西）×４m（南北）拡張し、東側は建築範囲まで拡張した。最終的な調査面積は約55㎡である。拡張後、ＳＩ２竪穴住居跡の続きとＳＩ３・４竪穴住居跡および小溝状遺構群や土坑等を検出し、すべての遺構を写真および図面により記録した。重機により調査区を埋め戻し、調査を終了した。

3　遺跡の位置と環境

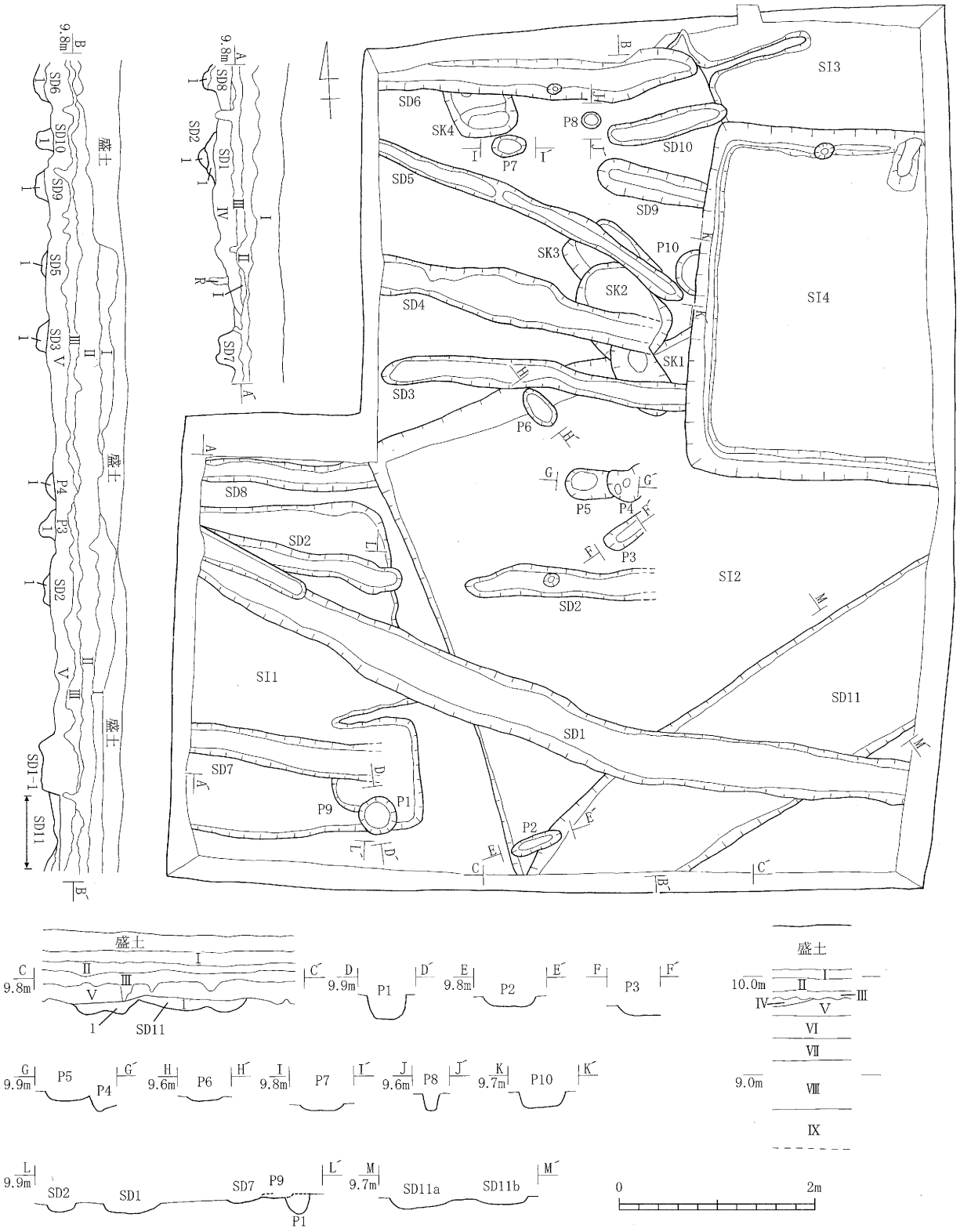
遺跡の位置と環境については、前項「Ⅱ　南小泉第58次発掘調査報告書」を参照されたい。本調査地点は遺跡範囲の中央南寄りに位置し、遠見塚古墳の西南西350mの地点にある。

4　基本層序

基本土層は盛土下に９層を確認した。Ⅳ層は調査区北西側にのみ分布し、古墳時代～古代の遺構はⅥ層上面で検出される。Ⅵ層以下は調査区南側を重機により掘削した。土層はⅠ～Ⅶ層までが砂質シルトで、Ⅷ層が中粒砂、Ⅸ層は鉄分を多量に含む黄褐色粘土層である。



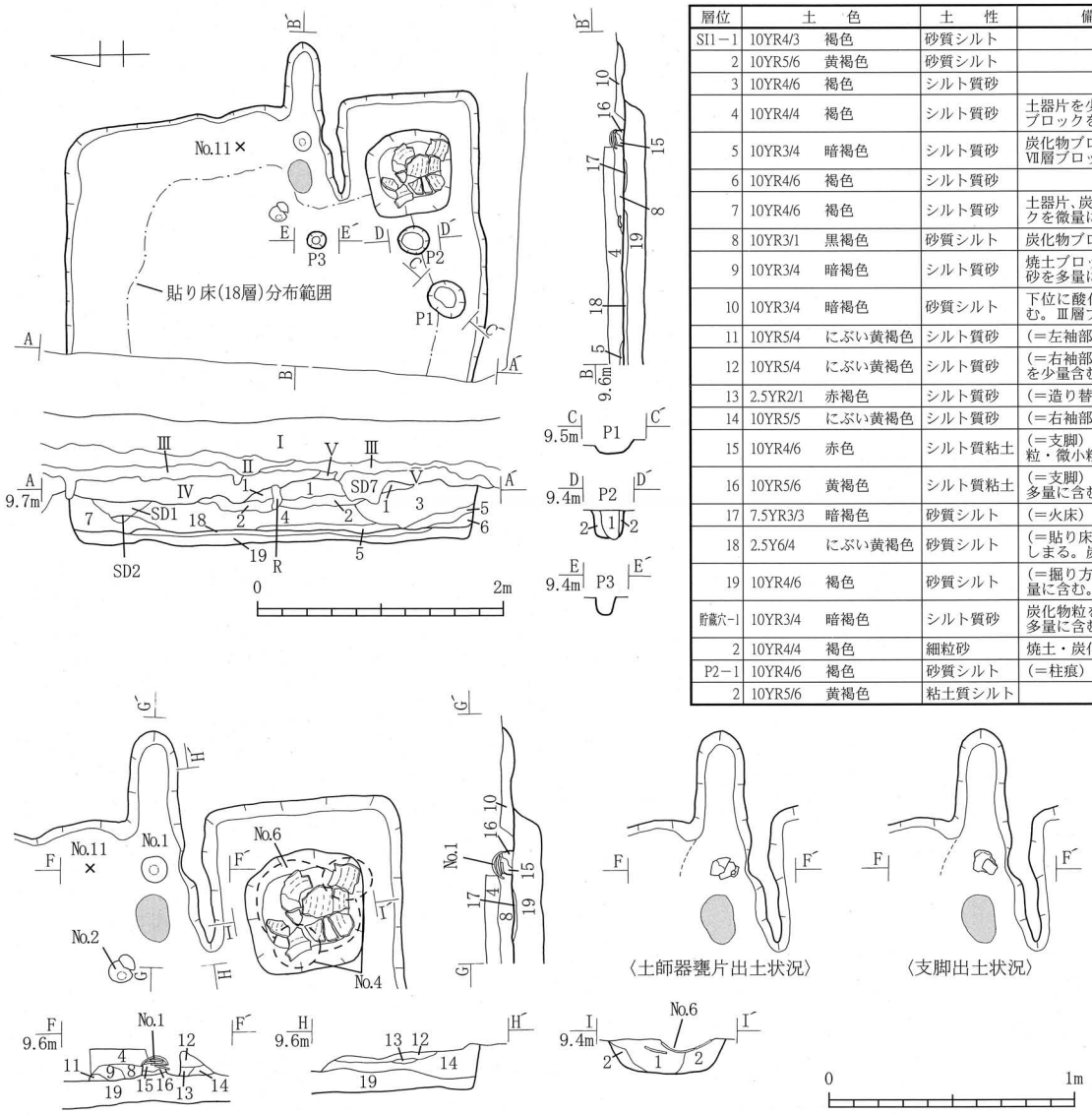
第10図　調査区配置図



層位	土色	土性	備考
Ⅰ	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	
Ⅱ	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	
Ⅲ	10YR2/2　黒褐色	シルト質砂	旧畑耕作土。
Ⅳ	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	調査区南西部にのみ分布。酸化鉄を多量に含み、下位に沈着している。
Ⅴ	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	旧畑耕作土。小溝状遺構群の堆積土またはその一部となる。
Ⅵ	10YR4/6　褐色	砂質シルト	遺構確認面。Ⅴ層ブロックがところどころに入る。

層位	土色	土性	備考
Ⅶ	10YR4/6　褐色	砂質シルト	Ⅵ層よりやや明るい。
Ⅷ	10YR4/6　褐色	中粒砂	
Ⅸ	2.5YR5/3　黄褐色	粘土	酸化鉄を極多量に含む。薄く多重に酸化鉄層が堆積している。
SD1-1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	
SD11-1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	10YR2/2黒褐色土ブロックを少量含む。
小溝-1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	Ⅵ層ブロックを少量含む。

第11図　遺構平・断面図



層位	土色		土性	備考
SI1－1	10YR4/3	褐色	砂質シルト	
2	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	
3	10YR4/6	褐色	シルト質砂	
4	10YR4/4	褐色	シルト質砂	土器片を少量含む。炭化物粒、Ⅵ・Ⅶ層ブロックを微量に含む。
5	10YR3/4	暗褐色	シルト質砂	炭化物ブロックをやや多量に含む。Ⅵ・Ⅶ層ブロックを少量含む。
6	10YR4/6	褐色	シルト質砂	
7	10YR4/6	褐色	シルト質砂	土器片、炭化物粒、10YR5/6黄褐色ブロックを微量に含む。
8	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	炭化物ブロックを多量に含む。
9	10YR3/4	暗褐色	シルト質砂	焼土ブロックを少量含む。10YR4/4褐色砂を多量に含む。
10	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	下位に酸化鉄沈着。酸化鉄を多量に含む。Ⅲ層ブロックを少量含む。
11	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト質砂	(＝左袖部残存)
12	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト質砂	(＝右袖部) 被熱し硬化・赤変。炭化物を少量含む。
13	2.5YR2/1	赤褐色	シルト質砂	(＝造り替え以前の燃焼部堆積層)
14	10YR5/5	にぶい黄褐色	シルト質砂	(＝右袖部、造り替え以前の右袖部)
15	10YR4/6	赤色	シルト質粘土	(＝支脚) 被熱赤変している。長石の砂粒・微小粒を多量に含む。
16	10YR5/6	黄褐色	シルト質粘土	(＝支脚) 長石・石英の砂粒・微小粒を多量に含む。
17	7.5YR3/3	暗褐色	砂質シルト	(＝火床) 炭化物・焼土を多量に含む。
18	2.5Y6/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	(＝貼り床) 住居跡中央部に分布し良くしまる。炭化物ブロックを少量含む。
19	10YR4/6	褐色	砂質シルト	(＝掘り方埋土) Ⅵ・Ⅶ層ブロックを多量に含む。
貯蔵穴－1	10YR3/4	暗褐色	シルト質砂	炭化物粒を少量含む。10YR4/4褐色砂を多量に含む。
2	10YR4/4	褐色	細粒砂	焼土・炭化物粒を微量に含む。
P2－1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	(＝柱痕)
2	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	

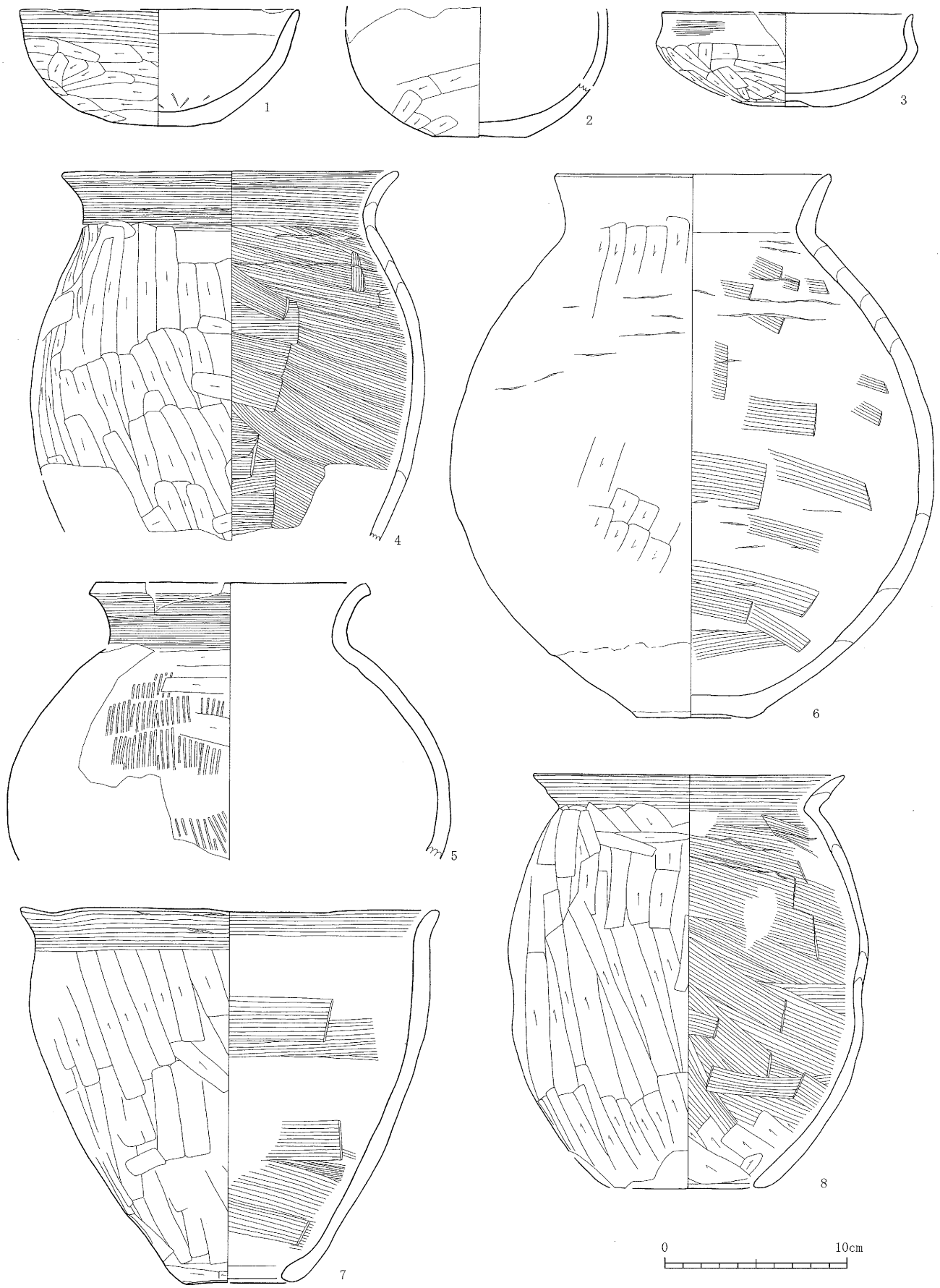
第12図　SI1竪穴住居跡平・断面図

5　発見遺構と出土遺物

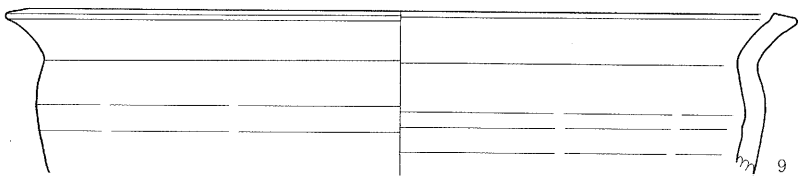
Ⅵ層上面で竪穴住居跡４軒、土坑４基、溝跡２条、小溝状遺構群、ピット10基を検出した。以下、遺構ごとに記述を進めるが、11条検出した溝跡のうち、ＳＤ２～10溝跡については規模や方向性等から小溝状遺構群と捉えた。

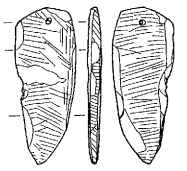
１）竪穴住居跡

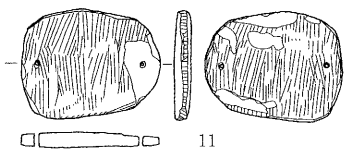
ＳＩ１竪穴住居跡　調査区南西に位置し、西側は調査区域外に延びている。平面形は隅丸方形を基調としたもので、方向は東辺でＮ－8°－Ｗである。ＳＤ１溝跡、小溝状遺構群（ＳＤ２・７溝跡）、Ｐ１・９と重複し、いずれの遺構よりも古い。確認面から床面までは35～40cmで、壁は検出した三辺とも80°前後の急角度で立ち上がる。堆積土は10層確認した。8～10層はカマド内堆積土である。床面はほぼ平坦で貼り床（18層）が住居跡中央に分布し、カマド前面でやや硬化している。また、周辺は掘り方埋土上面を床面としている。カマドは東壁に設けられる。右袖は壁から88cm、高さ15cmが残存し、造り替えが見られる。廃棄時（造り替え後）の袖構築土は12～14層で、造り替え以前の袖構築土は14層、燃焼部堆積土は13層である。支脚は黄褐色粘土を盛り上げ土柱状にしており、上部は被熱赤変している。支脚上では10cm程度の土師器甕片５枚が重なって出土した。最下の破片は支脚に埋め込まれており、支脚の一部であろう。甕破片には土師器坏（No.1）が伏せられているが、これが支脚の一部か、廃棄時のものかは不明である。煙道部は燃

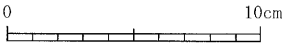


第13図　SI1竪穴住居跡出土遺物（１）









図中番号	登録番号	出土地点		分類		法量（cm）			特徴（形状・調整・含有物・材質等）	写真図版
		遺構名・位置	層位	種別	器種	器高	口径	底径		
1	C－2	SI－1・支脚		土師器	坏	6.4	15.1	4.4	【形状】口縁－外反、底－平【調整】外面:口縁－ヨコナデ、体－ケズリ　内面:口縁－ヨコナデ、体－ナデ→ミガキ？	9－1
2	C－1	SI－1・カマド前面	床直	土師器	坏	(7.1)	－	5.0	【形状】底－平【調整】外面：体－ケズリ　内面：ナデ	9－2
3	C－3	SI－1		土師器	坏	5.1	(13.6)	(3.0)	【形状】底－凹【調整】外面：口縁－ヨコナデ、体－ケズリ	9－3
4	C－4	SI－1・貯蔵穴	貯1層	土師器	甕	(20.3)	17.9	－	【調整】外面：口縁－ヨコナデ、胴－ケズリ　内面：口縁－ヨコナデ、胴－ヘラナデ	9－4
5	C－7	SI－1		土師器	甕	(15.2)	(15.2)	－	【調整】外面：口縁－ヨコナデ、胴－ハケメ→ケズリ　内面：口縁－ヨコナデ、胴－ヘラナデ	9－5
6	C－5	SI－1・貯蔵穴		土師器	甕	29.9	15.0	6.5	【調整】外面：口縁－ヨコナデ、胴－ケズリ　内面：口縁－ヨコナデ、胴－ヘラナデ	9－6
7	C－8	SI－1	4層	土師器	甑	20.7	22.8	5.5	【調整】外面：口縁－ヨコナデ、胴－ケズリ　内面：口縁－ヨコナデ、胴－ヘラナデ	9－7
8	C－24	SI－1		土師器	甑	22.8	(16.8)	(8.2)	【調整】外面:口縁－ヨコナデ、胴－ケズリ　内面:口縁－ヨコナデ、胴－ヘラナデ、胴下－ケズリ	9－8
9	E－1	SI－1		須恵器	甕	(6.6)	(40.0)		【調整】外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ	9－9
10	K－1	SI－1	8層	石製模造品	剣形	長:6.15	幅：2.36	厚：0.42	1孔	9－10
11	K－2	SI－1・カマド北側	4層	石製模造品	有孔円板	長:4.33	幅：5.48	厚：0.58	2孔	9－11

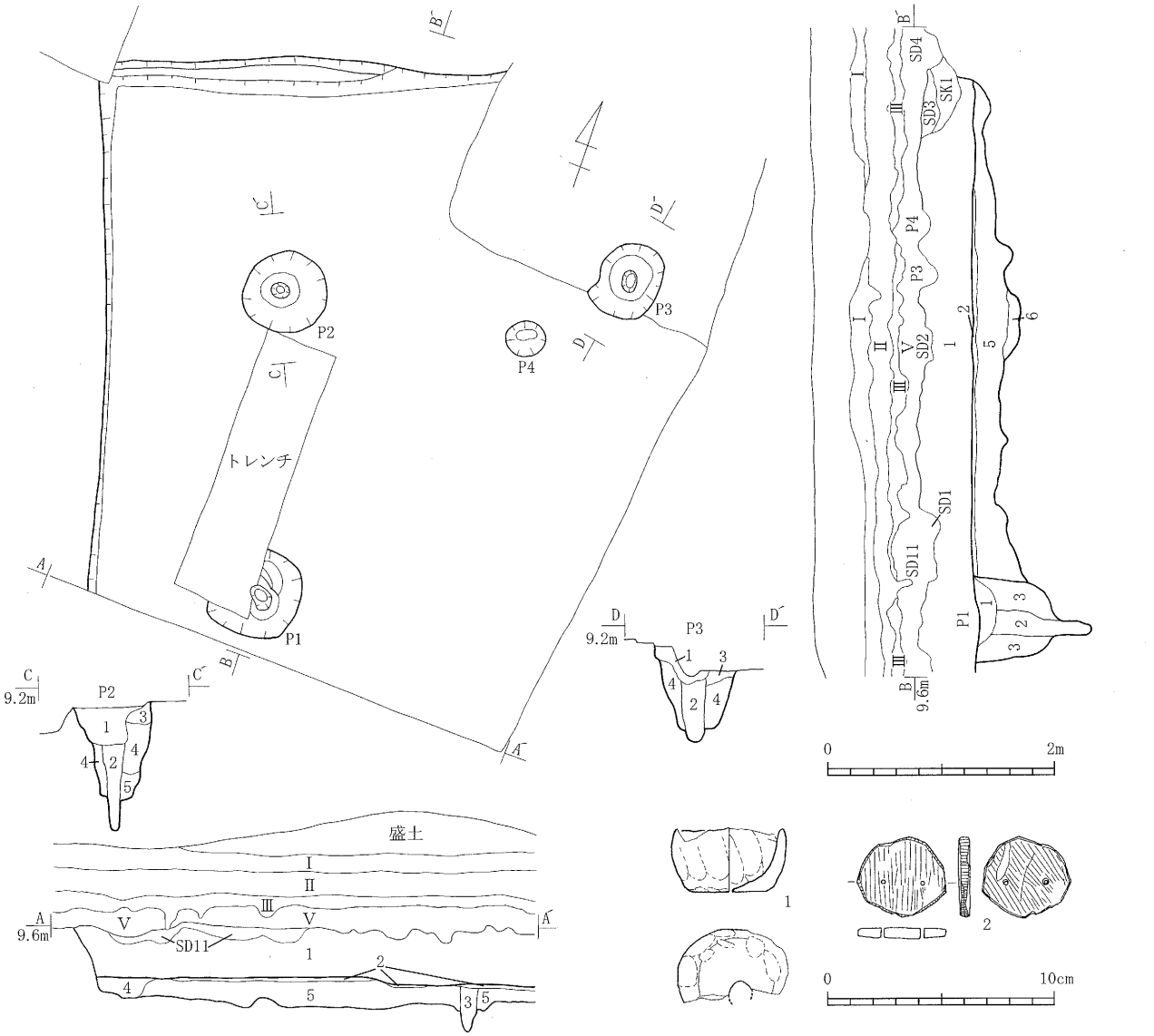
第14図　SI1竪穴住居跡出土遺物（２）

焼部と段差を持たず、壁外へ50cm 延びている。カマドの全長は128cm である。

カマド以外の施設として、貯蔵穴およびピット３基を検出した。貯蔵穴はカマド右側に位置し、平面形は方形、規模は東西67cm ×南北66cm、深さ19cm である。堆積土は２層で、１層上面で土師器甕２個体（№.４・６）が出土したほか、２層中より黒曜石の剥片１点が出土している。ピット３基の平面形および規模は、Ｐ１が長軸33cm×短軸26cmの楕円形で深さ6cm、Ｐ2は長軸25cm ×短軸22cmの円形で深さ21cm、Ｐ３は長軸16×短軸14cmの円形で深さ15cmである。Ｐ２では直径14cmの柱痕を確認している。

カマドや貯蔵穴以外の出土遺物は、床面から土師器坏（№.２）１点、床面からやや浮いた位置で石製模造品２点が出土した。堆積土中からは、土師器坏片約25点、甕約400点、壺片約30点が出土した。総量は平箱２箱である。図示した遺物は11点である。第13図１・２は平底の土師器坏で、１は口縁部と体部にわずかに稜のある土器である。３は口縁部と体部に稜があり、口縁部が外反する土師器坏で底部外面は浅く窪んでいる。５は体部外面の調整にハケ目後ヘラケズリが施される。９は須恵器鉢で頸部がくびれ、胴部上半でやや膨らむ器形である。10･11は石製模造品で10は剣形、11は有孔円板である。

ＳＩ２竪穴住居跡　調査区南側に位置する。東側および南側は調査区域外に延びているため、平面形および規模は不明であるが、壁や柱穴の位置から、一辺600cm 以上の方形と推定される。方位は西壁がＮ－18°－Ｗである。ＳＩ４竪穴住居跡、ＳＫ１土坑、ＳＤ１･11溝跡、小溝状遺構、ピットと重複し、いずれの遺構よりも古い。堆積土は１層で、壁際流入土等は確認されない。壁は北壁と西壁を検出した。北壁は西側で段がつきテラス状になり、西壁は60°前後と比較的緩やかに立ち上がる。壁の高さは最も残りの良い西壁で52cmである。床面は住居跡南東がやや低くなるほかはおおむね平坦である。住居跡中央はしまりの強いにぶい黄褐色砂質シルト土を２～３cm 敷いて貼り床とし、周辺部は掘方埋土上面を床面としている。カマドは検出されず、柱穴３基（Ｐ１～３）、ピット１基（Ｐ４）を検出した。柱穴はいずれも柱材の抜き取りが見られる。堆積土は５層を確認し、１層が抜き取り穴、２層が柱痕、３～５層が掘り方埋土である。いずれの柱穴も掘り方底面には、荷重で15～30cmほど沈んだ柱の圧痕が確認



層　位	土　色	土　性	備　考
SI2－1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	炭化物粒を少量含む。
2	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	（＝貼り床）
3	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	（＝ピット）Ⅷ層を多量に含む。Ⅳ層ブロックを多量に含む。炭化物粒を微量に含む。
4	10YR4/4　褐色	砂質シルト	（＝掘り方埋土）Ⅳ層粒を微量に含む。
5	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	（＝掘り方埋土）炭化物ブロックを少量含む。Ⅳ層ブロックを少量含む。
SI2・P1～3－1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	（＝柱抜き取り痕）炭化物粒を少量含む。
2	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	（＝柱痕）
3	10YR4/6　褐色	砂質シルト	
4	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	炭化物粒を少量含む。
5	10YR4/4　褐色	砂質シルト	

図中番号	登録番号	出土地点 遺構名・位置	出土地点 層位	分類 種別	分類 器種	法量（cm） 器高	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	特徴（形状・調整・含有物・材質等）	写真図版
1	C－17	SI2	上層	土師器	手捏ね	2.7	4.7	3.3	【調整】外面：ユビナデ　底面：ユビナデ　内面：ユビナデ	9－12
2	K－4	SI2	床直	石製模造品（有孔円板）		長：3.47	幅：3.76	厚：0.41	2孔	9－13

第15図　SI 2 竪穴住居跡

される。柱穴の規模および平面形は、Ｐ１が長軸88cm ×短軸77cmの方形で深さ68cm、Ｐ２は長軸75cm ×短軸68cmの円形で深さ87cm、Ｐ３は長軸68×短軸55cm の楕円形で深さ78cm である。それぞれの柱痕の規模（直径）はＰ１＝14cm、Ｐ２＝10cm、Ｐ3＝16cm である。柱穴間の距離は心々間でＰ１－Ｐ2が268cm、Ｐ２－Ｐ3が307cm である。Ｐ４は長軸36cm ×短軸32cm の楕円形で、深さ23cm である。柱痕は見られない。

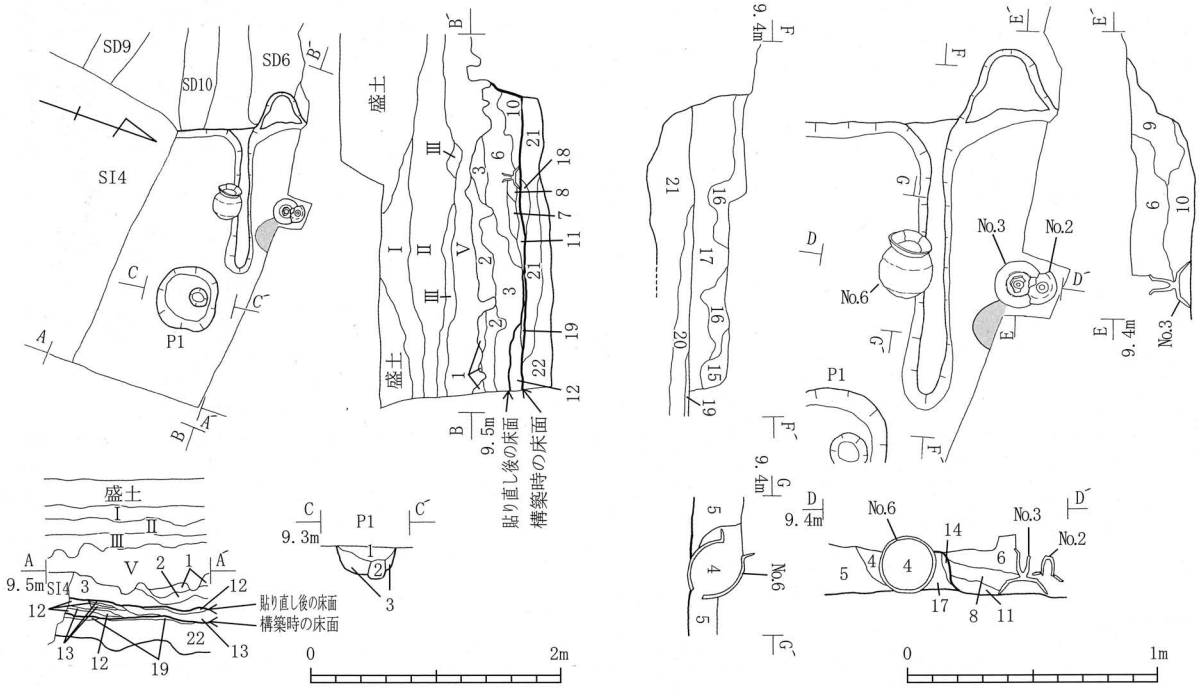
遺物は、調査区南壁の床面直上で石製模造品１点（No.２）が出土した。その他の床面遺棄遺物や、一括廃棄遺物は見られない。堆積土中からは土師器坏片15点、高坏片６点、甕片約70点、壺片約50点、甑片１点のほか、土師器

細片が平箱１箱出土した。第15図１は堆積土上部で出土した手捏ね土器である。整形は内外面ともに指頭で押さえなでられる。底部には焼成前の穿孔があり、器厚は穿孔部分にむかい薄くなる。

ＳＩ３竪穴住居跡　調査区北東に位置し、北側および東側は調査区域外に延びている。また南側はＳＩ４竪穴住居跡によって削平され、検出したのはカマドを含む住居跡の一部である。このほか小溝状遺構と重複し、本遺構の方が古い。方位は西壁でＮ－26°－Ｗである。堆積土は１～11層で確認面から最大で35cmが残っている。壁は東壁が70°前後で立ち上がる。床面は、構築段階と貼り直し段階の２面が確認される。構築段階の床面は19層上面、貼り直し段階の床面は12層上面である。南北断面（Ａ－Ａ´）付近では、床貼り直しの際、二種の構築土（12層と13層）を交互に丁寧に積んでいる。構築段階の床面は全体的に平らであるが、貼り直し後の床面は、カマド前面のみが10cmほど窪んでいる。

カマドは西壁に設けられ、主軸はＮ－70°－Ｗである。袖部は左袖を検出し、右袖は調査区域外である。構築土は褐色砂質シルト土で、天井部は崩落している（８～10層）が、左袖は西壁から112cm 残存している。煙道部は燃焼部から西壁を段差として接続している。後世の小溝状遺構には壊されているが、大きく外側に延びないものと思われる。支脚には土師器高坏２個体（No.２・３）を用いている。No.３は倒立させ、またNo.２は坏部を欠いた高坏脚部を正立させ、並置している。No.３は燃焼部底面直上に置かれているが、No.２はNo.３の坏部に乗っている。支脚の位置は西壁から60～70cm 離れている。

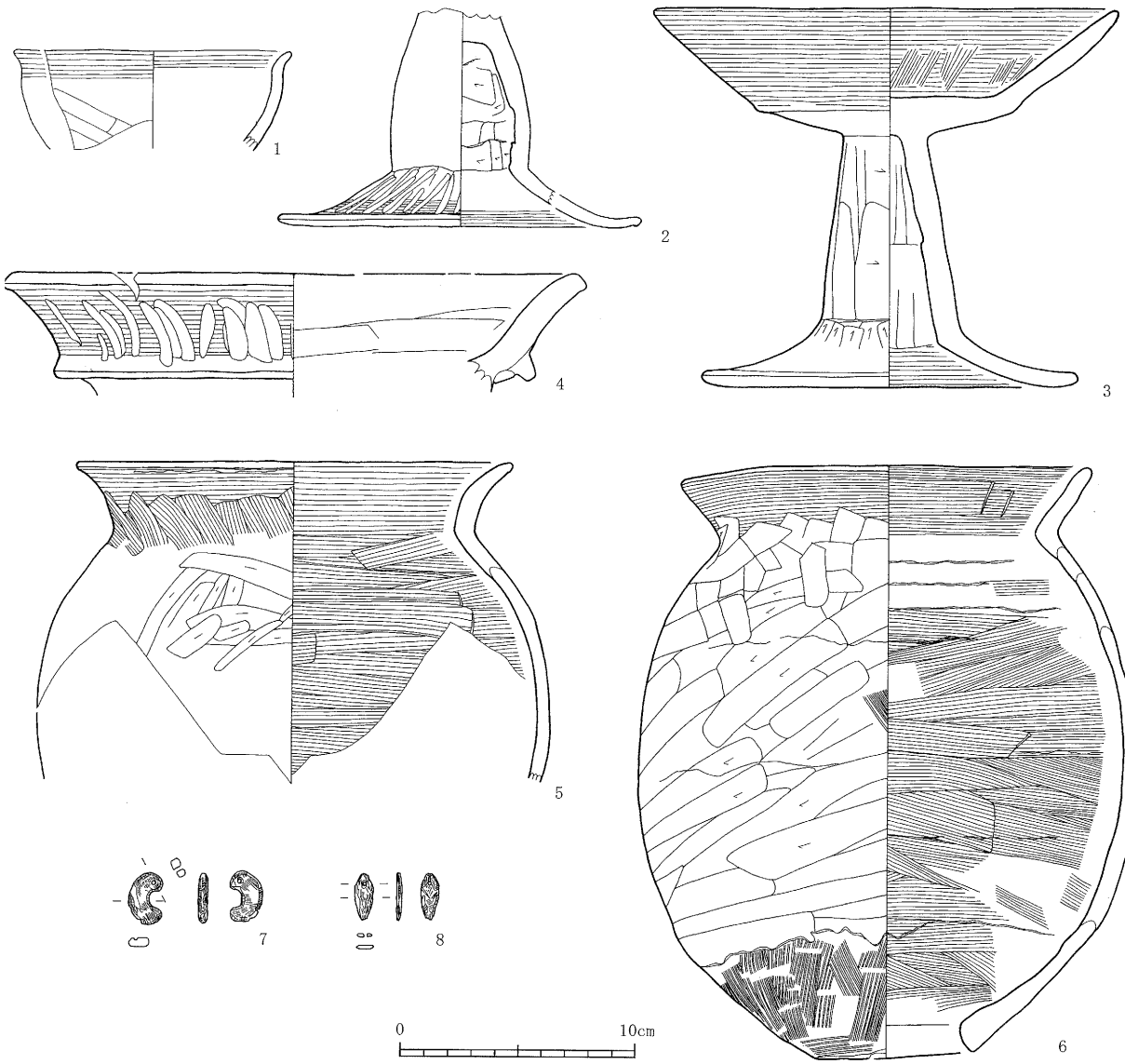
カマド以外の施設として、柱穴1基（Ｐ１）を検出した。平面形は隅丸方形で、規模は長軸51cm ×短軸48cm、深さ22cm で、底面には直径16cm の柱痕跡が残る。カマド付近のその他の遺物では、左袖外側で土師器甑（No.６）が口



層位	土色	土性	備考
SI3－1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	
2	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	炭化物ブロックをやや多量に含む。
3	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物ブロックを少量含む。
4	10YR4/4 褐色	細粒砂	
5	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	
6	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	（＝燃焼部天井崩落土）焼土ブロックを下位に多量に含む。酸化鉄粒を少量含む。
7	5YR4/6 赤褐色	砂質シルト	（＝燃焼部天井崩落土）焼土ブロック集積層。
8	5YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	（＝燃焼部天井崩落土）焼土ブロックを多量に含む。
9	10YR4/4 褐色	砂質シルト	
10	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	焼土ブロックを上位に多量に含む。
11	7.5YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	焼土ブロックを多量に含む。
12	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	（＝廃絶時の床面および掘り方埋土）
13	10YR4/6 褐色	砂質シルト	（＝廃絶時の床面および掘り方埋土）

層位	土色	土性	備考
14	5YR4/6 赤褐色	砂質シルト	（＝左袖部被熱）
15	10YR4/4 褐色	シルト質砂	（＝左袖）砂質シルト（10YR3/4）ブロックをやや多量に含む。焼土ブロックを少量含む。
16	5YR4/4 にぶい赤褐色	砂質シルト	（＝左袖）被熱し硬化赤変。
17	10YR4/6 褐色	砂質シルト	（＝左袖）
18	7.5YR3/3 暗褐色	細粒砂	（＝燃焼部・火床）
19	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	（＝構築時の貼り床）
20	10YR4/4 褐色	シルト質砂	（＝掘り方埋土）
21	10YR4/6 褐色	シルト質砂	（＝掘り方埋土）粘土（10YR4/6）ブロックを多量に含む。マンガンをやや多量に含む。
22	10YR4/4 褐色	細粒砂	（＝掘り方埋土）粘土（10YR4/6）ブロックを多量に含む。
P1－1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	
2	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	（＝柱痕）Ⅵ層ブロックを少量含む。炭化物ブロックをやや多量に含む。
3	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	Ⅵ層ブロックを下部に多量に含む。

第16図　ＳＩ３竪穴住居跡平・断面図



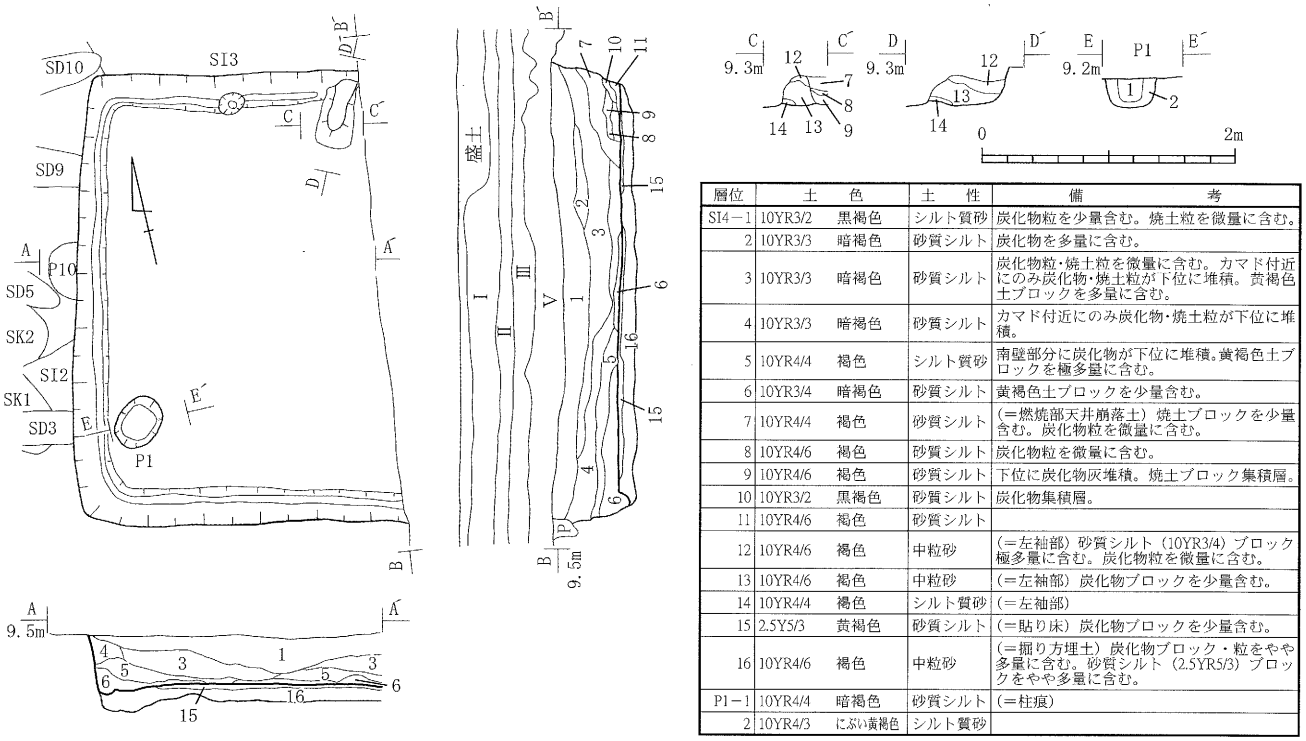
図中番号	登録番号	出土地点		分類		法量（cm）			特徴（形状・調整・含有物・材質等）	写真図版
		遺構名・位置	層位	種別	器種	器高	口径	底径		
1	C－14	SI－3		土師器	坏	(4.2)	(11.8)	－	【調整】外面：口縁－ヨコナデ、体－ケズリ　内面：口縁－ヨコナデ、体－ヘラナデ	10－1
2	C－10	SI－3・支脚	支脚上	土師器	高坏	(9.3)	－	15.3	【調整】外面：裾－ヨコナデ→ミガキ　内面：脚－ケズリ、裾－ヨコナデ	10－2
3	C－9	SI－3・支脚	燃直	土師器	高坏	16.2	19.5	15.8	【調整】外面：坏－ケズリ→ナデ、脚－ケズリ、裾－ケズリ　内面：ヨコナデ→擬痕、脚－ケズリ、裾－ヨコナデ	10－3
4	C－13	SI－3		土師器	甕	(5.1)	(23.8)		【形状】有段口縁　【調整】外面：ヨコナデ→ミガキ　内面：ヨコナデ	10－4
5	C－12	SI－3		土師器	甕	(13.7)	18.2		【調整】外面：口縁－ヨコナデ→ヘラナデ、胴－ケズリ　内面：口縁－ヨコナデ、胴－ヘラナデ	10－5
6	C－11	SI－3		土師器	甑	25.3	17.4	6.9	【調整】外面：口縁－ヨコナデ、胴－ハケメ（下半に残存）→ケズリ　※上部と下部に接合痕残存　内面：口縁－ヨコナデ、胴－ヘラナデ※輪積痕残存	10－6
7	K－5	SI－3		石製模造品	勾玉	長：2.2	幅：1.5	厚：0.4		10－7
8	K－6	SI－3		石製模造品	剣形	長：1.95	幅：0.75	厚：0.18		10－8

第17図　SI3竪穴住居跡出土遺物

縁部を西壁側に傾け、左袖構築土にくいこむような形で出土した。

遺物は、カマド近辺で出土した遺物のほかは、堆積土中から、土師器坏片約20点、須恵器坏片３点、甕片約60点が出土した。図示した遺物は８点である。第17図２の脚裾部は横ナデ後放射状に磨かれる。４は有段口縁土師器壺で口縁部の調整は横ナデ後、指頭ほどの幅で縦方向に磨かれる。６の土師器甑は粘土紐輪積み痕と接合痕が明瞭に残り、口縁部から底部までを、胴下部から底部、胴下部、胴上部、胴上部から口縁部の４単位に分けて接合している。７・８は石製模造品で、７が勾玉、８が剣形でともに非常に小型である。堆積土上部で出土している。

ＳＩ４竪穴住居跡　調査区中央東寄りに位置し、東側は調査区域外に延びている。ＳＩ2･3竪穴住居跡、小溝状遺構（ＳＤ3･9溝跡）、Ｐ10と重複し、いずれの遺構よりも新しい。平面形は方形を基調としたもので、規模は南北355cm、



層位	土色	土性	備考
SI4－1	10YR3/2 黒褐色	シルト質砂	炭化物粒を少量含む。焼土粒を微量に含む。
2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	炭化物を多量に含む。
3	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	炭化物粒・焼土粒を微量に含む。カマド付近にのみ炭化物・焼土粒が下位に堆積。黄褐色土ブロックを多量に含む。
4	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	カマド付近にのみ炭化物・焼土粒が下位に堆積。
5	10YR4/4 褐色	シルト質砂	南壁部分に炭化物が下位に堆積。黄褐色土ブロックを極多量に含む。
6	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	黄褐色土ブロックを少量含む。
7	10YR4/4 褐色	砂質シルト	(＝燃焼部天井崩落土) 焼土ブロックを少量含む。炭化物粒を微量に含む。
8	10YR4/6 褐色	砂質シルト	炭化物粒を微量に含む。
9	10YR4/6 褐色	砂質シルト	下位に炭化物灰堆積。焼土ブロック集積層。
10	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	炭化物集積層。
11	10YR4/6 褐色	砂質シルト	
12	10YR4/6 褐色	中粒砂	(＝左袖部) 砂質シルト (10YR3/4) ブロック極多量に含む。炭化物粒を微量に含む。
13	10YR4/6 褐色	中粒砂	(＝左袖部) 炭化物ブロックを少量含む。
14	10YR4/4 褐色	シルト質砂	(＝左袖部)
15	2.5Y5/3 黄褐色	砂質シルト	(＝貼り床) 炭化物ブロックを少量含む。
16	10YR4/6 褐色	中粒砂	(＝掘り方埋土) 炭化物ブロック・粒をやや多量に含む。砂質シルト (2.5YR5/3) ブロックをやや多量に含む。
P1－1	10YR4/4 暗褐色	砂質シルト	(＝柱痕)
2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質砂	

第18図　SI４竪穴住居跡平・断面図

確認面から床面までの深さは55cmである。西壁の方位はＮ－7°－Ｅで、壁は検出した三辺で85°前後と比較的急角度で立ち上がる。床面はおおむね平坦で、中央部には貼り床が認められ、周辺部では掘り方埋土上面を床面としている。カマドは北壁に設けられ、調査区内で左袖のみ検出した。左袖は北壁から56cm、高さ24cm残存しており、褐色の中粒砂を用いて構築している。

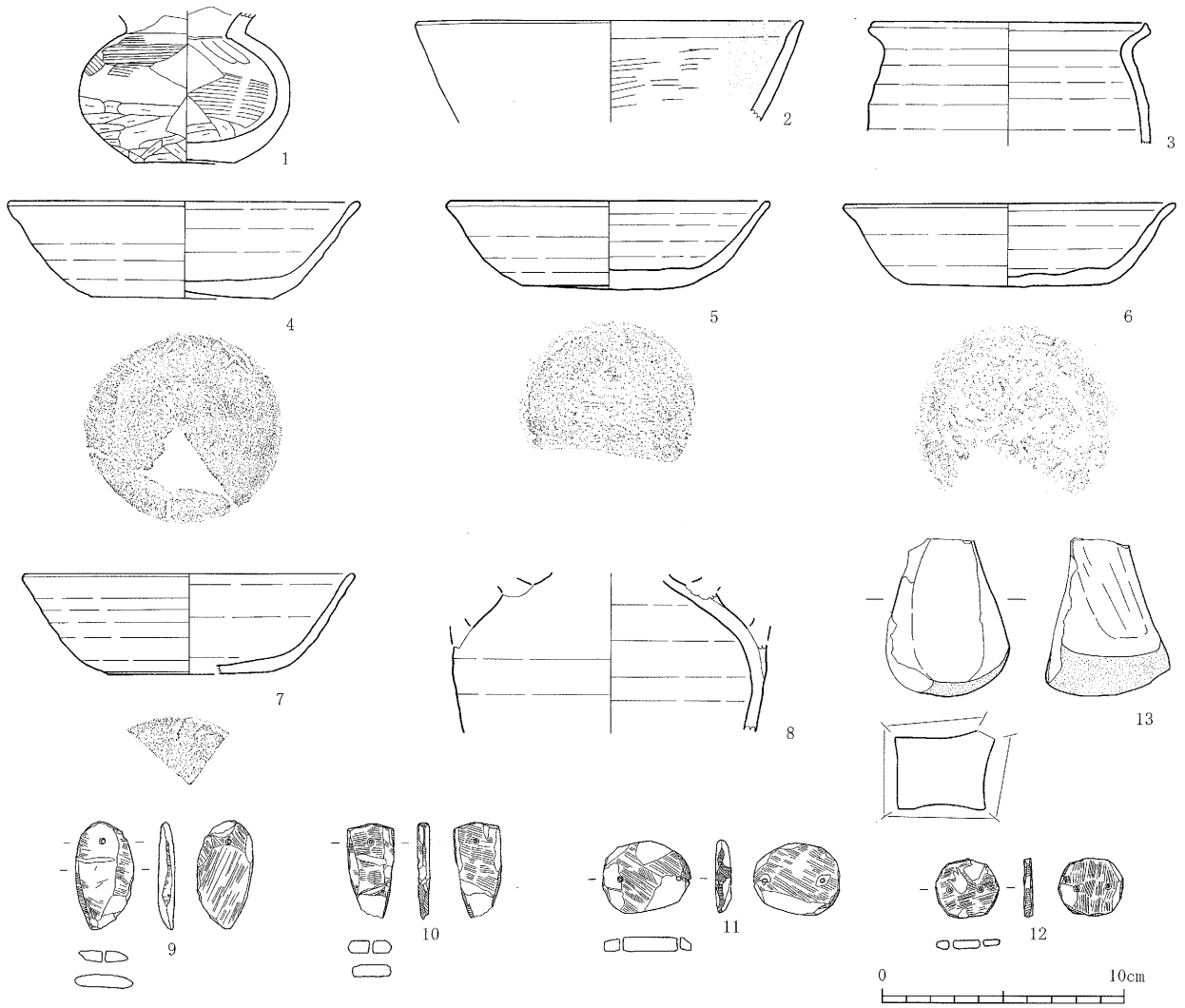
カマド以外の施設として、周溝、ピット1基（Ｐ1）を検出した。周溝は住居跡検出範囲で、カマド部分を除いて幅10～15cm、深さ８～12cmで巡っている。Ｐ1は住居跡南西の床面で検出した。平面形は南北方向にやや長い楕円形で、長軸44cm×短軸33cm、深さ23cmである。直径17cmの柱痕が確認される。

遺物は、堆積土上層（１・２層）で土師器片が平箱１箱、須恵器坏片10点、甕片５点、ロクロ土師器甕片が１点、石製模造品４点（剣形２・有孔円板２）、鉄製品１点、中層（３・４層）で須恵器坏片６点、甕片３点、土師器片平箱１箱、南壁際６層中より碗形滓が出土した。床面出土遺物はほとんどない。図示した遺物は13点である。第21図２はロクロ土師器坏で、口縁部内面にはわずかに稜があり、ミガキ後黒色処理されている。３はロクロ土師器甕で、頸部がくびれ口縁に向かって外反し、端部は受け口状になる。４～７は須恵器坏でいずれも回転ヘラ切り無調整である。８は須恵器壺類であろうか。最大径が胴部中央にあり、肩部に把手がつく。胴上部で上向いた器壁は非常に薄くなっている。

２）溝跡

ＳＤ１溝跡　調査区南側に位置し、東西は調査区域外に延びる。ＳＩ１・２竪穴住居跡、ＳＤ２溝跡と重複し、いずれの遺構よりも新しい。調査区中央付近で方位をやや変え、西側の方位はＮ－66°－Ｗ、東側はＮ－82°－Ｗである。断面形は台形で、底面は凹凸が著しい。規模は検出長766cm、溝幅40～60cm、深さ12～17cmである。遺物は土師器小片が少量、中世陶器甕の破片１点が出土した。

ＳＤ11溝跡　調査区南側に位置し、東側および南側は調査区域外に延びる。ＳＩ２竪穴住居跡、ＳＤ１溝跡、Ｐ２と重複し、ＳＤ１溝跡、Ｐ２よりも古くＳＩ２竪穴住居跡、ＳＤ２溝跡よりも新しい。堆積土は単層でＶ層が入り



図中番号	登録番号	出土地点		分類		法量（cm）			特徴（形状・調整・含有物・材質等）	写真図版
		遺構名・位置	層位	種別	器種	器高	口径	底径		
1	C－16	SI－4		土師器	坩	4.2	6.2		【調整】外面:口縁～胴上－ヨコナデ,胴下－ケズリ　内面:口縁－ヨコナデ,胴上－ユビナデ,胴下－ヘラナデ	10－9
2	D－2	SI－4	2層	ﾛｸﾛ土師器	坏	4.2	15.9	－	【調整】外面：ロクロナデ（摩滅）　内面：ミガキ→黒色処理	10－10
3	D－1	SI－4	3層	ﾛｸﾛ土師器	甕	5.2	12.3	－	【調整】外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ	10－11
4	E－5	SI－4	2層	須恵器	坏	4.1	14.3	7.4	【調整】外面：ロクロナデ　底面：回転ヘラ切り　内面：ロクロナデ	10－12
5	E－6	SI－4	2層	須恵器	坏	4.2	13.6	6.6	【調整】外面：ロクロナデ　底面：回転ヘラ切り　内面：ロクロナデ	10－13
6	E－2	SI－4		須恵器	坏	3.7	13.0	7.1	【調整】外面：ロクロナデ　底面：回転ヘラ切り　内面：ロクロナデ	11－1
7	E－4	SI－4	1、2層	須恵器	坏				【調整】外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ	11－2
8	E－3	SI－4	1層	須恵器	壺か	6.5	12.8		【調整】外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ　※把手部欠損	11－3
9	K－7	SI－4		石製模造品	剣形	長：4.45	幅：2.28	厚：0.57	1孔	11－5
10	K－10	SI－4		石製模造品	剣形	長：4.0	幅：1.95	厚：0.5	1孔	11－6
11	K－8	SI－4		石製模造品	有孔円板	長：2.99	幅：3.52	厚：0.54	2孔	11－8
12	K－9	SI－4		石製模造品	有孔円板	長：2.5	幅：2.6	厚：0.35	2孔	11－7
13	K－14	SI－4	4層	石製品	砥石	長：(6.6)	幅：6.6	厚：3.3	重量：194ｇ	11－4
	N－2	SI－4・南壁際		鉄滓	碗型滓				重量：290ｇ	11－19
	N－1	SI－4	1層	鉄製品		長：7.7		径：0.7	重量：17ｇ	11－20

第19図　SI4竪穴住居跡出土遺物

込む。方位はＮ－57°－Ｅで、検出長は520cm、溝幅は100～106cmである。断面形は、中央部が馬の背状に高く両側が低く掘り込まれる形状で、確認面からの深さは中央部で８cm、両側で20cmである。

３）土坑

ＳＫ１土坑　調査区中央に位置する。ＳＩ２竪穴住居跡、ＳＤ３・４溝跡、ＳＫ２土坑と重複し、ＳＤ３・４溝跡よりも古く、ＳＩ２竪穴住居跡、ＳＫ２土坑よりも新しい。平面形は楕円形で、規模は長軸93cm×短軸44cm、確認

面からの深さ32cmである。底面の平坦部はほとんどない。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形はすり鉢状である。堆積土は単層で、遺物は出土していない。

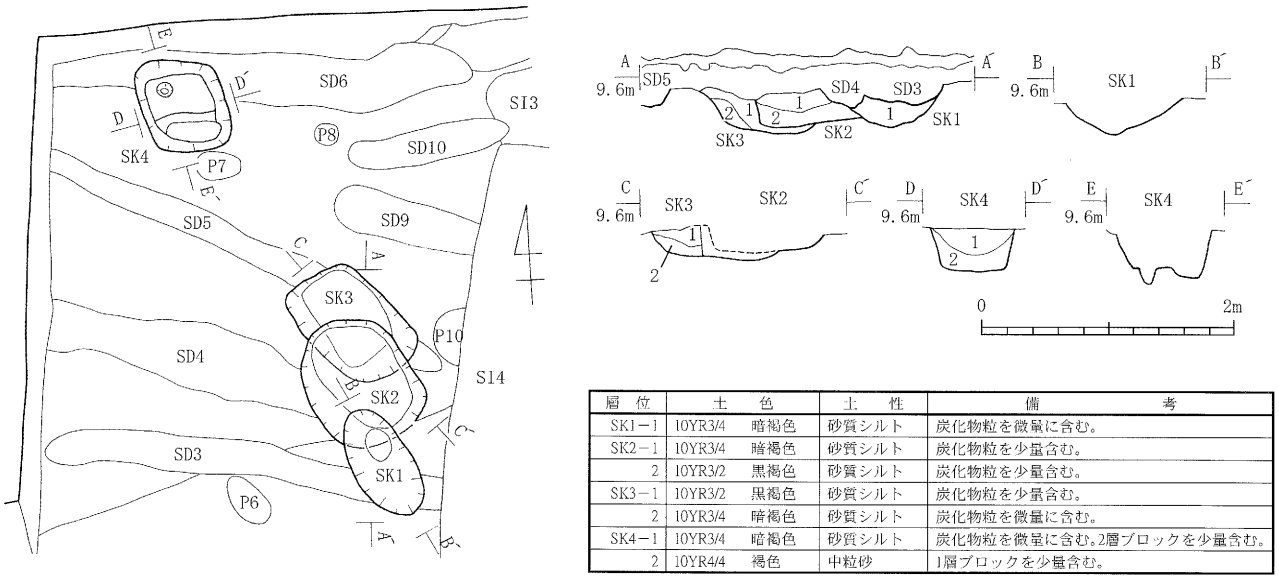
ＳＫ２土坑　調査区中央北寄りに位置する。ＳＩ２竪穴住居跡、ＳＤ４・５溝跡、ＳＫ１・３土坑と重複し、ＳＤ４・５溝跡、ＳＫ１土坑よりも古く、ＳＩ２竪穴住居跡、ＳＫ３土坑よりも新しい。平面形は楕円形で、規模は長軸106cm×短軸83cm、確認面からの深さ18cmである。底面はおおむね平坦で、壁の立ち上がりは急である。堆積土は２層で、遺物は南小泉式の高坏脚部片２点を含む土師器片約60点である。

ＳＫ３土坑　調査区中央北寄りに位置する。ＳＤ５溝跡、ＳＫ２土坑と重複し、いずれの遺構よりも古い。平面形は長方形で、規模は長軸100cm×短軸66cm、確認面からの深さ36cmである。底面は南側がやや低く、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は２層で、遺物は土師器片15点である。

ＳＫ４土坑　調査区北側に位置する。ＳＤ６溝跡と重複し同溝跡に切られている。平面形は方形で、規模は長軸74cm×短軸65cm、底面は南側が深く確認面からの深さ40cm、北側は34cmである。底面北寄りで直径12cm、深さ10cmのピットを確認した。柱痕跡の可能性がある。堆積土は２層で、１層から流紋岩製のスクレイパーが出土した。弥生土器片２点も出土しているが、土師器片数点を伴うことから、スクレイパーや弥生土器片は混入であろう。

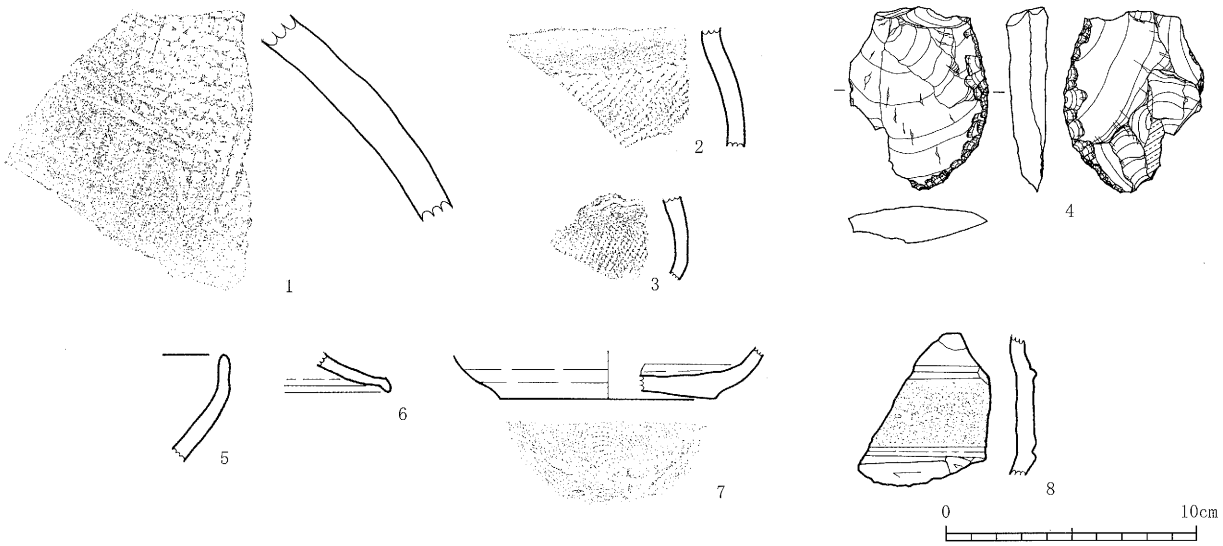
４）小溝状遺構群

調査区西半のⅥ層上面で東西方向に延びる溝跡を９条検出した。他遺構との新旧関係はＳＩ１～３竪穴住居跡、ＳＫ１～４土坑よりも新しく、ＳＩ４竪穴住居跡よりも古い。小溝どうしの重複はない。断面形は台形で、底面は凹凸が著しい。堆積土はいずれも単層で、基本層Ⅴ層によく似た暗褐色土砂質シルト土である。それぞれの方位および規模（検出長×溝幅×深さ）は以下のとおりである。ＳＤ２溝跡＝Ｎ－81°－Ｗ、450×22～30×12cm、ＳＤ３溝跡＝Ｎ－81°－Ｗ、310×22～30×14cm、ＳＤ４溝跡＝Ｎ－74°－Ｗ、270×32～54×12cm、ＳＤ５溝跡＝Ｎ－63°－Ｗ、345×18～25×６cm、ＳＤ６溝跡＝Ｎ－84°－Ｗ、325×30～50×16cm、ＳＤ７溝跡＝Ｎ－80°－Ｗ、190×30～36×19cm、ＳＤ８溝跡＝Ｎ－86°－Ｗ、170×20～28×15cm、ＳＤ９溝跡＝Ｎ－72°－Ｗ、110×25～35×14cm、ＳＤ10溝跡＝Ｎ－80°－Ｅ、124×25～28×17cmである。遺物はＳＤ７溝跡で土師器小片５点、ＳＤ８溝跡で土師器小片３点、ＳＤ９溝跡で土師器甕片２点が出土したが、図示し得る資料はない。



層　位	土　色	土　性	備　考
SK1－1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	炭化物粒を微量に含む。
SK2－1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	炭化物粒を少量含む。
2	10YR3/2　黒褐色	砂質シルト	炭化物粒を少量含む。
SK3－1	10YR3/2　黒褐色	砂質シルト	炭化物粒を少量含む。
2	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	炭化物粒を微量に含む。
SK4－1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	炭化物粒を微量に含む。2層ブロックを少量含む。
2	10YR4/4　褐色	中粒砂	1層ブロックを少量含む。

第20図　土坑平・断面図



図中番号	登録番号	出土地点		分類		法量（cm）			特徴（形状・調整・含有物・材質等）	写真図版
		遺構名・位置	層位	種別	器種	器高	口径	底径		
1	I－1	SD1		陶器	甕	-	-	-	【調整】外面：タタキ　底面：ユビナデ　内面：ユビナデ	11－9
2	B－1	SK4		弥生土器	壺・甕	-	-	-	【文様】LR縄文	11－10
3	B－2	SK4		弥生土器	壺・甕	-	-	-	【文様】LR縄文	11－11
4	K－15	SK4	1層	石器	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	長：6.02	幅：4.53	厚：1.12	【材質】流紋岩	11－12
5	C－21			土師器	坏	-	-	-	関東系土器　【調整】外面：口縁－ヨコナデ、体－ケズリ　内面：ナデ	11－13
6	E－9			須恵器	蓋	-	-	-	【調整】外面：ロクロナデ	11－14
7	E－8			須恵器	坏	-	-	-	【調整】外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り　内面：ロクロナデ	11－15
8	E－10			須恵器	コップ型土器か				【調整】外面:ロクロナデ→ケズリ　内面:ロクロナデ　【文様】2条の沈線区画内に櫛状工具による波状文	11－16
	P－1			土製品	羽口				【調整】内面：ナデ	11－17

第21図　溝跡・土坑・遺構外出土遺物

5）ピット

調査区全域で10基検出した。いずれも柱痕跡は確認できず掘立柱建物跡を構成するものはない。Ｐ１とＰ９は重複し、Ｐ１の方が新しい。ともにＳＩ１竪穴住居跡よりも新しく、Ｐ９はＳＤ７溝跡よりも古い。Ｐ２はＳＤ11溝跡よりも新しい。Ｐ３～６はＳＩ２竪穴住居跡よりも新しい。Ｐ10はＳＩ４竪穴住居跡よりも古い。またこのほか、Ｐ４・５は、ＳＤ８溝跡の一部である可能性もある。

6）遺構外出土遺物

第21図５～８に示した。５は口縁部が直立するタイプのいわゆる関東系土師器である。６は須恵器蓋で口縁端部に返りを持っている。７は須恵器坏で、底部は回転糸切りである。８はコップ型土器であろうか。上位の凸線と下位の沈線区画内に櫛歯状工具による波状文が描かれる。沈線以下は手持ちヘラケズリである。

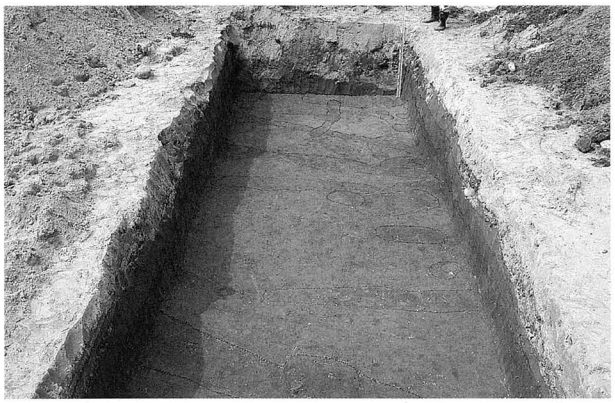
6　まとめ

①検出遺構は竪穴住居跡４軒、土坑４基、溝跡２条、小溝状遺構９条、ピット10基である。

②ＳＩ１・３竪穴住居跡は、遺構に伴う土器が出土しており、時期は古墳時代中期南小泉式期である。また、ＳＩ２竪穴住居跡は、住居跡に伴う遺物は石製模造品のみであるが、重複関係よりＳＩ１竪穴住居跡以前である。時期は同じく古墳時代中期南小泉式期であろう。

③ＳＩ４竪穴住居跡は、堆積土上層より底部回転ヘラ切りの須恵器坏、ロクロ土師器坏・甕が出土している。土器群の特徴から、住居跡の時期は平安時代前半頃と思われる。

④今調査地点の遺構群の変遷は【古墳時代中期】ＳＩ２竪穴住居跡→ＳＩ１・３竪穴住居跡【古墳時代中期以降古代まで】ＳＫ１～４土坑→小溝状遺構群⇒【古代】ＳＩ４竪穴住居跡⇒【中世以降】ＳＤ１溝跡となる。



1　拡張前検出状況（南から）

2　完掘状況全景（南から）

3　拡張部検出状況（北から）

4　完掘状況全景（北から）

5　拡張部検出状況（南から）

6　完掘状況全景（南から）

7　SI 1 竪穴住居跡完掘状況（西から）

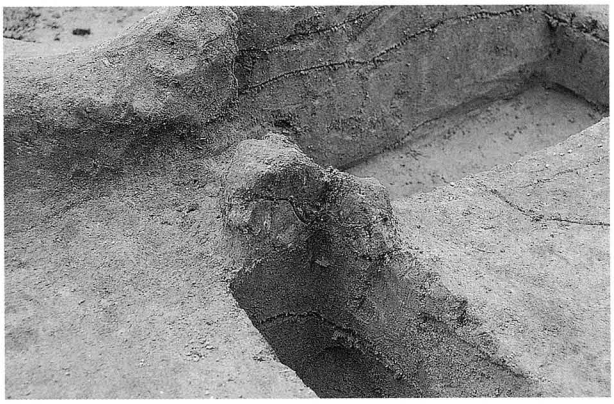
8　SI 1 竪穴住居跡南北断面（西壁）

図版 2　遺構検出・完掘状況、SI 1 竪穴住居跡

1　カマド・貯蔵穴（西から）

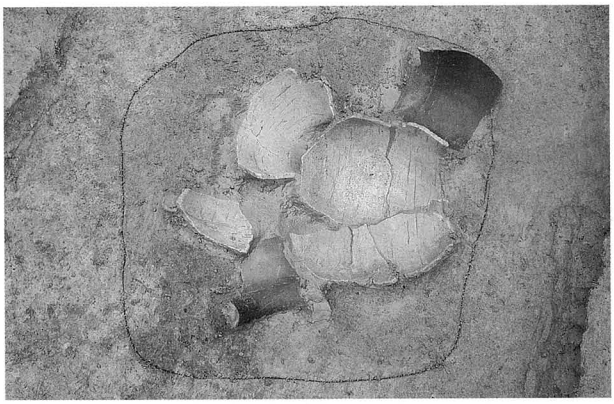
2　カマド断面（東から）

3　支脚(土師器甕片)出土状況（西から）



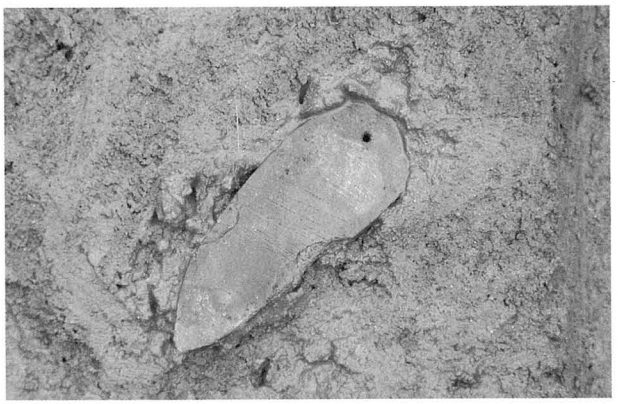
4　支脚断ち割り状況（北東から）

5　カマド断ち割り状況（北西から）



6　貯蔵穴遺物出土状況（西から）

7　掘り方（西から）



8　石製模造品(No.10)出土状況（西から）

図版３　SI1竪穴住居跡

1　完掘状況（南から）

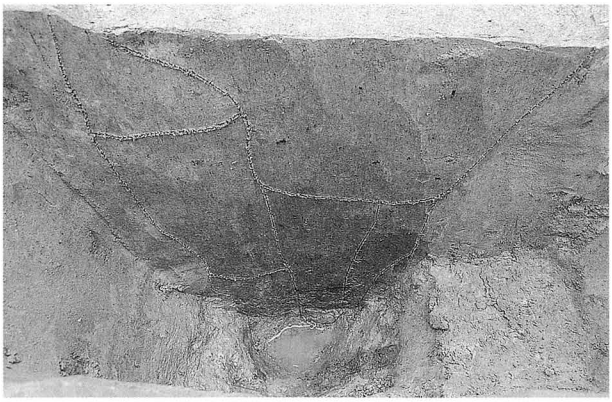
2　東西断面（A－A’）

3　南北断面（下層調査地点）

4　P１断面（西から）

5　P１完掘状況（西から）

図版４　SI2竪穴住居跡

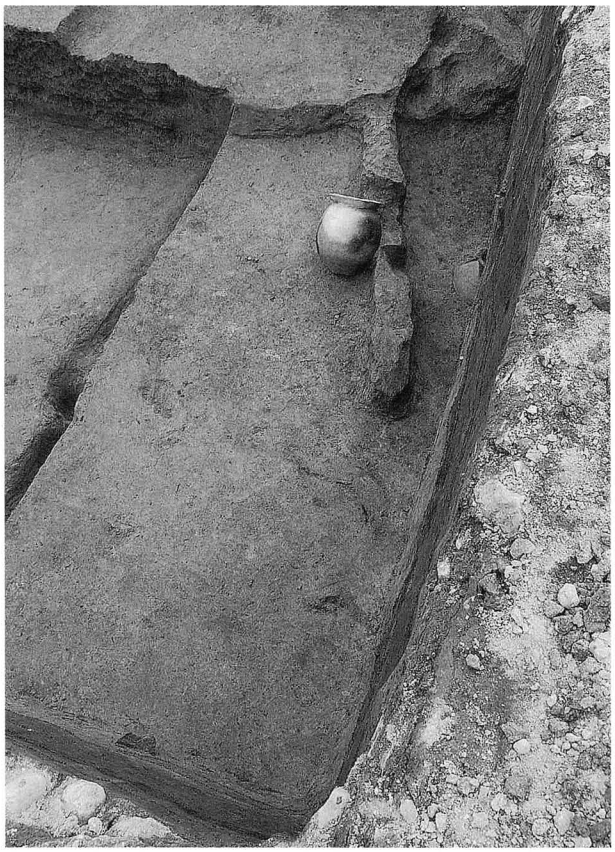


1　P2断面（西から）

2　P2完掘状況（西から）

3　P3断面（西から）

4　P3完掘状況（西から）

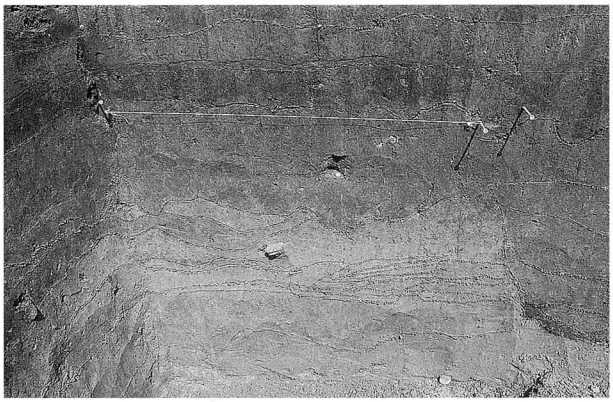


5　完掘状況（東から）

6　カマド（東から）

図版5　SI2・3竪穴住居跡

1　東西断面（B－B’）

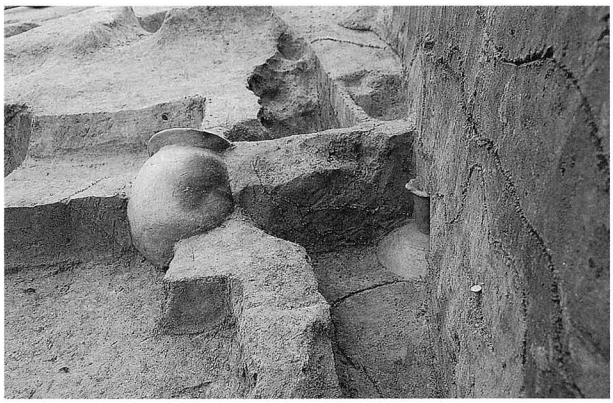


2　南北断面（A－A’）

3　カマド遺物出土状況（南から）

4　支脚(No.2・3)出土状況（南東から）

5　カマド主軸断面（E－E’）



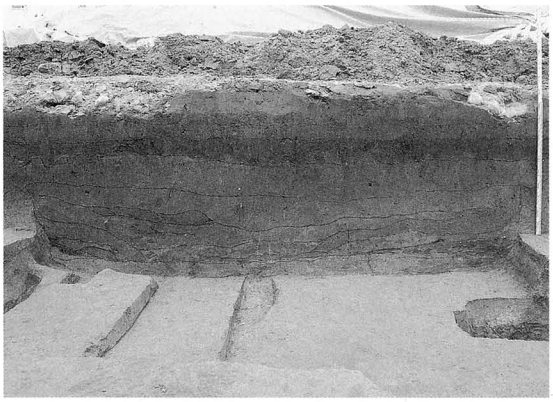
6　カマド横断面（D－D’）

7　カマド袖切開（F－F’）

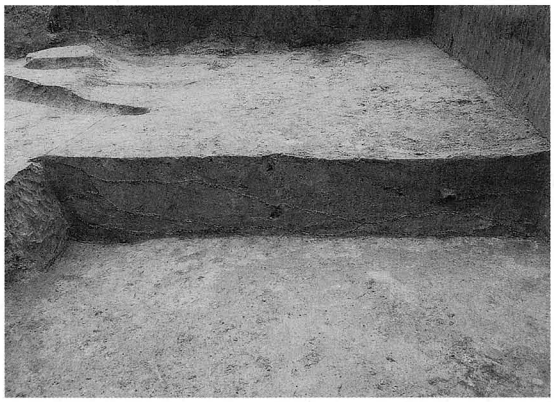
8　P1断面（C－C’）

図版6　SI3竪穴住居跡

1　完掘状況（南から）

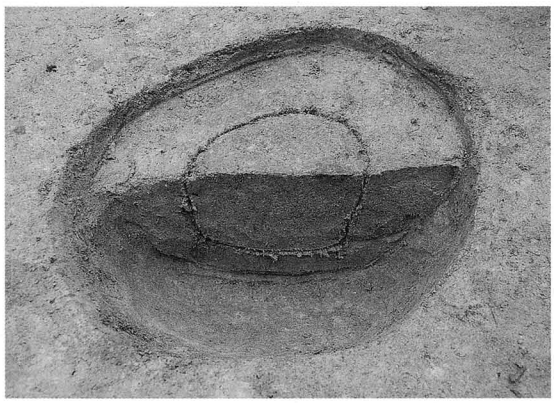


2　南北断面（B－B’）



3　東西断面（A－A’）

4　カマド完掘状況（南から）

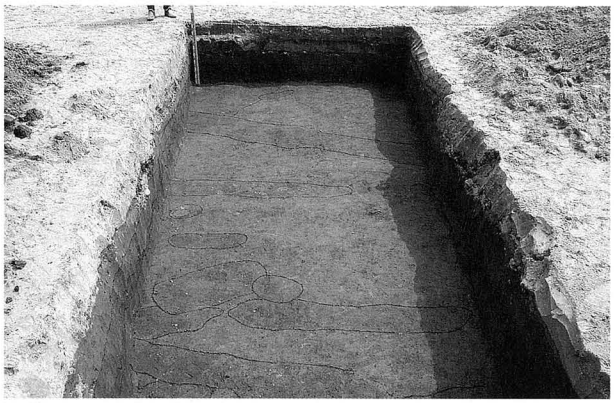


5　P1断面（北から）

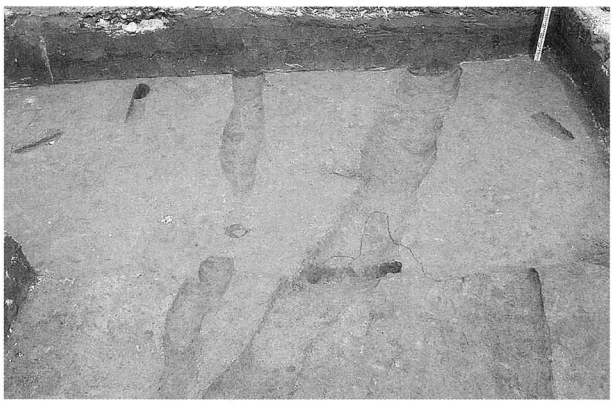
図版７　SI4竪穴住居跡

1　溝跡完掘状況（南から）

2　SD１溝跡完掘状況（西から）



3　小溝状遺構群検出状況（北から）



4　SD１溝跡完掘状況（西から）

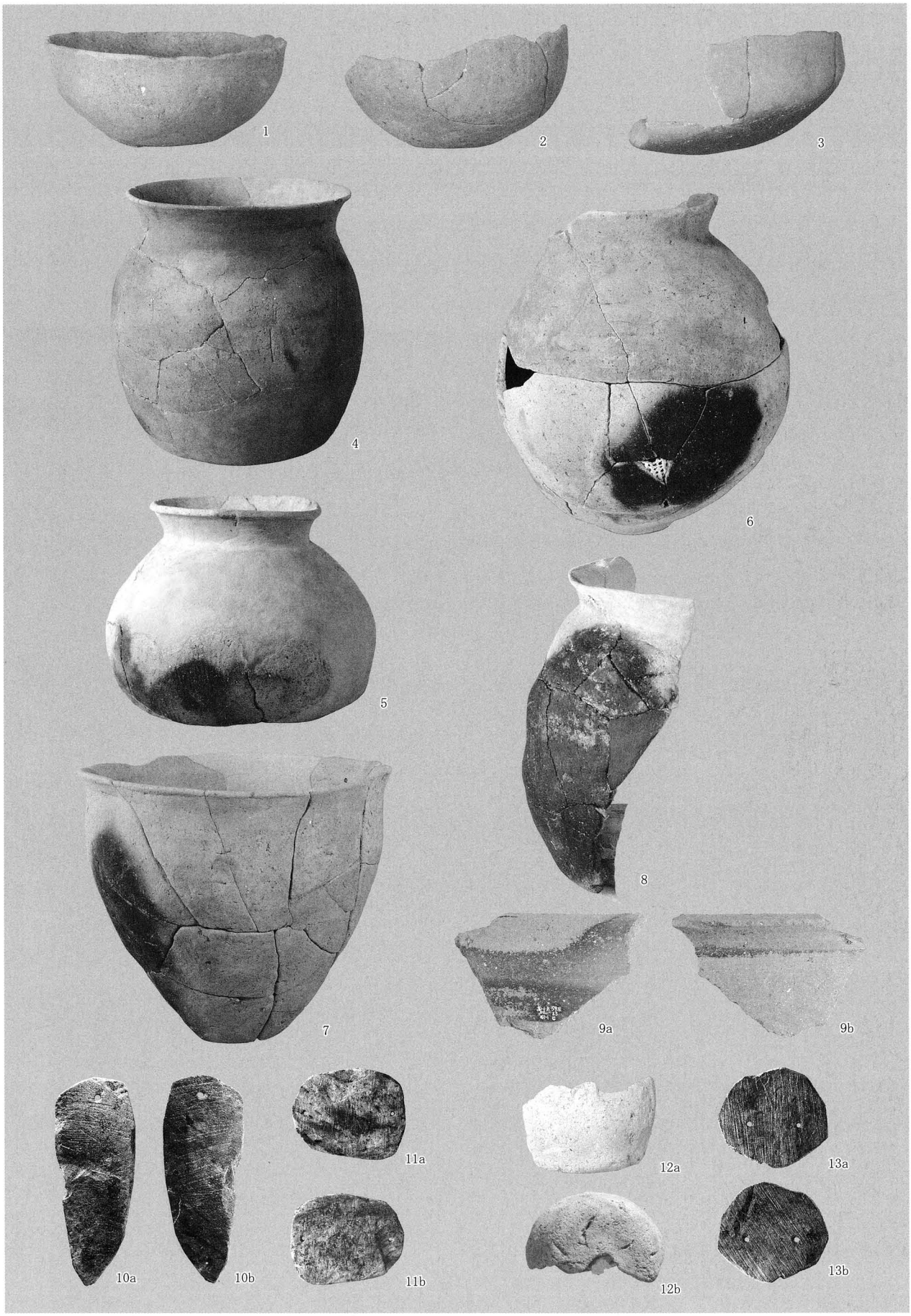
5　SD６・９・10溝跡完掘状況（西から）

6　SK３土坑完掘状況（西から）

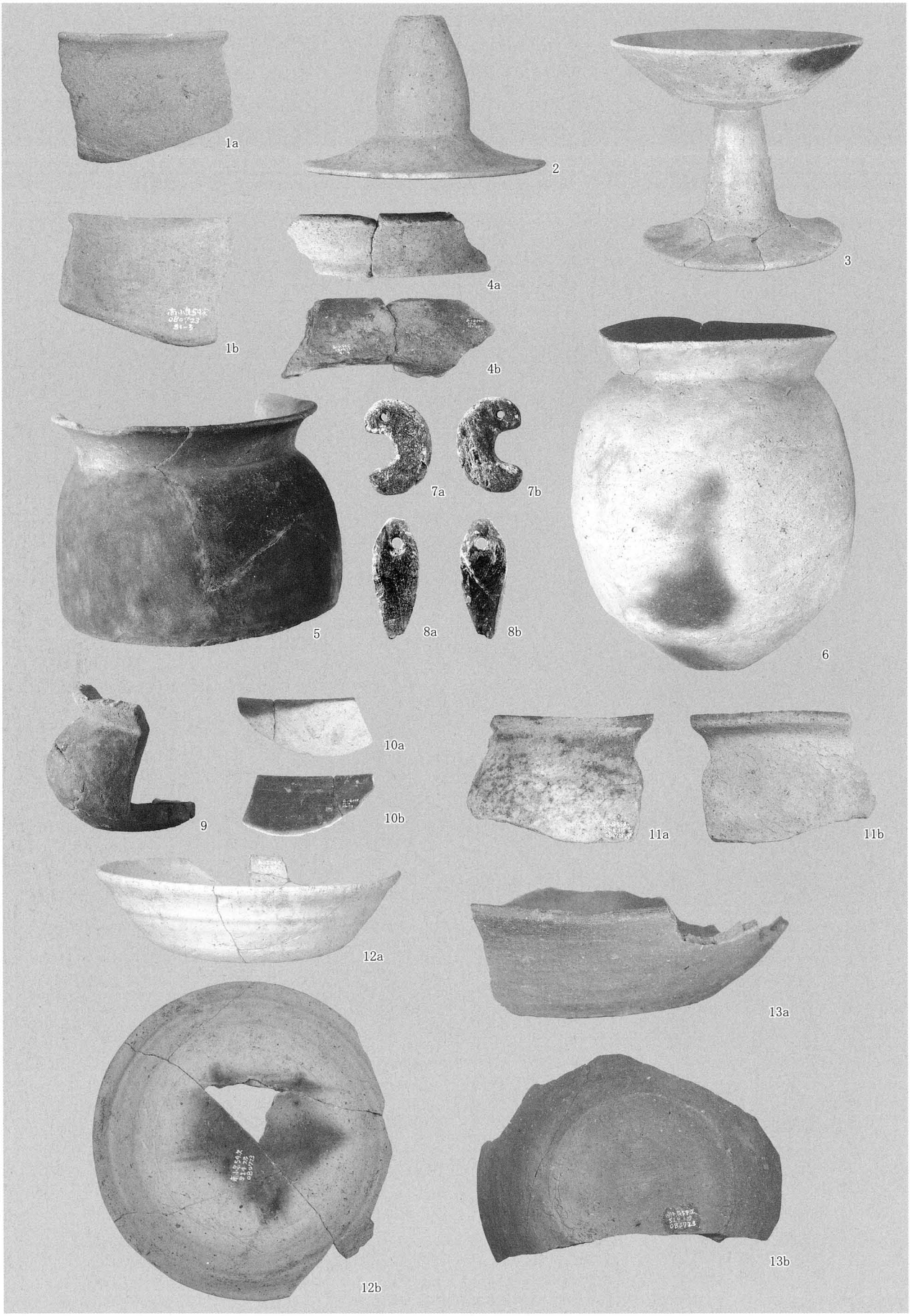
7　SK４土坑完掘状況（南から）

8　SK４土坑遺物出土状況（北西から）

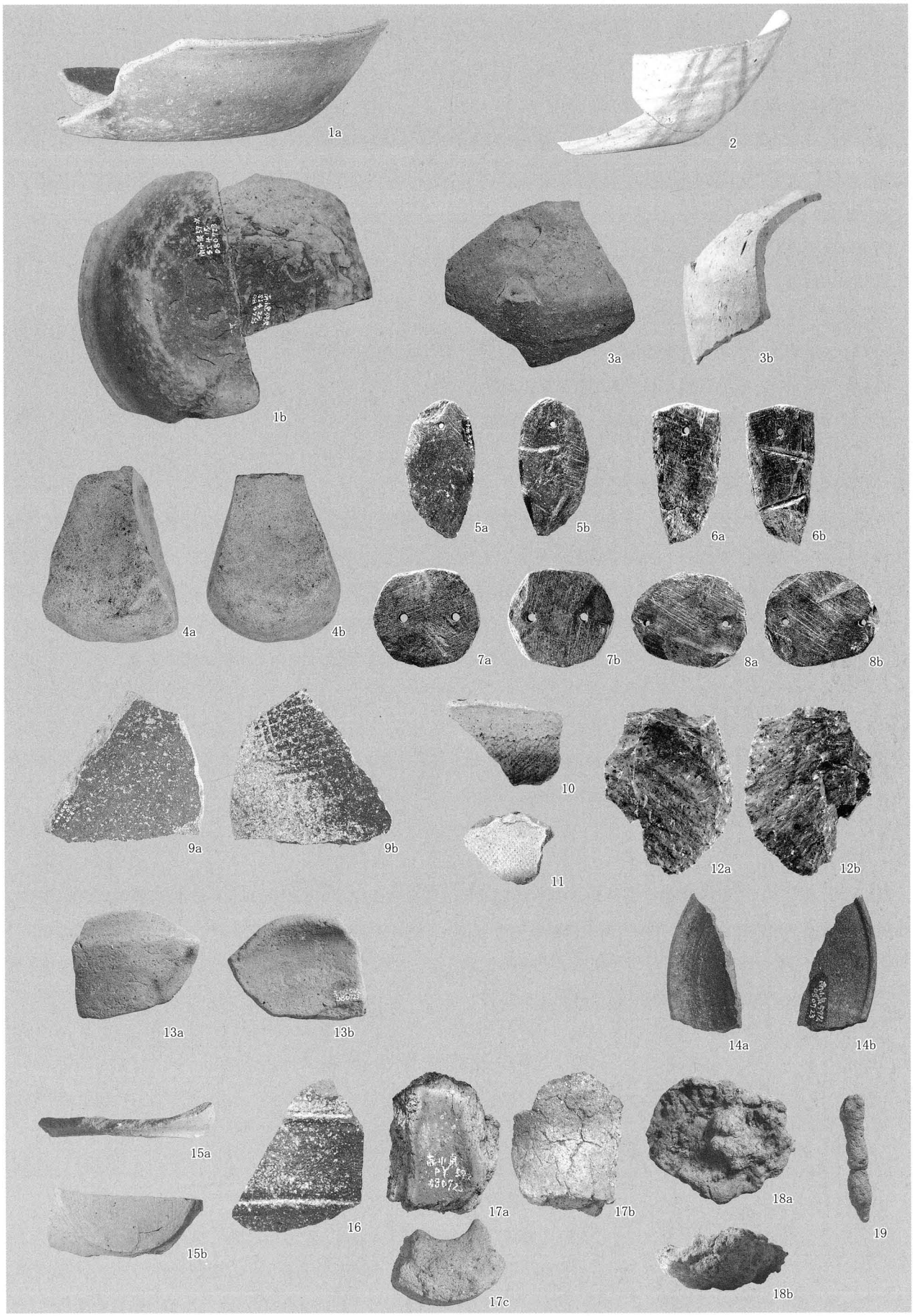
図版８　溝跡、小溝状遺構、土坑



図版９　SI１・２竪穴住居跡出土遺物



図版10　SI 3 ・ 4 竪穴住居跡出土遺物



図版11　SI 4 竪穴住居跡・溝跡・土坑・遺構外出土遺物

Ⅳ　南小泉第60次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点　仙台市若林区遠見塚２丁目292－２
調 査 期 間　平成20年９月24日～９月26日
調査対象面積　48.02㎡
調 査 面 積　約12㎡
調 査 原 因　個人住宅建設工事
調 査 主 体　仙台市教育委員会
調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　主事　加藤　隆則　　文化財教諭　佐藤　正弥

2　調査に至る経過と調査方法

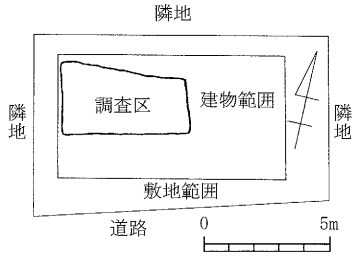
今回の調査は、平成20年９月10日付けで、地権者より木造平屋建て個人住宅の建築工事に係る発掘届（H20教生文184－170）が提出されたので、確認調査を実施し、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は平成20年９月24日～９月26日に実施した。建物建築予定地に東西５ｍ×南北2.5ｍの調査区を設定して確認調査を行なったところ、Ⅲ層上面で遺構を検出したため引き続き本調査を実施した。遺構を掘削、記録後、南西隅の撹乱部分で下層の堆積状況を確認したところ遺物が発見されたため、調査区全面の下層調査を実施した。

3　遺跡の位置と環境

遺跡の位置と環境については「Ⅱ　南小泉第58次発掘調査報告書」を参照されたい。今回の調査地点は遺跡範囲の北東側に位置し、遠見塚古墳の北方150ｍの地点である。

4　基本層序

基本層は盛土下に５層を確認した。Ⅰ・Ⅱ層が砂質シルトでⅢ層のにぶい黄褐色シルト質砂が遺構確認面である。Ⅲ層以下の調査区全域にＳＸ1性格不明遺構の堆積土（１～13層）があり、その下層にⅣ・Ⅴ層がある。Ⅳ層は鉄分を多量に含む黄褐色粘土層で、ＳＸ１性格不明遺構およびＳＤ３溝跡が掘り込まれている。Ⅴ層は灰黄褐色粗粒砂層で、調査区西壁中央を一部深掘りして確認した。



第22図　調査区配置図

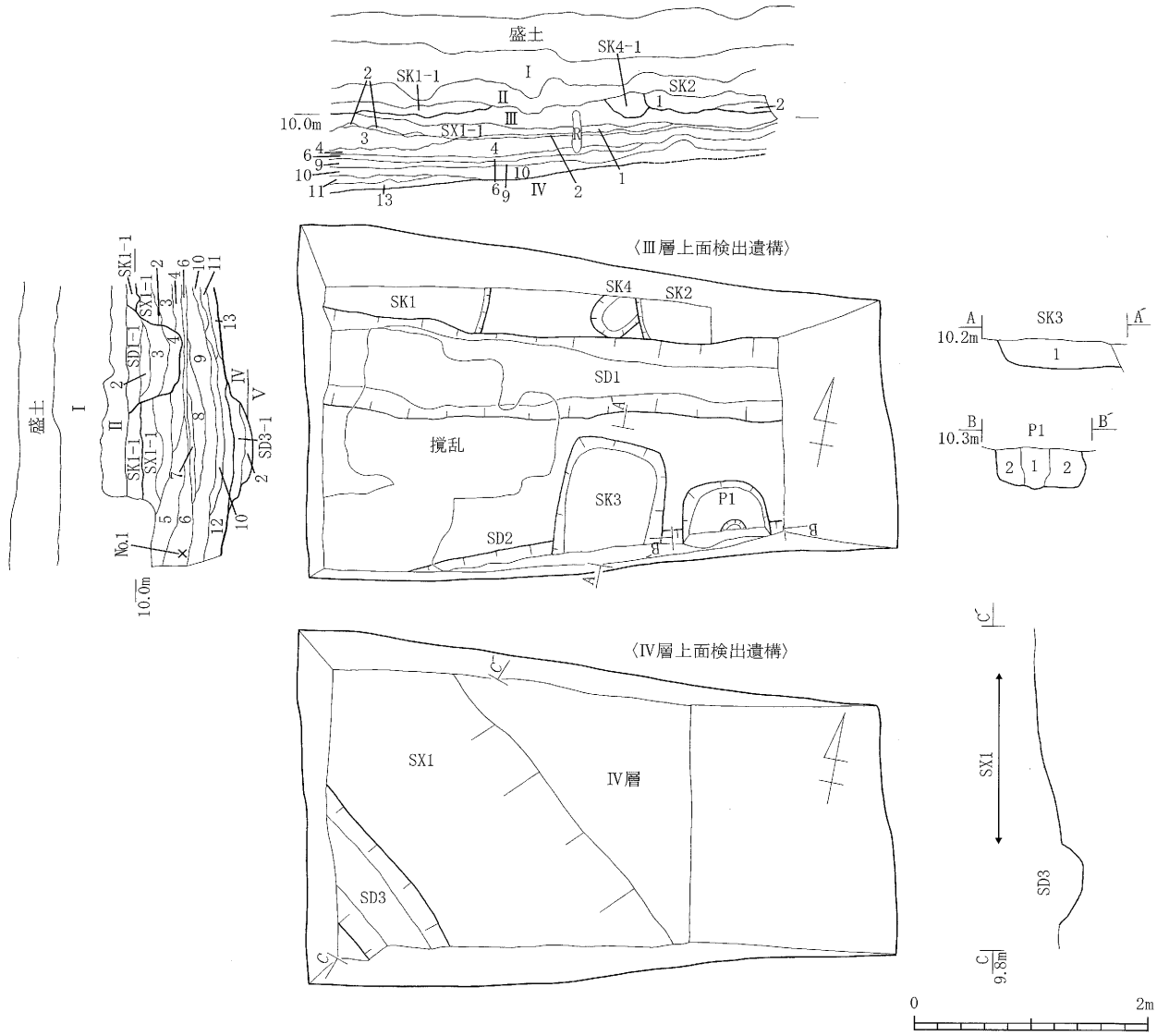
5　発見遺構と出土遺物

Ⅲ層上面で溝跡２条、土坑４基、ピット１基を検出し、Ⅳ層上面で溝跡１条、性格不明遺構を検出した。

①Ⅲ層上面検出遺構

１）溝跡

ＳＤ１溝跡　調査区北側に位置し、東西は調査区域外に延びる。ＳＫ１・２・４土坑と重複し、いずれの遺構よりも新しい。規模は検出長で390㎝、幅60～100㎝、深さ40～50㎝で、方位はＮ－83°－Ｗである。断面形は台形で、



基本層	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	現代遺物を含む旧表土。
Ⅱ	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	旧耕作土。下部乱れ。
Ⅲ	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト質砂	(＝遺構確認面) 酸化鉄を多量に含み、下部に沈着。
Ⅳ	10YR5/6　黄褐色	粘土	(＝SD3、SX1の遺構確認面) 西側に傾斜。
Ⅴ	10YR5/2　灰黄褐色	粗粒砂	酸化鉄を極多量に含む。

層　位	土　色	土　性	備　考
SD1-1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質砂	
2	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	
3	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	
4	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト質砂	
SD2-1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質砂	
SK1-1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	10YR4/3シルト質砂ブロックを多量に含む。
SK2-1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	酸化鉄ブロックを少量、中粒砂を多量に含む。
SK3-1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	上部に10YR4/4褐色土を多量に含む。
SK4-1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	酸化鉄ブロックを少量含む。
P1-1	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	(＝柱痕)
2	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	

層　位	土　色	土　性	備　考
SX1-1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質砂	酸化鉄をやや多量に含む。
2	10YR4/6 褐色	シルト質砂	酸化鉄を少量含む。
3	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色砂を多量に含む。
4	10YR4/4 褐色	シルト質砂	酸化鉄を少量含む。
5	10YR4/4 褐色	シルト質砂	酸化鉄、砂をやや多量に含む。
6	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	炭化物ブロックを微量含む。
7	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒をやや多量に含む。8層よりも暗い。
8	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒をやや多量、炭化物粒を少量含む。
9	10YR4/4 褐色	細粒砂	酸化鉄粒を少量、炭化物粒を微量含む。
10	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄粒を多量、炭化物粒を微量含む。
11	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を少量含む。
12	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒、炭化物粒を少量含む。
13	10YR2/3 暗褐色	シルト質粘土	Ⅳ層ブロックを多量、酸化鉄を微量含む。
SD3-1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	酸化鉄をやや多量、炭化物ブロックを多量に含む。
2	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を多量に含む。Ⅳ層粒を多量に含む。

第23図　遺構平・断面図

底面レベルは西側が深く東側が浅い。堆積土は４層確認した。遺物は、古墳時代前期の台付甕脚部を含む土師器片数点のほか、江戸時代後期の土瓶の小片１点が出土した。

ＳＤ２溝跡　調査区南側に位置し、東西および南側は調査区域外に延びる。北側立ち上がりのみの検出のため、掘り込み面や溝幅、深さ等は不明である。SK3土坑、P1と重複し両遺構よりも古い。方位はS−84°−Wで、出土遺物はなく時期は不明である。

2）土坑

ＳＫ１土坑　調査区北西端に位置し、北側および西側は調査区外に延びている。ＳＤ１溝跡よりも古く、南側は同溝跡や撹乱に壊されており、平面形および規模は不明である。撹乱の影響で平面範囲は捉えられなかったが、土層断面より南北は180cm以上、東西は140cm以上の規模になると思われる。底面はおおむね平坦で、確認面からの深さは15cmである。堆積土は単層の暗褐色砂質シルトである。遺物は土師器小片が十数点出土しているが、時期は不明である。

ＳＫ２土坑　調査区北東端に位置し、北側および東側は調査区外に延びている。ＳＤ１溝跡、ＳＫ４土坑と重複し、南側は同溝跡に切られ、西側はＳＫ４土坑を切っている。堆積土は単層の褐色砂質シルトである。検出部の規模は長軸60cm×短軸40cm、確認面からの深さ５～15cmである。遺物は土師器小片が出土している。

ＳＫ３土坑　調査区南壁際中央に位置し、南側は撹乱に壊されている。ＳＤ２溝跡と重複し、本遺構の方が新しい。平面形は長方形と考えられ、検出部の規模は長軸100cm×短軸90cm、深さ30cmである。底面はおおむね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は土師器小片が少量出土したほか、鉄滓が微量出土している。

ＳＫ４土坑　調査区北壁際東寄りに位置する。ＳＤ１溝跡、ＳＫ２土坑と重複し、いずれの遺構よりも古い。平面形は隅丸方形と考えられる。検出部の規模は長軸40cm×短軸30cm、確認面からの深さ20cmである。遺物は南小泉式期の土師器高坏脚部片を含む土師器片10点である。

3）ピット

Ｐ１　調査区南東に位置し、南側は一部撹乱に壊され調査区域外に延びている。ＳＤ２溝跡と重複し、同溝跡より新しい。平面形は隅丸方形と考えられる。底面はおおむね平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出部の規模は長軸75cm×短軸50cm、深さ35cmである。堆積土は１層が柱痕である。遺物は土師器小片が２点出土したが、図示し得なかった。

②Ⅳ層上面検出遺構

1）溝跡

ＳＤ３溝跡　調査区南西側に位置し、南北は調査区域外に延びる。規模は検出長で170cm、溝幅は上端部で80～90cm、底面で35～40cm、深さは15～20cmである。掘り込み面はⅣ層上面で、断面形は台形、堆積土は２層確認した。遺物は、堆積土中より弥生土器片５点のほか、ハケメ調整のある土師器片が20点出土した。このうち図示したのは弥生土器３点（第24図４・８・11）である。

2）性格不明遺構

ＳＸ１性格不明遺構　Ⅳ層上面がＳＤ３溝跡に向かって傾斜し、ここに堆積した層の分布方向が同溝跡に一致している。Ⅲ層からⅣ層の間に堆積した13層をＳＸ1性格不明遺構の堆積土と捉えた。堆積土は上部がシルト質砂、下部が粘土質シルトを基調とし、間に細粒砂を挟んでいる。

出土遺物は土師器片約90点、弥生土器片約20点が出土した。堆積層上部（１～６層）では古墳時代前～中期の土師器片が約60点出土したほか、調査区西壁際の６層で有段口縁土師器壺（第24図№１）、７層で土師器甕・壺底部片２点が出土した。堆積層下部では、８・９層で弥生土器片２点のほか、12層で弥生土器片１点、10～13層で中期後半十三塚式～後期前半天王山式期の破片約10点が出土するが、各層で古墳時代の土師器片が混入している。このうち、図示したのは土師器壺１点、弥生土器５点の計６点である。

③出土遺物

第24図に示した遺物は11点である。1は有段口縁土師器壺で胴部上半までの破片である。2～11はＳＤ3溝跡および

図中番号	登録番号	出土地点		分類		法量（cm）			特徴（形状・整形・調整）、時期		写真図版
		遺構名・位置	遺構層	種別	器種	器高	口径	底径			
1	C－1	SX－1	6層	弥生土器	壺	(15.0)	17.0	－	【調整】外面：口縁－指頭押圧後ヨコナデ　内面：頸－指頭押圧後ケズリ		13－1
2	B－4	SX－1	下層	弥生土器	壺・甕	－	－	－	十三塚式 【文様】重菱形文、2本同時		13－2
3	B－11			弥生土器	壺・甕	－	－	－	十三塚式 【文様】重菱形文か、2本同時		13－3
4	B－9	SD－3	1層	弥生土器	壺・甕	－	－	－	【文様】2条の沈線区画、LR縄文		13－4
5	B－6	SX－1	下層	弥生土器	壺・甕	－	－	－	【文様】LR縄文		13－5
6	B－8			弥生土器	壺・甕	－	－	－	【文様】LR縄文、内面 【調整】内面：ナデ		13－6
7	B－1	SX－1	下層	弥生土器	壺・甕	－	－	－	同一個体	【文様】外面：指頭連続押引（左→右）、口唇：LR縄文、内面：LR縄文	13－7
8	B－10	SD－3	1層	弥生土器	壺・甕	－	－	－	同一個体	【文様】外面：指頭連続押引（左→右）	13－8
9	B－3	SX－1	下層	弥生土器	壺・甕	－	－	－	同一個体	【文様】外面：指頭連続押引（左→右）	13－9
10	B－2	SX－1	下層	弥生土器	壺・甕	－	－	－	同一個体	【文様】外面：指頭連続押引（左→右）	13－10
11	B－7	SD－3	2層	弥生土器	壺・甕	－	－	－	同一個体	【文様】外面：指頭連続押引（左→右）	13－11

第24図　出土遺物

ＳＸ1性格不明遺構で出土した弥生土器片で、2・3は中期後半十三塚式期の壺・甕、7～11は口縁部付近に連続押引文を施す天王山式の甕で、同一個体と思われる。7は口縁端部および内面にＬＲ縄文が施される。

6　まとめ

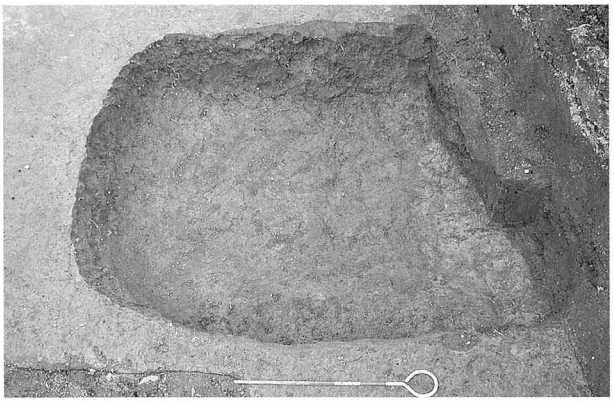
調査の結果、Ⅲ層上面で溝跡２条、土坑４基、柱痕跡のあるピット１基、Ⅳ層上面で溝跡１条、性格不明遺構を検出した。ＳＸ１性格不明遺構は、上層（１～６層）で古墳時代前期から中期の土師器片が出土し、中層で古墳時代前期の土師器片が出土する。また下層では土師器片を伴いながら弥生土器片が出土する。一方、ＳＤ３溝跡でも、古墳時代前期の土師器甕片を微量伴いながら弥生土器の破片がややまとまって出土しており、ＳＸ１性格不明遺構からＳＤ３溝跡の出土遺物は連続している。同一個体と思われる弥生土器片が両遺構から出土していることも、この連続の一担を示すものと思われる。調査区が狭く断定は避けねばならないが、ＳＤ３溝跡とＳＸ１性格不明遺構は、以上の出土遺物の連続に加え、堆積層の連続や走行方向の一致から本来一連の遺構である可能性がある。遺構の時期は、下層で古墳時代前期の土師器片を伴い、上層では古墳時代中期までの土器しか含まないことから、古墳時代前期頃まで遡り、中期頃までに堆積していったと考えられる。またⅢ層上面検出遺構は古墳時代中期以降のものであろう。

1　Ⅲ層上面遺構完掘状況（東から）

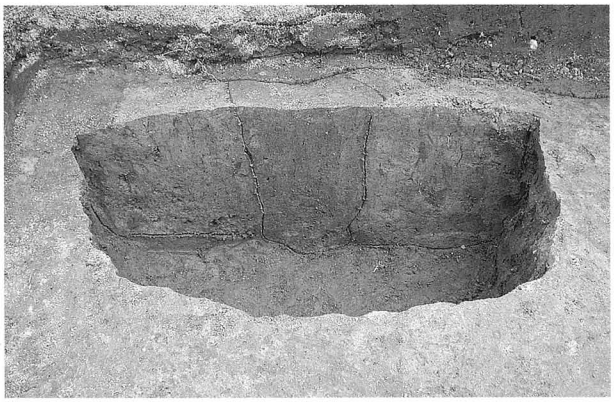
2　SD1溝跡完掘状況（東から）

3　SK１土坑完掘状況（南から）

4　SK２・４土坑完掘状況（南から）

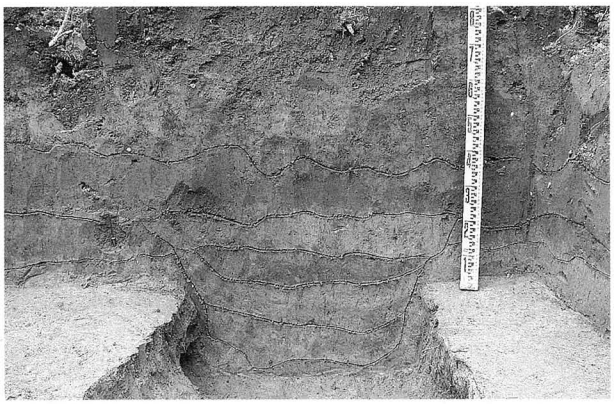


5　SK３土坑完掘状況（西から）



6　P１断面（北から）

図版12　溝跡、土坑、ピット



1　SD1溝跡断面（東壁）

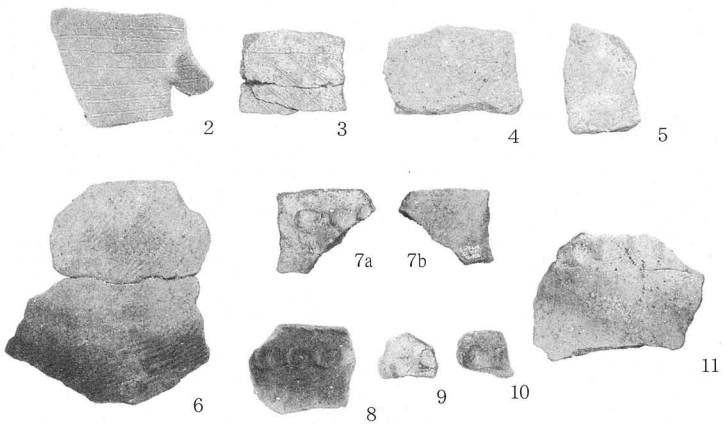
2　SX1性格不明遺構検出状況（東から）

3　調査区東壁

4　調査区北壁

5　調査区東壁および土師器甕(No.１)出土状況（東から）

6　土師器甕(No.１)



7　弥生土器

図版13　遺構・調査区断面、出土遺物

Ⅴ　鴻ノ巣遺跡第11次調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　鴻ノ巣遺跡（宮城県遺跡番号01034）
調 査 地 点　　仙台市宮城野区岩切字三所北124－５
調 査 期 間　　平成20年５月19日～５月23日
調査対象面積　　72㎡
調 査 面 積　　15㎡
調 査 原 因　　個人住宅建設
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主事　鈴木　隆　　文化財教諭　熊谷　敏哉

2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成20年４月11日付けで地権者より提出された発掘届（H20教生文第184－11号）に基づき実施した。確認調査は平成20年５月19日に着手した。

調査区は東西５ｍ×南北３ｍに設定した。重機により盛土・Ⅰａ層・Ⅰｂ層を掘削した。Ⅱ層上面で人力により遺構検出作業を実施した。随時写真記録を行い、平面図・断面図を作成し、調査を終了した。

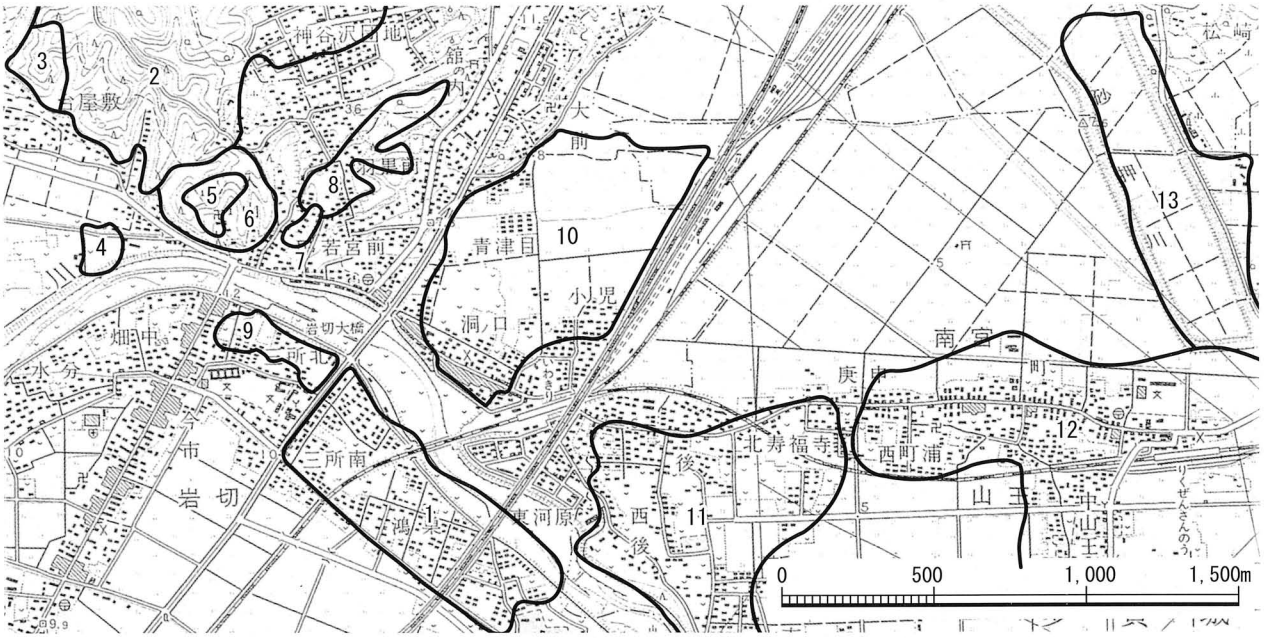
3　遺跡の位置と環境

泉ヶ岳を源流とし、西から東へ丘陵地帯を開析して流れる七北田川は、土砂の堆積と氾濫を繰り返しながら、両岸に自然堤防を形成した。鴻ノ巣遺跡は市の中心部の北東約７㎞、この七北田川右岸の自然堤防上に位置する。今回の調査地点における標高は約8.2mである。

遺跡周辺の歴史的環境を見ると、本遺跡の対岸の自然堤防上に古墳時代中期の新田遺跡（多賀城市）がある。ここでは埴輪片も採集されており、付近に高塚古墳があった可能性が強い。さらに西側の丘陵地帯には燕沢善応寺などの横穴古墳群が見られる。

古代に入ると、東北地方にも律令体制がしかれ、陸奥国の国府である多賀城が本遺跡の東約３㎞の丘陵上におかれたため、周辺の自然堤防や北西の丘陵地帯には、燕沢遺跡をはじめ、奈良・平安時代の遺跡が多数存在する。

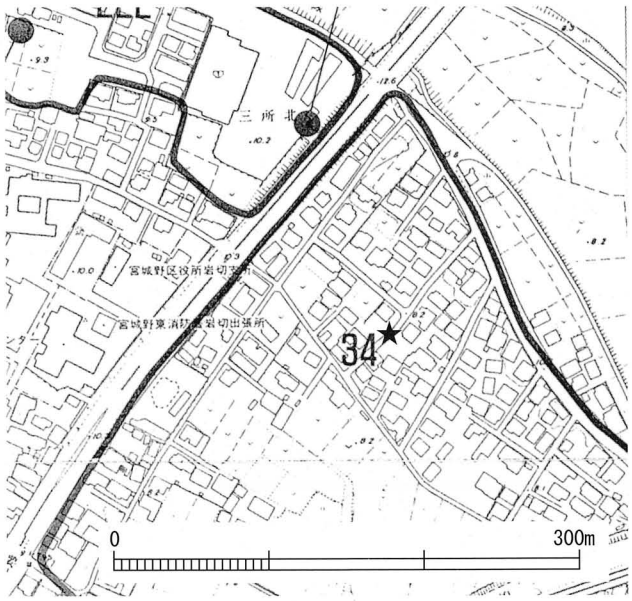
中世の遺跡では、北西の丘陵に国指定史跡である岩切城がある。これは源頼朝によって、多賀城（陸奥国府）留守職に補任された伊沢（留守）家景の構えた館で、代々留守氏の拠点となっていた。麓に留守氏の菩提寺である東光寺があり、その境内には中世の磨崖仏や板碑が多数残されている。また、留守文書には鎌倉時代の後半、領内に冠屋市場、河原宿五日市場、在家などの記載が見られるが、当時七北田川は冠川と呼ばれていたことから、鎌倉時代には七北田川流域では集落が発達しており、すでに商業活動が営まれていたものと思われる。市の所在地は明確ではないが、付近の洞ノ口遺跡などでは溝で区画された大規模な屋敷跡が見つかっており、中世における繁栄の様子が明らかになりつつある。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	鴻ノ巣遺跡	集落、屋敷、水田	自然堤防	弥生、古墳、奈良、平安、中世	8	羽黒前遺跡	城館、宗教遺跡	丘陵	中世、近世
2	岩切城跡	城館	丘陵	中世	9	今市遺跡	集落、包含地	自然堤防	平安、中世
3	台屋敷横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳	10	洞ノ口遺跡	集落、城館、屋敷、水田	自然堤防	古墳、奈良、平安、中世、近世
4	新宿囲遺跡	散布地	自然堤防	平安	11	新田遺跡	集落	自然堤防	古墳、古代、中世
5	東光寺板碑群	板碑群	丘陵斜面	中世	12	山王遺跡	集落	自然堤防	弥生、古墳、古代
6	東光寺遺跡	城館、石窟仏、寺院、集落、板碑	丘陵斜面	中世	13	市川橋遺跡	官衙関連他	自然堤防他	縄文～中世
7	若宮前遺跡	城館、信仰遺跡	丘陵斜面	縄文、古墳、平安、中世、近世					

第25図　遺跡の位置と周辺の遺跡

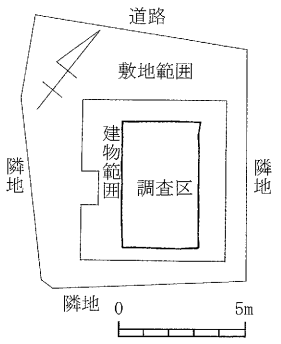
これまでの本遺跡の調査結果として、古墳時代の溝跡や竪穴住居跡、周溝墓や水田跡が検出されている。古墳時代後期から奈良時代にかけては、遺物は出土しているが遺構は検出されていない。平安時代は、竪穴住居の可能性のある遺構や溝跡、土坑などが検出されているものの、集落の実態はよく分かっていない。中世になると掘立柱建物跡や井戸跡・溝跡などが広範囲で検出され、各遺構は有機的に関係して屋敷ないし集落を形成していることが分かってきている。



第26図　調査地点の位置

4　基本層序

調査地点は60～90cm 程の厚さで盛土がなされ、基本層は６層に分かれる。



第27図　調査区配置図

5　発見遺構と出土遺物

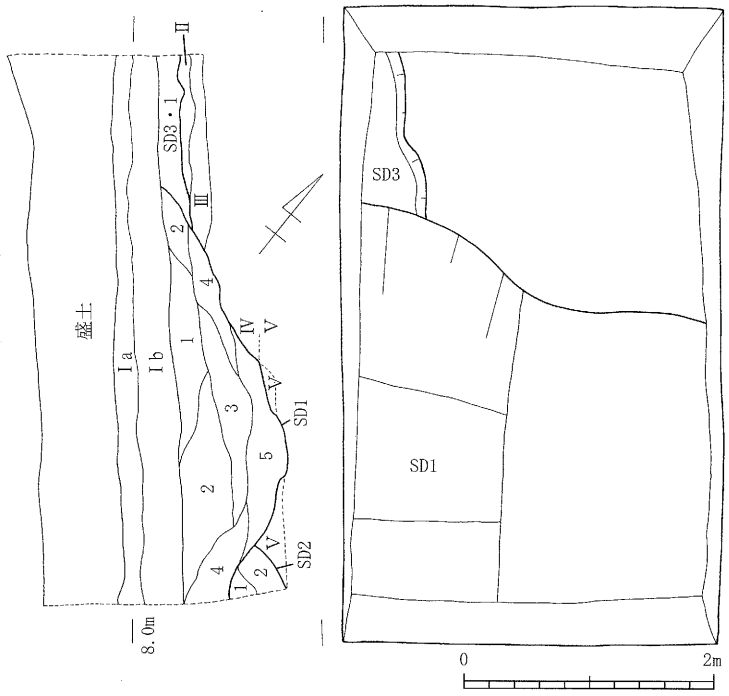
Ⅱ層上面で溝跡２条（ＳＤ１・３）、掘り込み面不明の溝跡１条（ＳＤ２）を検出した。

１）溝跡

ＳＤ１溝跡　調査区南部で検出した。南西から北東方向に延びる溝跡である。規模は、上端幅300cm以上、深さ85cm以上である。堆積土５層中より非ロクロ土師器片７点、瓦片１点、常滑産中世陶器片２点(第29図２・３）が出土した。

ＳＤ３溝跡　調査区西端で部分的に検出した。ＳＤ１溝跡に切られる。ＳＤ１溝跡に直交する形で延びるものと推定されるが、全体の規模は不明である。

ＳＤ２溝跡　ＳＤ１溝跡に切られており、断面でのみ確認したため、掘り込み面は不明である。その規模は不明である。



6　まとめ

Ⅱ層上面で溝跡２条、ＳＤ１溝跡に切られ、掘り込み面不明の溝跡１条を検出した。遺物は、ＳＤ１溝跡の堆積土５層中より非ロクロ土師器片７点、瓦片１点、中世陶器片２点が出土した。中世陶器のうち１点(第29図３)は12～13世紀のものと考えられる事から、溝跡の年代は、概ね12～13世紀頃、若しくはそれ以降と考えられる。

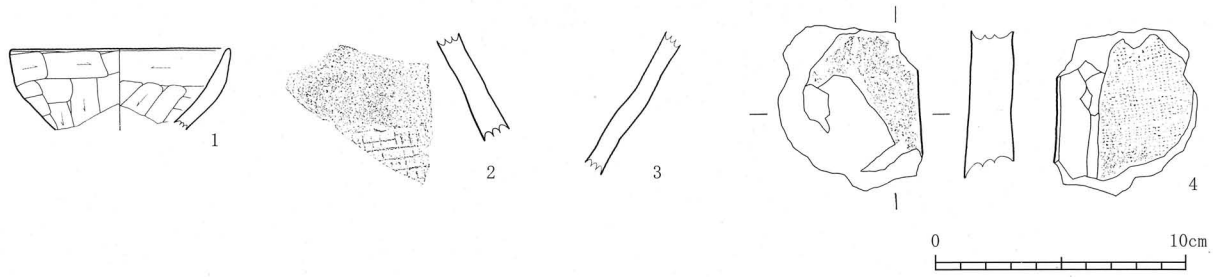
基本層	土　色	土　性	備　考
Ⅰa	2.5Y4/1　黄灰色	砂質シルト	
Ⅰb	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	
Ⅱ	10YR4/4　褐色	砂質シルト	酸化鉄を多量に含む。
Ⅲ	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	土師器片をやや多量に含む。
Ⅳ	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む。
Ⅴ	10YR4/4　褐色	細砂	酸化鉄を多量に含む。
層　位	土　色	土　性	備　考
SD1－1	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土をブロック状に多量に含む。
2	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土を粒状に少量含む。
3	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	Ⅳ層土をブロック状に多量に含む。
4	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄をやや多量に含む。
5	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	
SD2－1	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	Ⅳ層土をブロック状に多量に含む。
2	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	
SD3－1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	Ⅱ層土を粒状に少量含む。

第28図　遺構平・断面図

〈参考文献〉

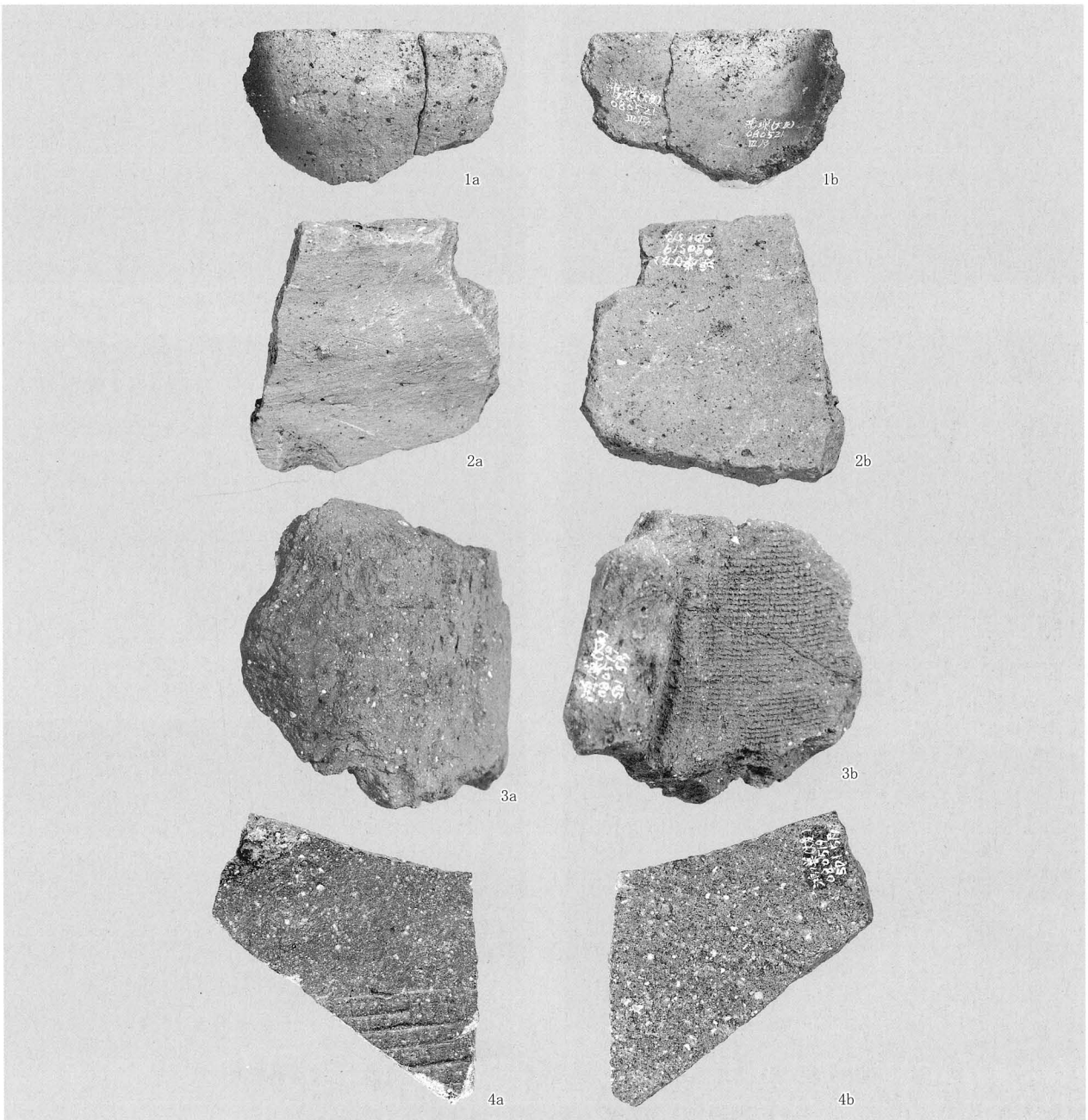
結城慎一・渡辺雄二　1989「仙台市岩切　鴻ノ巣遺跡」仙台市文化財調査報告書第123集

工藤哲司　2004「鴻ノ巣遺跡　第７次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第280集

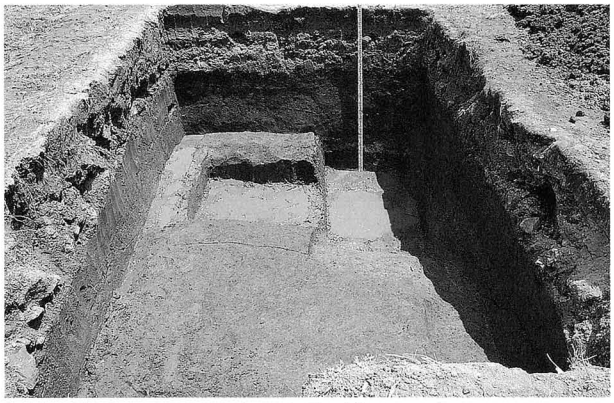


図中番号	登録番号	出土地点			分類		法量（cm・g）			特徴・備考（産地・釉薬・文様・時期・その他）	写真図版
		基本層	遺構名	遺構層	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・重		
1	C−1	Ⅲ層			土師器	坏	(3.3)	8.8	−	外面ヘラケズリ	14−1
2	I−1		SD1	5層	陶器	甕	−	−	−	常滑　中世陶器　押印（格子状）	14−4
3	I−2		SD1	5層	陶器	鉢	−	−	−	常滑？　中世陶器　12～13c	14−2
4	F−1		SD1	5層	瓦	丸瓦	−	−	−	外面：縄叩き　内面：布目	14−3

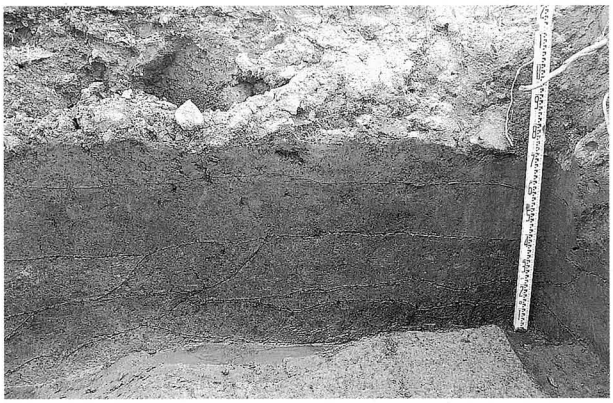
第29図　出土遺物



図版14　出土遺物



1　調査区全景（北西から）

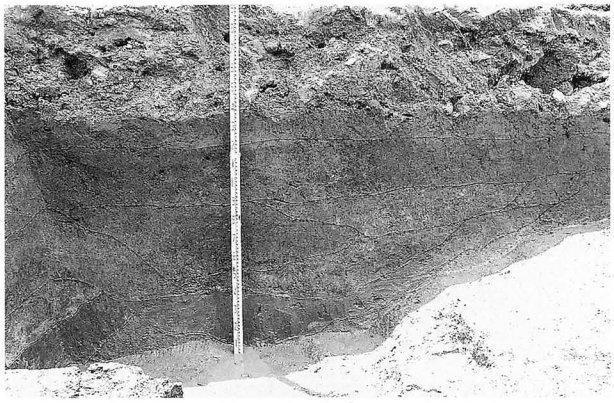


2　基本層（北東から）

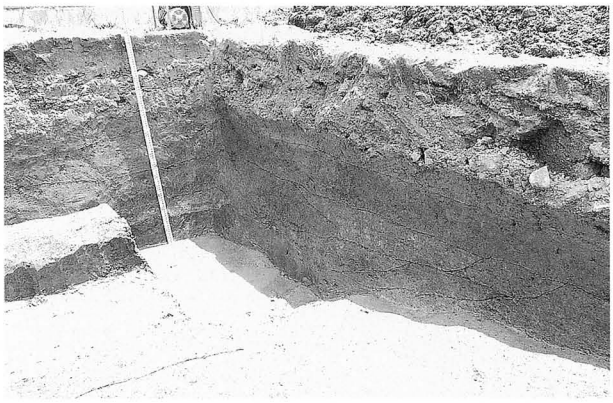
3　遺構検出状況（北西から）

4　SD１溝跡検出状況（南西から）

5　SD１溝跡掘削状況（北東から）



6　SD１溝跡断面状況（北東から）



7　SD１溝跡断面状況（北から）

8　SD１・２溝跡断面状況（北から）

図版15　調査区全景・SD１溝跡検出・断面

Ⅵ　今泉遺跡第７次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　今泉遺跡（宮城県遺跡番号01235）
調 査 地 点　仙台市若林区今泉二丁目85－10
調 査 期 間　平成20年６月２日、６月４日
調査対象面積　70㎡
調 査 面 積　15㎡
調 査 原 因　個人住宅建設工事
調 査 主 体　仙台市教育委員会
調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　主事　鈴木　隆

2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成20年５月１日付けで地権者より提出された、個人住宅建設に係る発掘届（H20教生文第184－35号）に基づき実施した。確認調査は平成20年６月２日に着手し、遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。建築範囲に東西５ｍ×南北３ｍの調査区を設定し、重機により盛土・Ⅰ・Ⅱ層を掘削した。Ⅱ層を除去した時点で人力により遺構検出作業を実施したが、明確な基盤層が確認できなかったため、引き続き重機により、現地表面下1.5mまで掘削を行った。その後、調査区は全てＳＤ１溝跡の範囲内に収まることが確認された。堆積土が続き、遺構の底面は未確認であったが、安全を考慮しそれ以上の掘削は行わず調査を終了した。

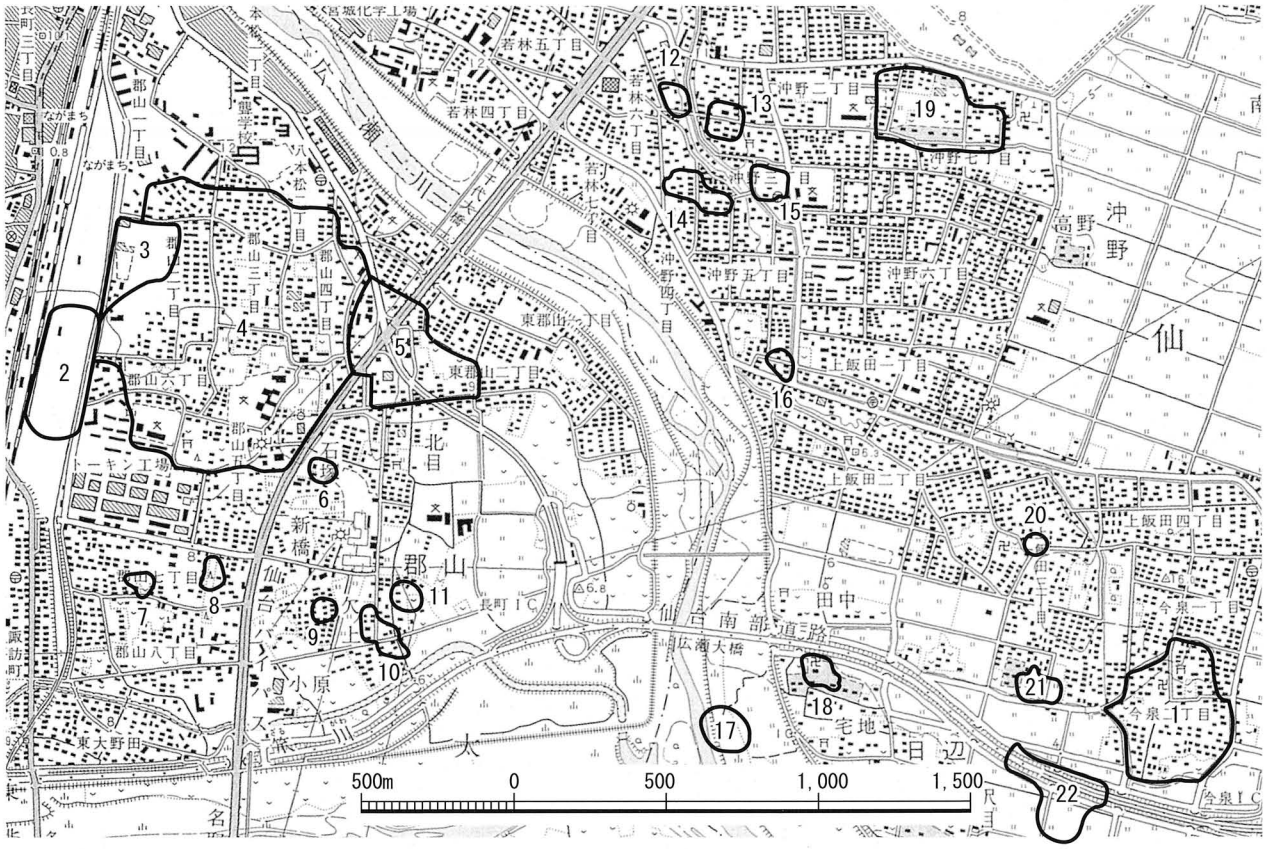
3　遺跡の位置と環境

本遺跡は、ＪＲ仙台駅の南東約6.5㎞に位置し、標高２～３ｍの自然堤防に立地している。文献等から、須田玄蕃が居住した中世城館として古くから知られていたが、昭和54年（第１次調査）、昭和56年（第２次調査）、平成５年（第３次調査）、平成６年（第４次調査）の調査で、縄文時代後期から近世にかけての複合遺跡である事が明らかになった（篠原ほか1980、佐藤1983、渡部1994、渡部1995）。

中世今泉城としての城館の全体構造は不明確であるが、第１・２次調査で南辺外堀の一部が確認され、その内部からは、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡などの遺構が多数検出された。屋敷は12世紀代に成立し、南北朝時代に城館として改変・整備され、17世紀前半頃まで使用されていたものと推定されている（佐藤1983）。

4　基本層序

基本層はⅠ、Ⅱ層のみ確認した。Ⅱ層より下の層は全てＳＤ１溝跡の堆積土と判断した。よってＳＤ１溝跡は、基本層Ⅲ層上面から掘り込まれたものと考えられる。しかし、今回の調査範囲でⅢ層は検出していない。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	今泉遺跡	集落、城館、包含地	自然堤防	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世	12	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
2	長町駅東遺跡	集落	自然堤防	弥生、古墳末、奈良初	13	神柵遺跡	官衙関係	自然堤防	奈良、平安
3	西台畑遺跡	包含地、甕棺墓	自然堤防	縄文、弥生中、古墳	14	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
4	郡山遺跡	官衙、寺院、包含地	自然堤防	縄文後・晩、弥生中、古墳末、奈良初	15	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生、古墳、奈良、平安
5	北目城跡	城館、集落、水田	自然堤防	縄文後、弥生、古墳、奈良、中世、近世	16	河原越遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
6	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安	17	日辺遺跡	散布地	河川敷	古墳
7	的場遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安	18	日辺館跡	城館	自然堤防	中世
8	籠ノ瀬遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安	19	沖野城跡	城館	自然堤防	中世
9	欠ノ上Ⅰ遺跡	水田	後背湿地	古墳、奈良、平安、中世	20	上屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
10	欠ノ上Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安	21	高田A遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
11	欠ノ上Ⅲ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安	22	高田B遺跡	集落、建物、水田、河川	自然堤防、後背湿地	縄文、弥生、古墳、平安、中世、近世

第30図　遺跡の位置と周辺の遺跡

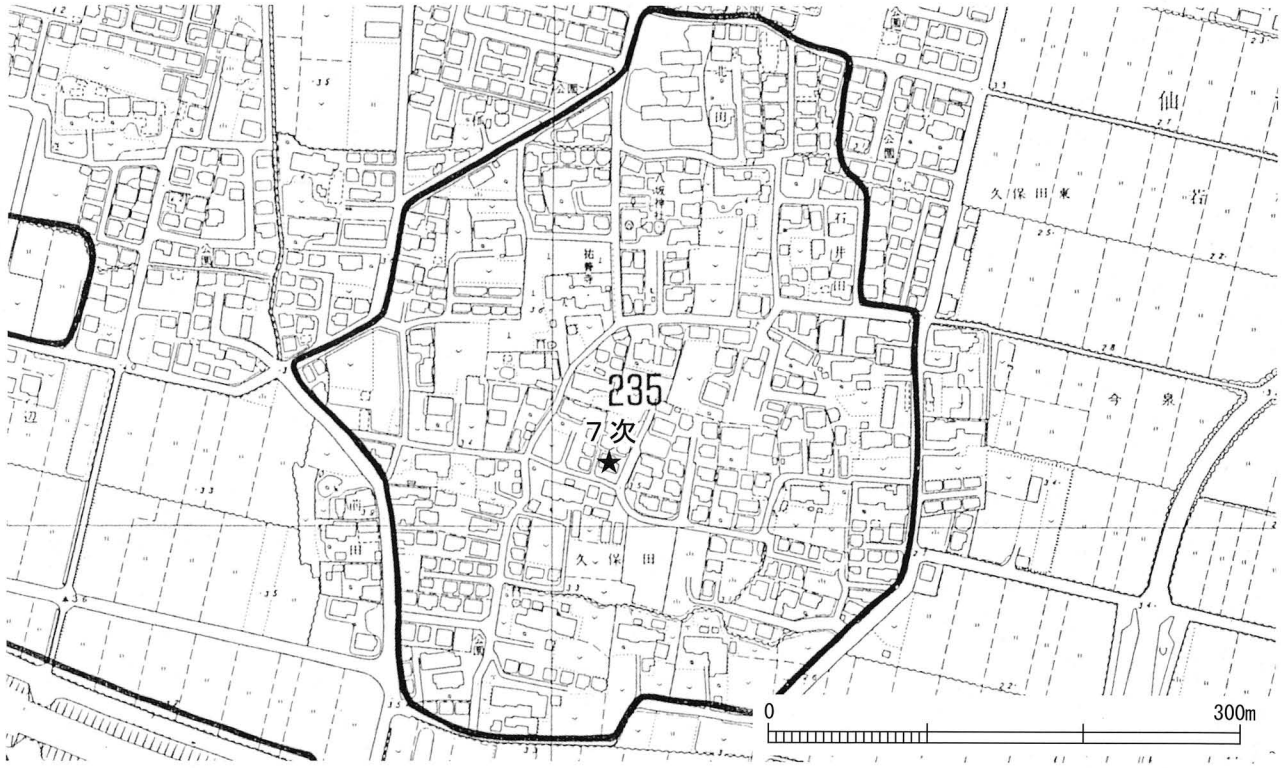
5　発見遺構と出土遺物

1）溝跡

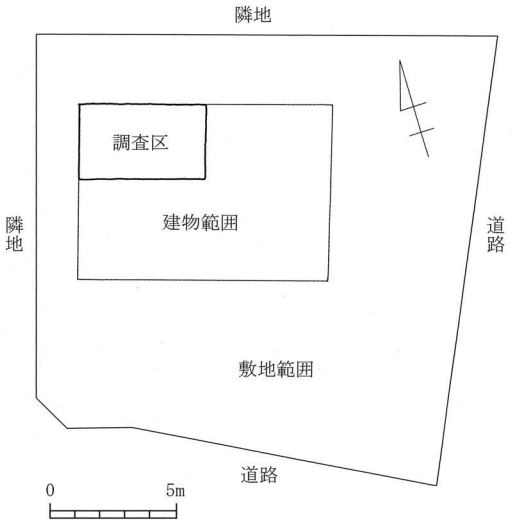
ＳＤ１溝跡　堆積土の傾斜から、溝跡は南北方向に延びるものと推定される。規模は、上幅5m以上、深さ70cm以上である。堆積土は15層確認した。遺物は、堆積土中より17世紀代を中心とする陶磁器が出土した。

2）出土遺物

遺物は、陶磁器17点が出土した。この内Ⅱ層出土が６点で、他11点はＳＤ１溝跡の堆積土１～13層から出土した。以下、ＳＤ１溝跡出土陶磁器について概要を述べる。磁器は４点全てが17世紀中～後半の肥前産染付皿である。陶器は、第34図１の大堀相馬産皿を除いて全てが17世紀代のものである。美濃産、唐津産の皿が１点ずつあり、他３点は全て岸産の擂鉢である。全体の傾向を指摘するには資料点数が少ないが、特に18世紀以降一般的に多く組成される碗が全く見られない点に特徴がある。



第31図　調査地点の位置



第32図　調査区配置図

6　まとめ

今回の調査地点は、昭和54年に実施された第1次調査の西約10mに位置する。南北方向に延びる溝跡（ＳＤ1）を１条検出した。ＳＤ１溝跡の上幅は５ｍを超える。その規模から推定すると、第１次調査の２・16号溝跡、第２次調査の11・21・29号溝跡との関連性が考えられる。これらの溝跡は、第２次調査における時期区分ではⅡ・Ⅲ期に属し13世紀後半から15世紀後半頃まで存続したものと推定されている。ＳＤ１溝跡は、堆積土上部～中部より17世紀代の陶磁器が10点まとまって出土しており、17世紀後半頃にはある程度埋没していたものと推定される。

今回の調査では安全上の理由により溝跡の底面を確認出来なかったため、ＳＤ１溝跡の成立年代は不明であるが、その規模からⅡ・Ⅲ期頃に成立した可能性が高いと考えられる。遺跡全体で、Ⅱ・Ⅲ期に成立した大規模な溝跡が近世に入り一様に埋没したのか、地点によって埋没時期に差があるのか、といった具体的な遺構の変遷やその背景については、今後の課題としたい。

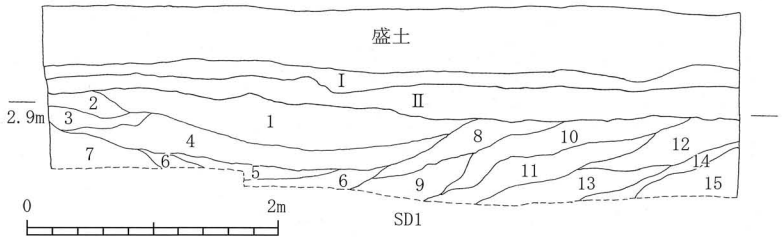
＜参考文献＞

篠原信彦ほか　1980『今泉城跡』仙台市文化財調査報告書第24集

佐藤洋　1983『今泉城跡』仙台市文化財調査報告書第58集

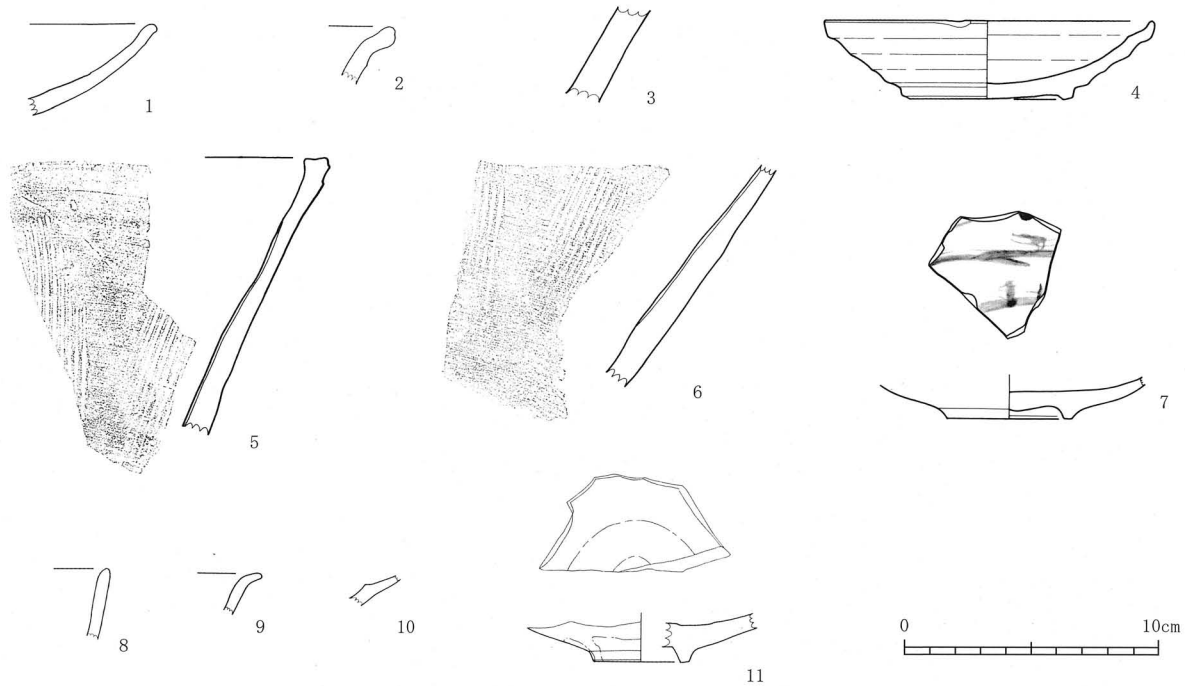
渡部弘美　1994『今泉城跡』仙台市文化財調査報告書第185集

渡部弘美　1995『今泉城跡』仙台市文化財調査報告書第201集



基本層	土　色	土　性	備　考
I	10YR3/2　黒褐色	粘質シルト	現代耕作土。
II	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	耕作土。近代磁器片を含む。
層　位	土　色	土　性	備　考
SD1－1	10YR4/1　褐灰色	粘質シルト	
2	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	
3	10YR3/2　黒褐色	粘質シルト	炭化物を少量含む。
4	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	
5	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	
6	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	
7	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	鉄分を少量含む。
8	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	
9	10YR2/2　黒褐色	粘質シルト	自然木を多量に含む。
10	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	砂質シルト（10YR4/3）を粒状に極少量含む。
11	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	砂質シルト（10YR4/3）をφ2～4cmのブロック状に多量に含む。鉄分を含む。
12	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	砂質シルト（10YR4/3）を粒状に少量含む。炭化物を含む。
13	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	鉄分を多量に含む。
14	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	炭化物をやや多量に含む。
15	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	鉄分を少量含む。

第33図　北壁断面図



図中番号	登録番号	出土地点			分類		法量（cm・g）			特徴・備考（産地・釉薬・文様・時期・その他）	写真図版
		基本層	遺構名	遺構層	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・重		
1	I－1		SD1	1層	陶器	皿	－	－	－	大堀相馬　白濁釉　鉄絵　19c前	17－1
2	I－2		SD1	1層	陶器	皿	－	－	－	唐津　刷毛目文　17c	17－2
3	I－3		SD1	1層	陶器	擂鉢	－	－	－	岸　鉄釉　17c	17－3
4	I－6		SD1	13層	陶器	皿	3.2	12.8	6.0	美濃　灰釉　17c前　輪花皿	17－6
5	I－4		SD1	1層	陶器	擂鉢	－	－	－	岸　鉄釉　17c中	17－5
6	I－5		SD1	8層	陶器	擂鉢	－	－	－	岸　鉄釉　17c	17－4
7	J－4		SD1	11層	磁器	皿	(1.3)	－	(6.0)	肥前　染付　山水文　17c中	17－10
8	J－1	II層			磁器	猪口	－	－	－	肥前　染付　18c	17－7
9	J－2		SD1	9層	磁器	皿	－	－	－	肥前　染付　17c後？	17－8
10	J－3		SD1	9層	磁器	皿	－	－	－	肥前　染付　17c　折縁皿	17－9
11	J－5		SD1	9層	磁器	皿	(1.4)	－	(3.6)	肥前　見込み蛇ノ目釉剥ぎ　17c後	17－11

第34図　出土遺物

1　SD１溝跡検出状況（西から）

2　調査終了状況（南西から）

3　北壁断面状況（南から）

図版16　検出遺構

1a
1b
2a
2b
3a
3b
4a
4b
5a
5b
6a
6b
6c
7a
7b
8a
8b
9a
9b
10a
10b
11a
11b

図版17　出土遺物

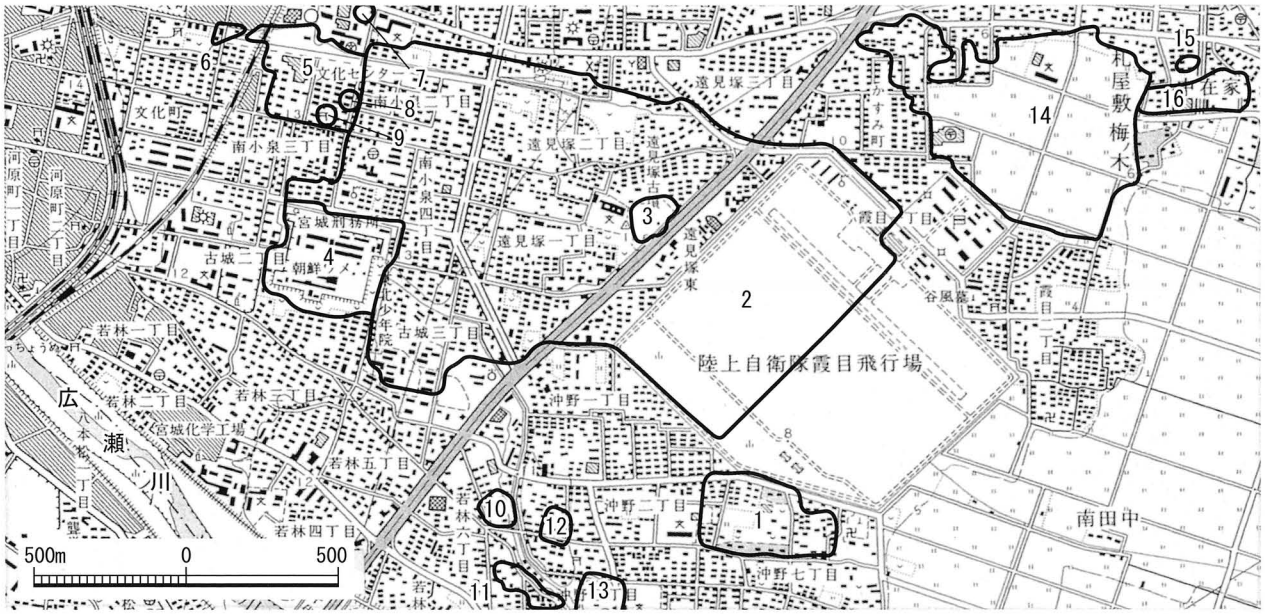
Ⅶ　沖野城跡第３次調査報告書

１　調査要項

遺　跡　名　　沖野城跡（宮城県遺跡番号01234）
調 査 地 点　　仙台市若林区沖野七丁目40－70
調 査 期 間　　平成20年８月４日～７日
調査対象面積　　66.58㎡
調 査 面 積　　20㎡
調 査 原 因　　個人住宅建設
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主事　鈴木　隆　　主事　森田　義史　　文化財教諭　佐藤　正弥

２　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成20年６月25日付けで地権者より提出された、個人住宅建設に係る発掘届（H20教生文第184－100号）に基づき実施した。確認調査は平成20年８月４日に着手し、遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。調査区は東西５ｍ×南北４ｍに設定した。重機により盛土・Ⅰ・Ⅱ層を掘削した。Ⅲ層上面で人力により遺



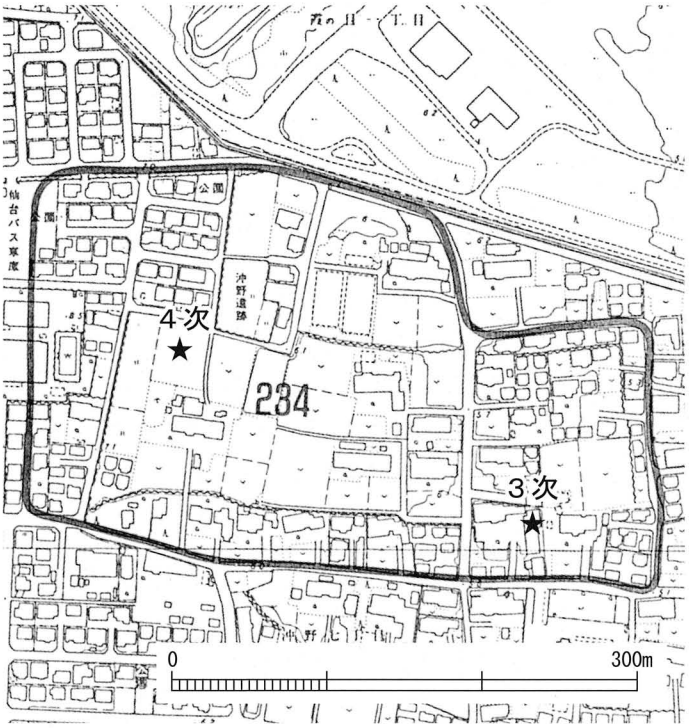
番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	沖野城跡	城館	自然堤防	中世	9	猫塚古墳	円墳	自然堤防	古墳
2	南小泉遺跡	集落、屋敷	自然堤防	弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世	10	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
3	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	11	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
4	若林城跡	円墳、集落、城館	自然堤防	古墳、平安、中世、近世	12	神柵遺跡	官衙関係	自然堤防	奈良、平安
5	養種園遺跡	集落、屋敷、包含地	自然堤防	縄文、古墳、平安、中世、近世	13	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生、古墳、奈良、平安
6	保春院前遺跡	集落	自然堤防	古代、中世、近世	14	仙台東郊条里跡	条里跡	後背湿地	奈良、平安
7	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	15	中在家遺跡	包含地	自然堤防	平安
8	蛇塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	16	中在家南遺跡	集落、墓地	自然堤防、後背湿地	弥生、古墳、平安、中世、近世

第35図　遺跡の位置と周辺の遺跡

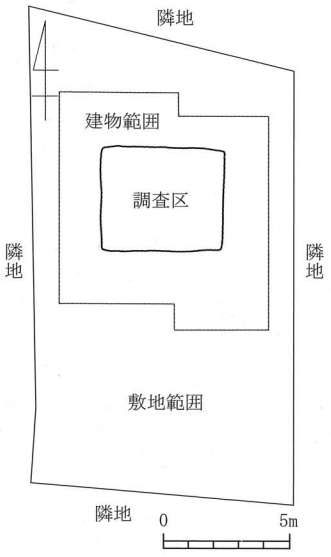
構検出作業を実施した。随時写真記録を行い、平面図・断面図を作成した。東壁際で一部深堀りを行い、調査を終了した。

3　遺跡の位置と環境

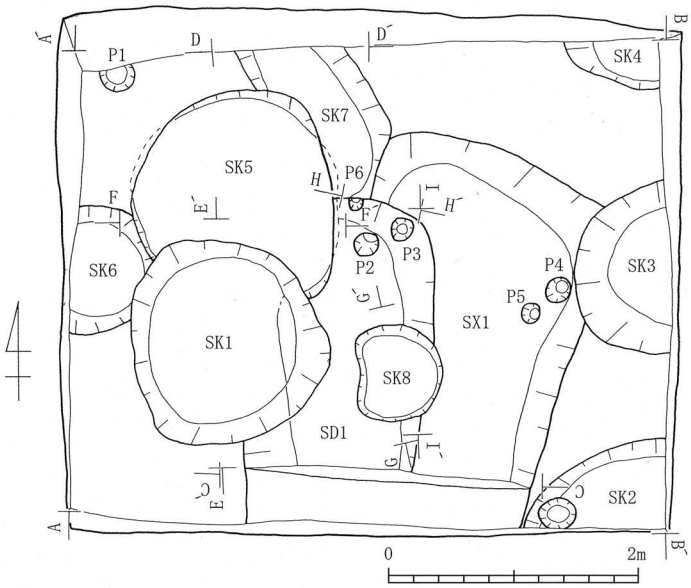
沖野城跡は、ＪＲ仙台駅の南東約4.5㎞に位置する。西方約３㎞を流れる名取川の支流広瀬川の後背湿地に立地する。周辺には縄文時代以降の遺跡が分布しており、南小泉遺跡、養種園遺跡、若林城跡では中近世の遺構・遺物も検出されている。明治時代の地籍図や昭和になってからの『六郷村沖野舘屋敷割図』などから復元された地割で主郭を中心にその周りを曲輪と堀・土塁が取り囲む平城であったことが推測されている。『仙台城古城書上』等によると粟野氏の居城で100間四方の規模をもっていたとされている。



第36図　調査地点の位置図



第37図　調査区配置図



第38図　遺構配置図

本遺跡は、これまで個人住宅建設や宅地造成に伴って小規模な調査が行われてきた。昭和60年度の第１次調査、平成４年度の第２次調査では、城館の北西部分にあたる館西地区で二重の堀跡が検出されている。調査された区画自体が一つの曲輪で、少なくとも北と東側に二重の堀があったと推定される。

4　基本層序

約１ｍの盛土直下で、Ⅰ～Ⅶ層の基本層を確認した。いずれも粘質シルトまたは粘土の軟質土である。また、Ⅴ層にはラミナ状の堆積がみられ、水性堆積層と考えられる。

5　発見遺構と出土遺物

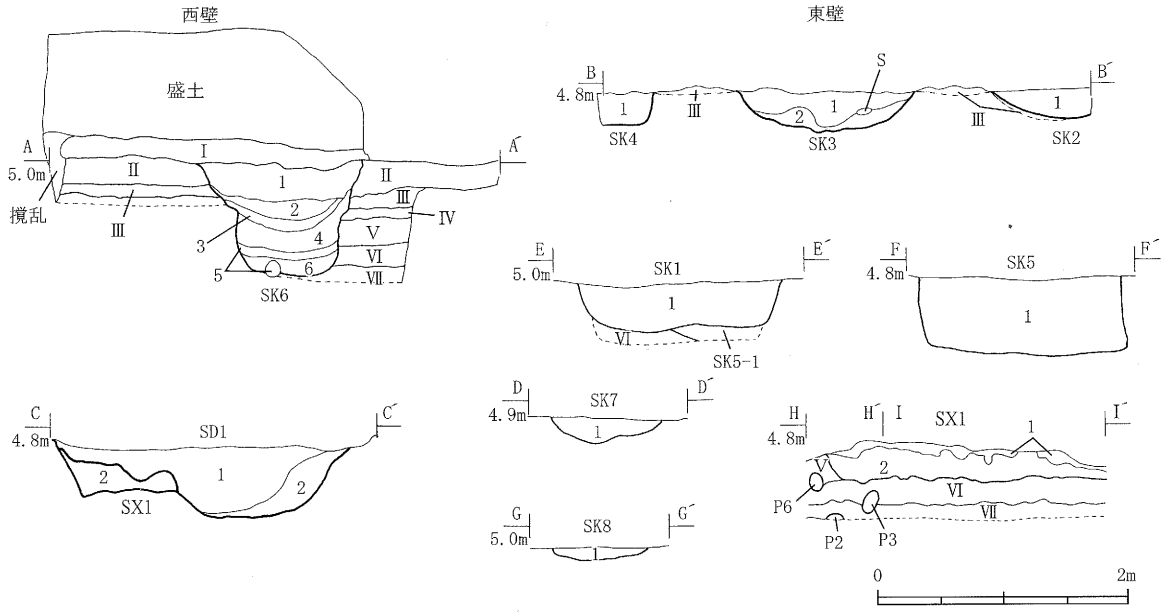
Ⅲ層上面で、溝跡１条、土坑８基、性格不明遺構１基、ピット１基を検出した。

１）溝跡

ＳＤ１溝跡　調査区中央で立ち上がるが、南側へ延びている事から、南北方向に延びる溝跡と判断した。規模は、上幅140～150cm、深さ60cmである。断面形は椀形を呈する。堆積土は２層に分かれ、黒色の粘土を主体とする。完掘後、径15～20cmのピットを３基検出した（Ｐ２,３,６）。遺物は出土していない。

２）土坑

ＳＫ１土坑　調査区西側で検出した。ＳＤ1溝跡、ＳＫ５・６土坑と重複し、本遺構が最も新しい。確認面はⅢ層上面であるが、本遺構に切られるＳＫ６土坑の掘り込み面が、西壁の観察によりⅡ層上面であることから、本遺構についてもⅡ層上面から掘り込まれたものと考えられる。平面形は円形である。規模は東西160cm、南北161cm、深さ36cm である。断面形は椀形を呈する。堆積土は１層である。遺物は、17世紀後半の肥前産染付Ⅲ（第40図10）、18世



基本層	土　色	土　性	備　考
Ⅰ	10YR2/2　黒褐色	粘質シルト	炭化物やや多量に含む。
Ⅱ	10YR2/1　黒色	粘質シルト	炭化物やや多量に含む。Ⅲ層土をφ1～3cmのブロック状に少量含む。
Ⅲ	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘質シルト	鉄分を含む。
Ⅳ	10YR4/1　褐灰色	粘質シルト	鉄分を含む。
Ⅴ	2.5YR6/4　にぶい黄褐色	粘土	粘土（10YR2/1）との互層。
Ⅵ	10YR2/1　黒色	粘土	
Ⅶ	2.5YR5/3　黄褐色	粘土	
層　位	土　色	土　性	備　考
SD1－1	10YR2/1　黒色	粘土	
2	10YR2/1　黒色	粘土	Ⅶ層土をφ1～3cmのブロック状に含む。
SK1－1	10YR2/1　黒色	シルト質粘土	Ⅲ・Ⅳ層土をφ2～10cmのブロック状に多量に含む。
SK2－1	10YR2/1　黒色	粘質シルト	Ⅲ層土をφ2～5cmのブロック状に少量含む。
SK3－1	10YR2/1　黒色	粘質シルト	Ⅲ層土をφ1～3mmの粒状に少量含む。
2	10YR2/1　黒色	粘質シルト	Ⅲ層土をまだら状に多量に含む。
SK4－1	10YR2/1　黒色	粘質シルト	Ⅲ層土をφ2～5cmのブロック状に少量含む。
SK5－1	10YR2/1　黒色	シルト質粘土	Ⅲ・Ⅳ・Ⅶ層土をφ2～10cmのブロック状に多量に含む。
SK6－1	10YR2/1　黒色	粘質シルト	
2	10YR2/1　黒色	粘土	Ⅲ層土をφ5～10mmの粒状に極少量含む。
3	10YR2/1　黒色	粘土	炭化物を多量に含む。
4	10YR2/1　黒色	粘土	植物遺存体を多量に含む。
5	10YR4/1　褐灰色	シルト質砂	
6	10YR2/1　黒色		Ⅶ層土をφ5～10mmの粒状に極少量含む。
SK7－1	10YR2/1　黒色	シルト質粘土	Ⅲ層土をφ2～5mmの粒状に少量含む。
SK8－1	10YR2/1　黒色	シルト質粘土	Ⅲ層土をφ2～10cmのブロック状に多量に含む。
SX1－1	10YR2/1　黒色	粘土	Ⅴ層土をφ1～5cmのブロック状に多量に含む。
2	10YR4/1　褐灰色	粘土	Ⅴ層土をφ1～5cmのブロック状に多量に含む。

第39図　西壁・東壁・遺構断面図

紀の大堀相馬産碗が堆積土中から出土した。

ＳＫ２土坑　調査区南東角部で部分的に検出した。掘り込み面はⅢ層上面である。平面形は不明である。規模は東西115cm 以上、南北75cm 以上、深さ25cm である。西寄りに径30cm、深さ12cm のピット状の掘り込みが認められた。堆積土は１層である。遺物は出土していない。

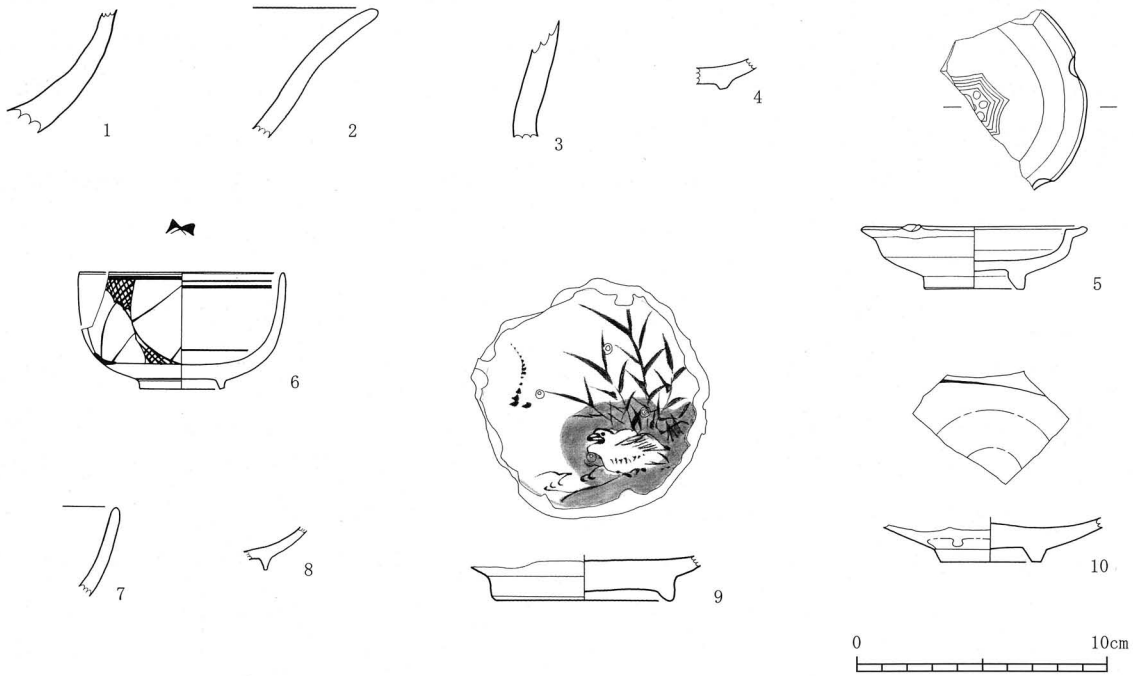
ＳＫ３土坑　調査区東端で部分的に検出した。掘り込み面はⅢ層上面である。平面形は不明である。規模は東西76cm 以上、南北130cm 以上、深さ32cm である。堆積土は２層である。遺物は瓦質土器が１点出土した（第40図３）。

ＳＫ４土坑　調査区北東角部で部分的に検出した。掘り込み面はⅢ層上面である。平面形は不明である。規模は東西74cm 以上、南北40cm 以上、深さ25cm である。堆積土は１層である。遺物は出土していない。

ＳＫ５土坑　調査区西側で検出した。ＳＫ１・６・７土坑、ＳＤ１溝跡と重複する。ＳＫ１土坑より古く、ＳＫ６・７土坑、ＳＤ１溝跡より新しい。確認面はⅢ層上面だが、ＳＫ１土坑と同様にＳＫ６土坑との切り合い関係から、掘り込み面はⅡ層上面と考えられる。平面形は円形である。規模は東西161cm、南北172cm、深さ32cm である。堆積土は１層である。遺物は４点の陶磁器が出土した。18世紀後半の肥前産染付碗、18世紀の大堀相馬産碗、16世紀の瀬戸灰釉皿（第40図４）が堆積土中から出土した。

ＳＫ６土坑　調査区西端で部分的に検出した。ＳK1・5土坑と重複する。本遺構が最も古い。掘り込み面はⅢ層上面である。平面形は円形と推定される。規模は東西60cm 以上、南北113cm、深さ85cm である。堆積土は６層である。遺物は、堆積土１層中から18世紀の大堀相馬産皿が出土した（第40図５）。

ＳＫ７土坑　調査区北側で部分的に検出した。ＳK5土坑、ＳD1溝跡、ＳＸ1性格不明遺構と重複する。本遺構が最



図中番号	登録番号	出土地点			分類		法量（cm・g）			特徴・備考（産地・釉薬・文様・時期・その他）	写真図版
		基本層	遺構名	遺構層	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・重		
1	I−1	Ⅰ層			陶器	鉢	−	−	−	小野相馬？　鉄釉　18c	19−1
2	I−2	Ⅰ層			陶器	鉢	−	−	−	岸？　鉄釉　17c後	19−2
3	I−4		SK3	1層	瓦質土器	鉢？	−	−	−	近世　風炉？	19−6
4	I−6		SK5	1層	陶器	皿	−	−	−	瀬戸美濃　灰釉　16c後	19−3
5	I−5		SK6	1層	陶器	皿	2.5	(8.8)	3.8	大堀相馬　灰釉　折縁皿　見込み陰刻文　18c	19−4
6	J−2	Ⅰ層			磁器	碗	4.7	(8.2)	3.4	肥前　染付　菊花文　見込み五弁花文　18c後	19−8
7	J−3	Ⅰ層			磁器	碗	−	−	−	肥前　染付　くらわんか手 18c	19−9
8	J−4	Ⅰ層			磁器	皿	−	−	−	中国　青花　16c後	19−10
9	J−1	Ⅰ層			磁器	皿	(1.8)	−	7.3	肥前　青磁染付　鳥文　草文　19c前	19−7
10	J−5		SK1	1層	磁器	皿	(1.4)	−	4.0	肥前　染付　草文　見込み蛇ノ目釉剥ぎ　17c後	19−11

第40図　出土遺物

も古い。掘り込み面はⅢ層上面である。北側へ延びており、溝跡の可能性も考えられるが、底面が皿状に窪んでいることから土坑と判断した。平面形は長楕円形と推定される。規模は東西約75cm、南北140cm以上、深さ20cmである。堆積土は１層である。遺物は出土していない。

ＳＫ８土坑　調査区中央で検出した。検出面はⅢ層上面である。平面形は円形である。規模は東西65cm、南北77cm、深さ10cmである。堆積土は１層である。遺物は出土していない。

３）性格不明遺構

ＳＸ１性格不明遺構　調査区中央で部分的に検出した。ＳＫ１・３・７・８土坑、ＳＤ１溝跡と重複する。ＳＫ７土坑を除き本遺構が古い。南側へ延びており溝跡となる可能性もあるが、後述の堆積土の状況から、性格不明遺構とした。検出面はⅢ層上面である。平面形は隅丸の長方形になるものと推定される。規模は東西約200cm、南北300cm以上、深さ約30cmである。完掘後、底面から径15～20cmのピットを２基検出した（Ｐ４・５）。これらのピットがＳＸ１性格不明遺構に伴うか否かは不明である。堆積土は２層である。１・２層共、下面には凹凸が認められ、下層土の巻き上げが顕著である。耕作土である可能性も考えられるが、詳細は不明である。遺物は出土していない。

４）出土遺物

遺物は全て陶磁器で、18点出土した。このうち遺構から出土したものは８点で、他は全て基本層Ⅰ層から出土している。Ⅰ層からは、16世紀後半代の中国産青花皿（第40図８）や17世紀後半代とみられる岸産？鉄釉鉢（第40図２）、19世紀前半代肥前産青磁染付皿（第40図９）などが出土している。遺物が出土した遺構は、調査区西側で検出された４基の土坑である。この内ＳＫ５土坑からは、16世紀後半代の瀬戸美濃灰釉皿（第39図４）が出土している。しかし、18世紀代の大堀相馬産碗の小片も出土していることから、近世の土坑と考えられる。また、ＳＫ６土坑からも18世紀代の大堀相馬産灰釉折縁皿（第40図５）が出土している。

遺物全体としては、18～19世紀前半代の遺物が主体を占め、16世紀代の遺物については、近世遺構形成時に混入したものと考えられる。

６　まとめ

今回の調査では、一帯に残る「中館」の地名から、中世沖野城の主郭に関わる遺構の存在が期待されたが、確実に中世と断定できる遺構は確認されなかった。遺物については、ＳＫ５土坑より16世紀後半の瀬戸美濃灰釉皿が１点出土している。ＳＤ１溝跡については、遺物の出土がなく年代の詳細は不明である。遺構の切り合い関係から、土坑群より古い遺構であるが、中世まで遡るか否かは不明である。比較的規模が大きい円形の土坑群については、出土遺物から18世紀以降に掘り込まれたものと考えられる。小型の土坑についても近世以降のものと考えられる。ＳＸ１性格不明遺構については、堆積土にみられる下面の凹凸と下層土の著しい巻き上げから、耕作に関わる遺構の可能性が考えられる。しかし部分的な検出であり、遺物の出土も無いことから、その性格については今後の検討課題としたい。

＜参考文献＞

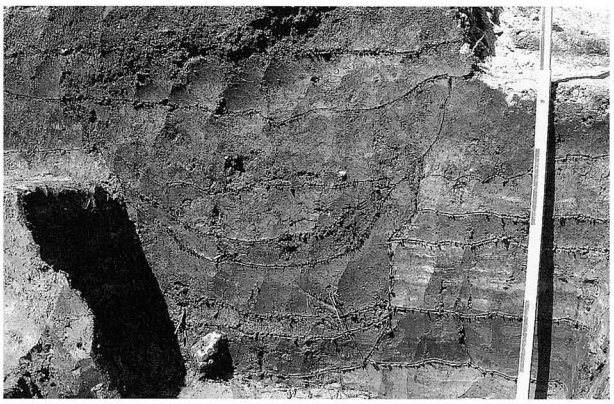
佐藤甲二・渡辺誠　1986「Ⅱ調査報告　沖野城跡」『年報７』仙台市文化財調査報告書第94集

柳原敏昭　2006「沖野城」『仙台市史　特別編７　城館』

結城慎一　1992「Ⅲ本調査報告(2)　沖野城跡」『年報14』仙台市文化財調査報告書第176集

1　Ⅲ層上面遺構検出状況（西から）

2　完掘状況（北西から）

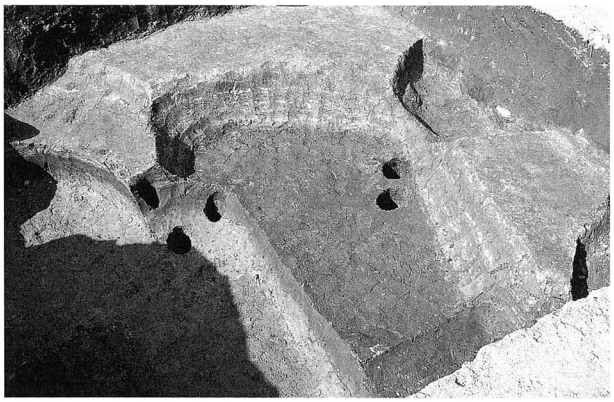


3　基本層・SK６土坑断面状況（東から）

4　SD１溝跡完掘状況（南から）

5　SK1・5・6土坑完掘状況（南から）

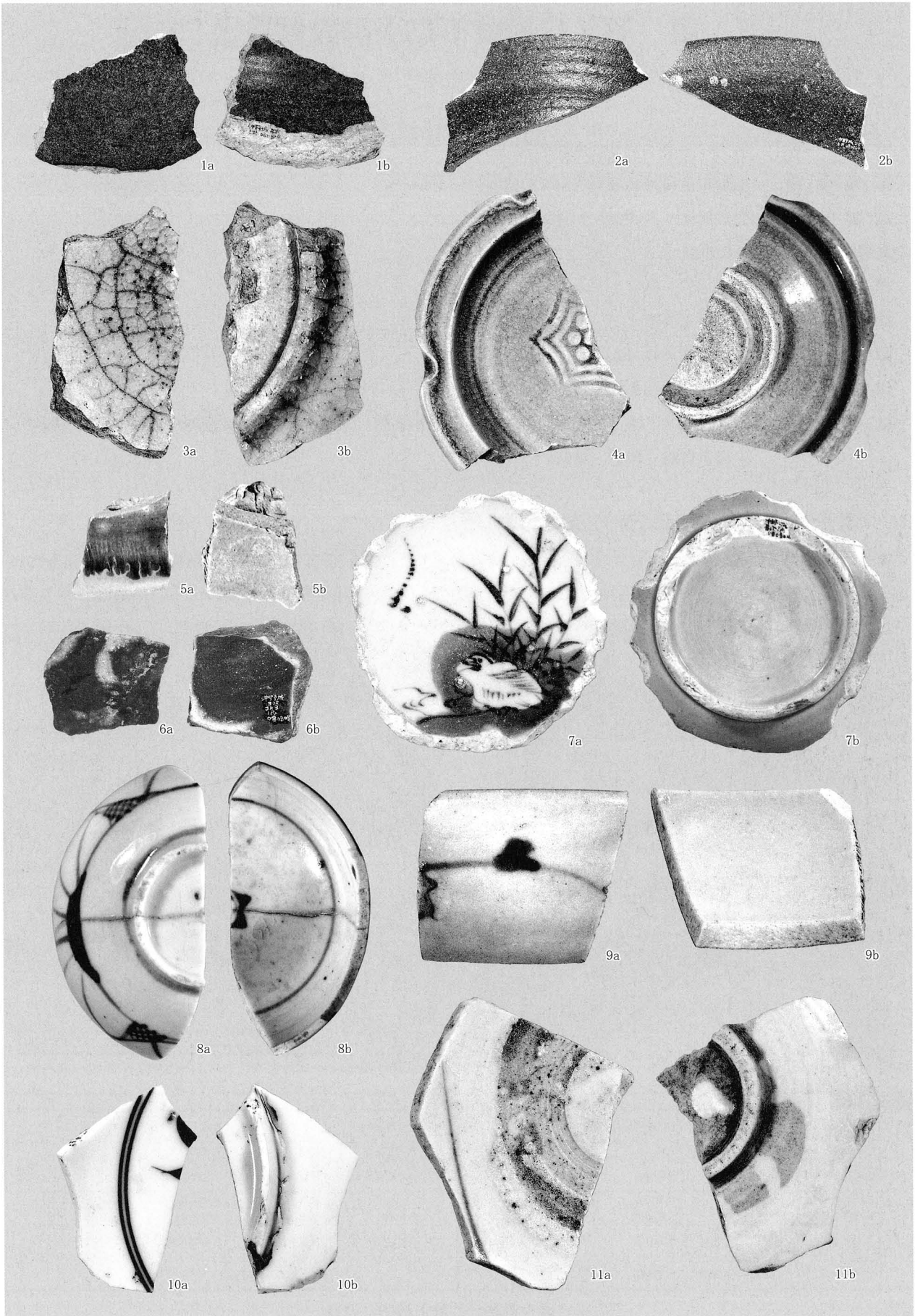
6　SK５土坑半裁状況（南から）



7　SX１性格不明遺構完掘状況（南西から）

8　SX１性格不明遺構断面状況（南西から）

図版18　調査区全景、基本層序、検出遺構



図版19　出土遺物

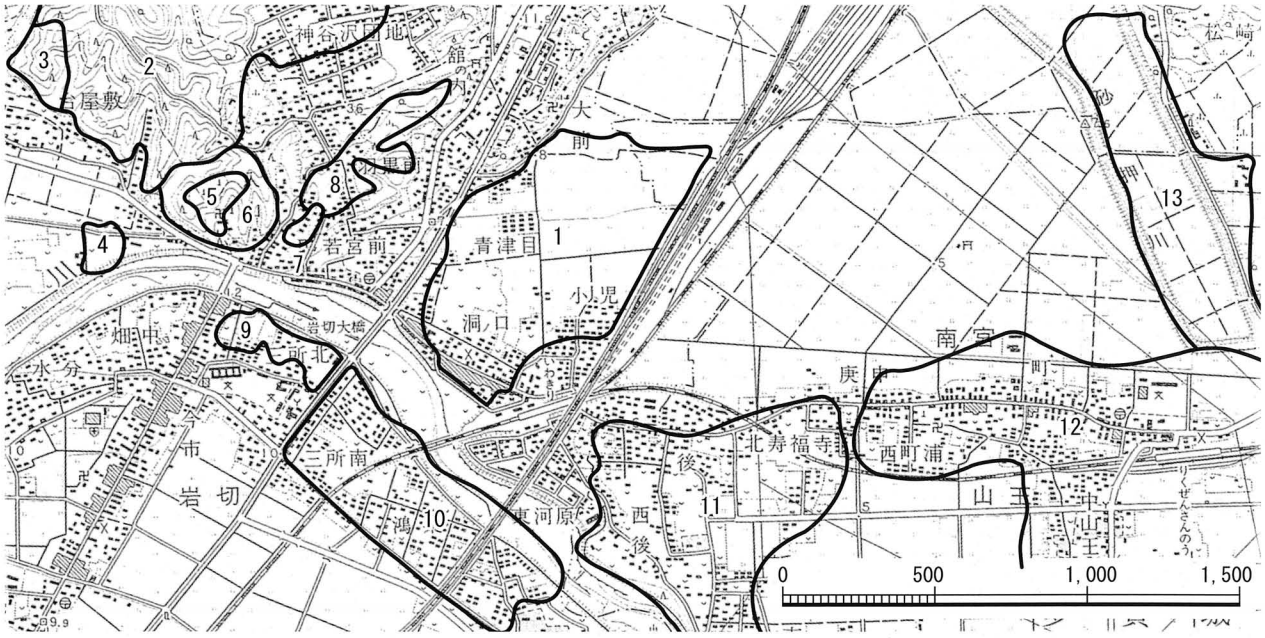
Ⅷ　洞ノ口遺跡第13次調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　洞ノ口遺跡（宮城県遺跡番号01372）
調 査 地 点　仙台市宮城野区岩切字洞ノ口100－１、188－６
調 査 期 間　平成20年９月29日～10月31日
調査対象面積　226.48㎡
調 査 面 積　86㎡
調 査 原 因　個人住宅建設
調 査 主 体　仙台市教育委員会
調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　主事　鈴木　隆　　主事　加藤　隆則　　主事　森田　義史　　文化財教諭　佐藤　正弥
　　文化財教諭　熊谷　敏哉

2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成20年９月４日付けで地権者より提出された、個人住宅建設に係る発掘届（H20教生文第184－165号）に基づき実施した。確認調査は平成20年９月29日に着手した。建築予定部分に1トレンチ（東西３ｍ×南北



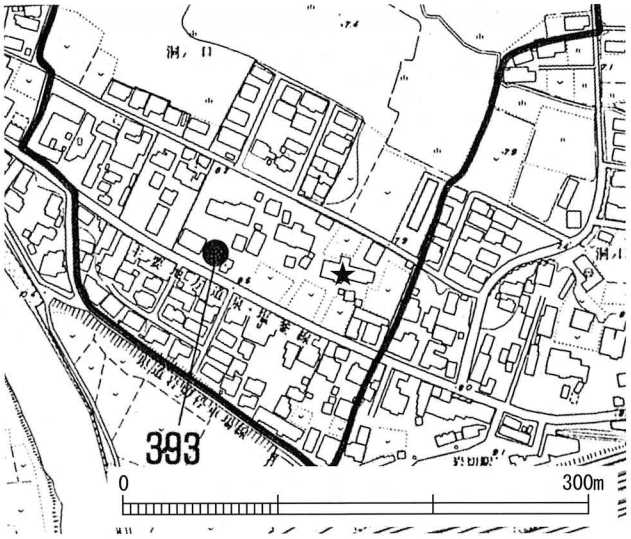
番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	洞ノ口遺跡	集落、城館、屋敷、水田	自然堤防	古墳、奈良、平安、中世、近世	8	羽黒前遺跡	城館、宗教遺跡	丘陵	中世、近世
2	岩切城跡	城館	丘陵	中世	9	今市遺跡	集落、包含地	自然堤防	平安、中世
3	台屋敷横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳	10	鴻ノ巣遺跡	集落、屋敷、水田	自然堤防	弥生、古墳、奈良、平安、中世
4	新宿囲遺跡	散布地	自然堤防	平安	11	新田遺跡	集落	自然堤防	古墳、古代、中世
5	東光寺板碑群	板碑群	丘陵斜面	中世	12	山王遺跡	集落	自然堤防	弥生、古墳、古代
6	東光寺遺跡	城館、石窟仏、寺院、集落、板碑	丘陵斜面	中世	13	市川橋遺跡	官衙関連他	自然堤防他	縄文～中世
7	若宮前遺跡	城館、信仰遺跡	丘陵斜面	縄文、古墳、平安、中世、近世					

第41図　遺跡の位置と周辺の遺跡

10m、その後東西４m×南北８m程拡張）と２トレンチ（東西３m×南北８m）の調査区を設定して調査を行ったところ、多数の土坑や井戸跡を検出したため引き続き本調査を実施した。

１トレンチでは重機により盛土およびⅠ層を掘削した。Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ層上面で人力により遺構検出作業を実施し、写真・図面によって記録した。

２トレンチでは１トレンチでの知見を参考にⅢ層上面で遺構検出作業を行い、写真・図面によって記録した。

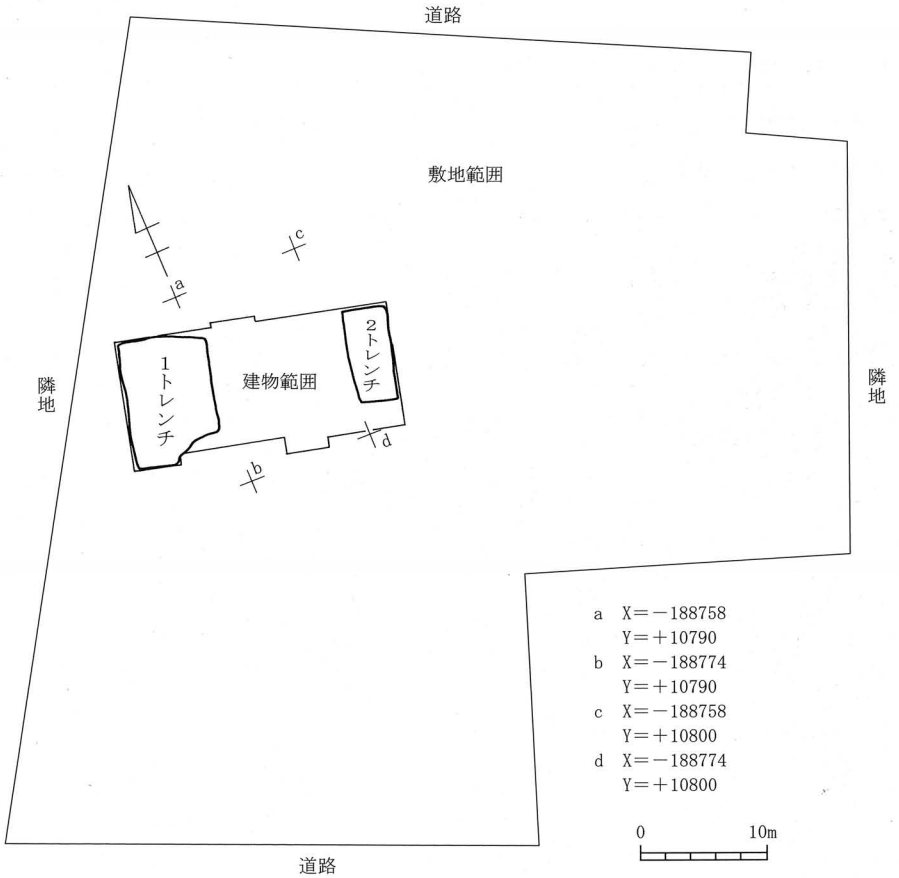


第42図　調査地点の位置

3　遺跡の位置と環境

洞ノ口遺跡は仙台市東北部の利府町・多賀城市と接する地区でＪＲ岩切駅と県道仙台松島線（利府街道）の間にあたり七北田川北岸の自然堤防とその北側の後背湿地に立地する。

本遺跡周辺には、弥生時代以降の遺跡が数多く分布しており、その大部分は七北田川両岸の丘陵面と自然堤防上に集中している。奈良時代には東方約３kmに陸奥国府として多賀城が築かれ、その南側に位置する高崎遺跡・市川橋遺跡・山王遺跡などでは平安時代の方格地割に基づく建物群が検出されている。多賀城衰退後は新田遺跡に溝で区画された屋敷跡があったことが明らかにされた。12世紀に遡る遺構と15世紀段階の大規模な屋敷群の少なくとも二時期あったとされ、後者は留守氏との関連が示唆されている。



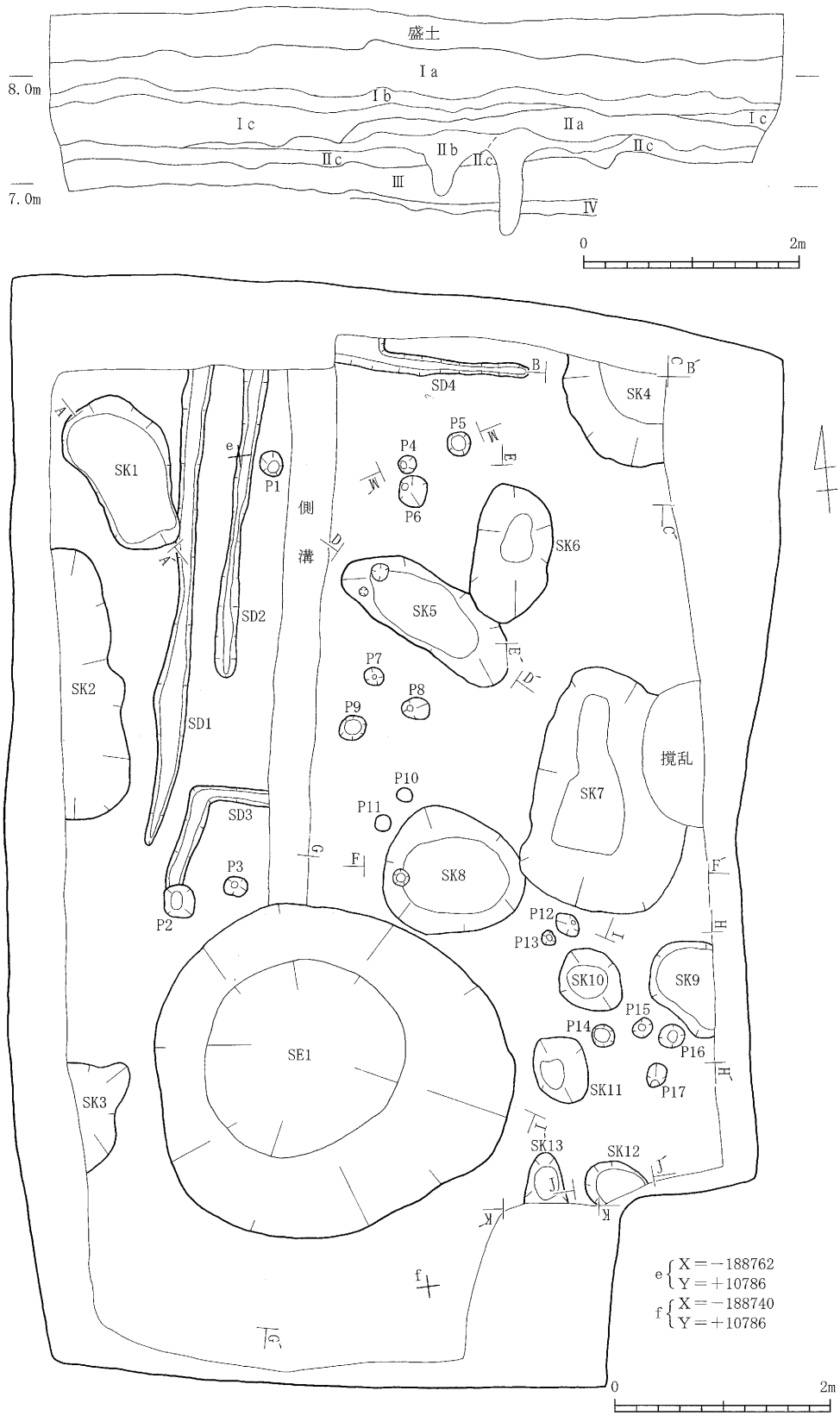
第43図　調査区配置図

一方、本遺跡の西側には東光寺遺跡から羽黒前遺跡にかけて13世紀後半から14世紀後半頃の板碑群が集中してみられ、宗教的空間が展開していたことがわかる。また岩切城を中心に東光寺城跡や化粧坂城跡・若宮前遺跡など軍事的性格を有する遺跡の拡がりも確認されるとともに、七北田川対岸の今市遺跡・鴻ノ巣遺跡でも屋敷跡が調査され、市場や河川交通とのかかわりが指摘されている。

本遺跡は、地表顕在遺構から戦国期の城館であることが知られていたが、土地区画整理事業に先立つ平成４年から13年の調査で、鎌倉～南北朝期の屋敷地、古代の居住域、古墳時代の水田跡など重層的な遺跡であることが明らかにされた。中世の屋敷・館跡は６期に区分され、15世紀末の年代が想定されているⅣa ３期には大規模な堀と土塁を伴うことが明らかになった。東西300m、南北170m以上の広がりを持ち、溝や柵列で区画された内部に整然と配置された建物群のほか、かわらけの集中廃棄土坑や塔婆とこけら経が大量に出土した宗教的空間など各段階で特徴的な様相を呈している。城館廃絶後は大部分が水田域となっているが、一部墓地となった区画もある。

4　基本層序

調査地点の盛土は全体を通じて30～40cm程で、基本層は大別10層、細別18層に分けた。Ⅱ層は調査区全体に波打ったように堆積し、遺物や炭化物を多量に含むことから河川流水に伴う自然堆積層と判断した(1)。Ⅲ層は１・２トレンチ通じてほぼ均質に堆積し、厚さは20～30cmほどである。１トレンチ北側は自然地形が落ち込み、Ⅴ～Ⅷ層が堆積している。そのうちⅦ層は灰白色火山灰で、調査区北東に部分的に分布している。Ⅸ層は調査区全体に分布し、下層にＸ層の分布を確認した。

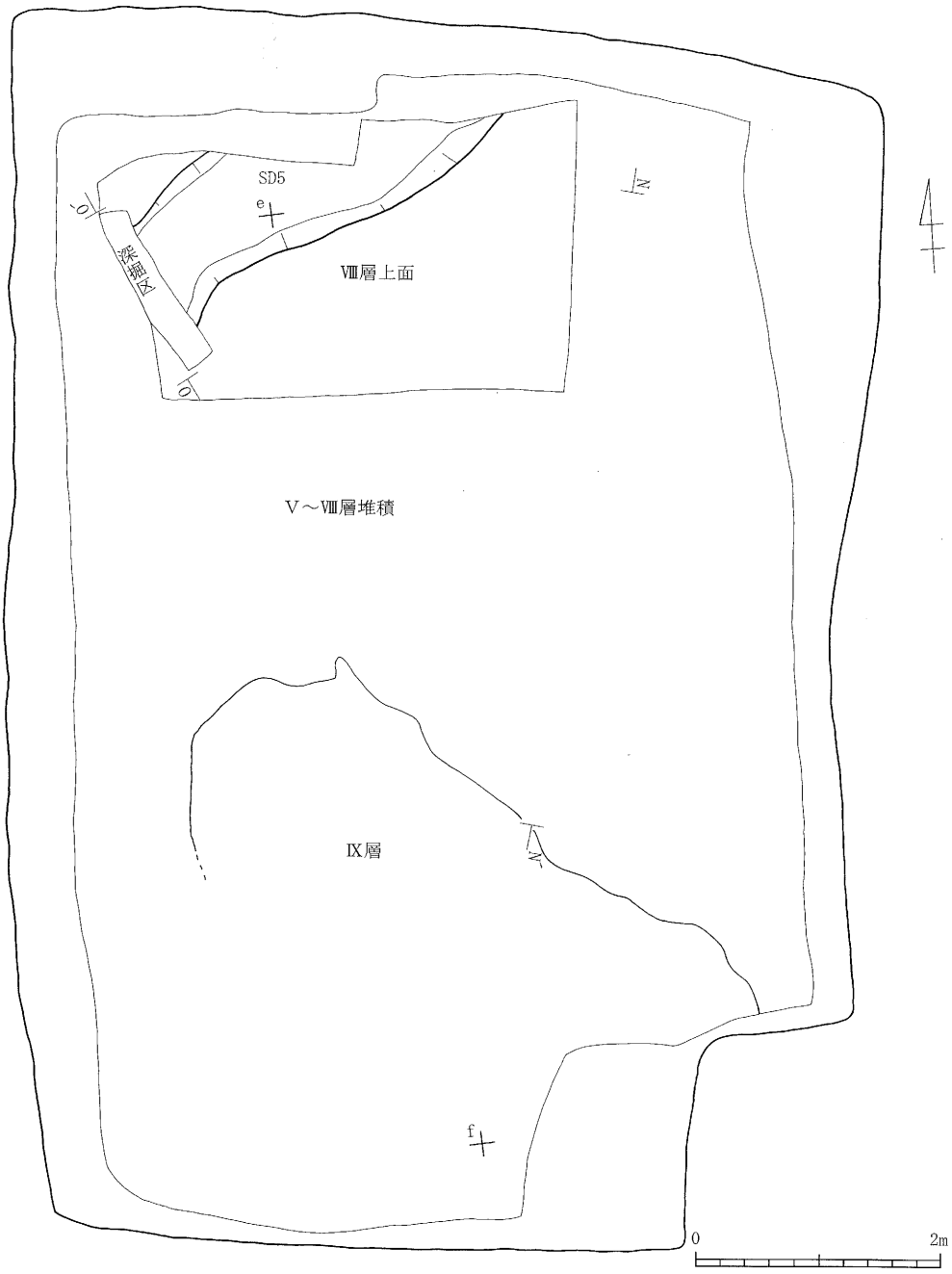


第44図　１トレンチⅢ層上面平面図・北側断面図

5　発見遺構と出土遺物

基本層Ⅲ層上面で井戸跡１基、溝跡３条、土坑３基、ピット３基が検出された。さらに西側にトレンチを拡張した結果、土坑10基、溝跡１条、ピット14基が検出された。土層確認のトレンチを掘り下げたところ調査区北側に向かって地形が低くなり、Ⅴ～Ⅹ層が確認できた。Ⅷ層上面で溝跡１条が確認された。

２トレンチではⅢ層上面で土坑が３基検出された。



第45図　1トレンチ下層遺構平面図

１）溝跡

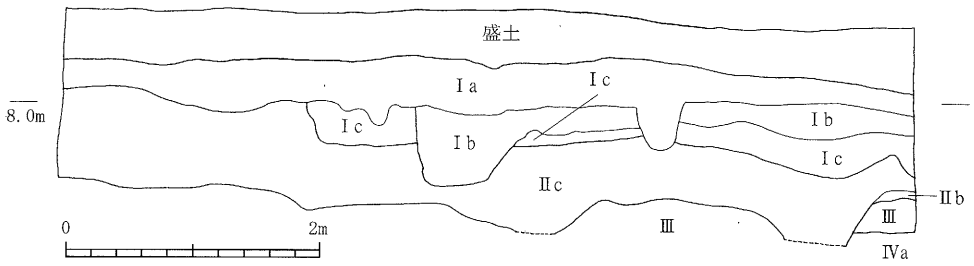
ＳＤ１～４小溝状遺構

Ⅲ層上面で調査区北側に検出された。ＳＤ１・ＳＤ２溝跡は南北に延び、ＳＤ３溝跡はほぼ直角に屈曲してＰ２に切られている。ＳＤ４溝跡は拡張区北側に位置し、東西に延びる。上端の幅は約20cmで非常に浅く、検出面から２～３cmほどの深さである。底面は凹凸の激しい部分もあるが、性格は不明である。ＳＤ１溝跡で鉄釘、ＳＤ２溝跡でかわらけ片が出土している。

ＳＤ５溝跡　Ⅷ層上面で調査区北西に検出された。上端幅100cm、下端幅75cmで北東方向に向かって延びている。堆積土は単層で、深さは12cm程である。灰白色火山灰層を掘り込み、堆積土中にも火山灰ブロックが多量に含まれることと、堆積土中からロクロ使用の土師器片が出土していることから平安時代の遺構であることが推定できる。他に馬の歯が出土している。

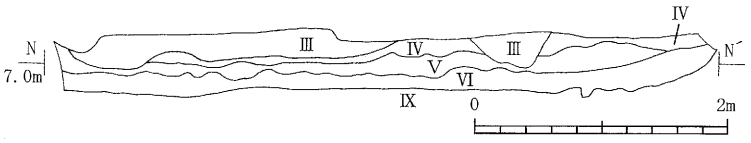
2）土坑

ＳＫ１土坑　調査区北西隅に位置し、Ⅲ層上面で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、堆積土は4層である。長軸148cm×短軸78cmで、確認面からの深さは22cmである。



第46図　１トレンチ西壁断面図

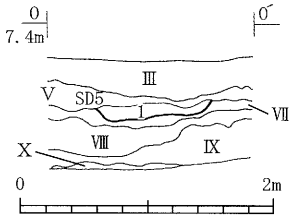
下層に藁灰状の白色繊維が堆積しており、底面は被熱して硬化している。遺物は2層中から5型式の常滑産鉢が堆積土中から不明鉄製品、土師器・須恵器が出土している。



第47図　Ⅲ層以下の土層断面図

ＳＫ２土坑　調査区西端北側に位置し、Ⅲ層上面で検出された。西側が調査区外のため全体形は不明であるが、不整楕円形状を呈すると考えられる。長辺は250cm程である。堆積土は基本層Ⅱｃ層の単層で、深さは最大40cm程である。出土遺物は常滑産甕と土師器片がある。

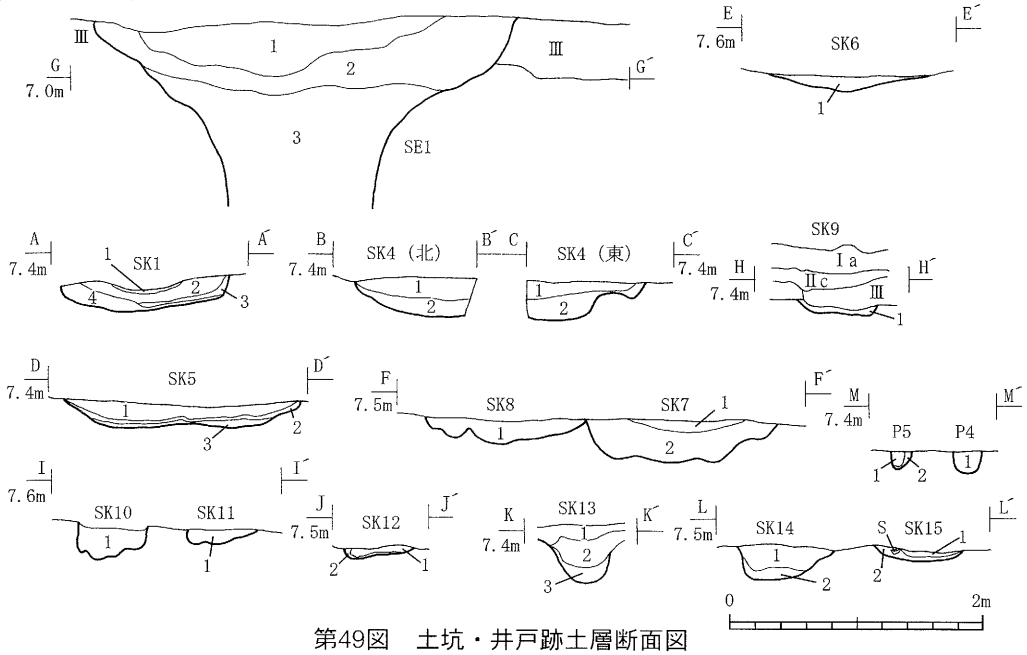
ＳＫ３土坑　調査区西端南側に位置し、Ⅲ層上面で検出された。西側が調査区外のため全体形は不明である。検出長は95cm ほどである。堆積土は西壁断面のⅡｃ層の単層で、深さは35cm程である。遺物は胴部に押印が施された常滑産甕を図示し、土師器と常滑産鉢が出土している。



第48図　SD５溝跡土層断面図

ＳＫ４土坑　拡張区北東隅に位置し、Ⅲ層上面で検出された。北側と東側が調査区外のため全体形は不明であるが、不整な円形の可能性がある。堆積土は２層で、深さは32cmである。２層中から土師器片が出土している。

ＳＫ５土坑　拡張区北側に位置し、Ⅲ層上面で検出された。



第49図　土坑・井戸跡土層断面図

ＳＫ６土坑と重複しており、本遺構が古い。南北の長軸130cm×短軸70cmの楕円形を呈する。堆積土は３層で、深さは18cmである。１層中から常滑産甕・骨片が出土している。

ＳＫ６土坑　拡張区北側に位置し、Ⅲ層上面で検出された。ＳＫ５土坑と重複しており、本遺構が新しい。平面形は長軸170cm ×短軸60cm の楕円形である。土坑内北西隅に小穴が二つ穿たれている。堆積土は単層で、深さ10cm ほどである。炭化物と須恵器片が出土している。

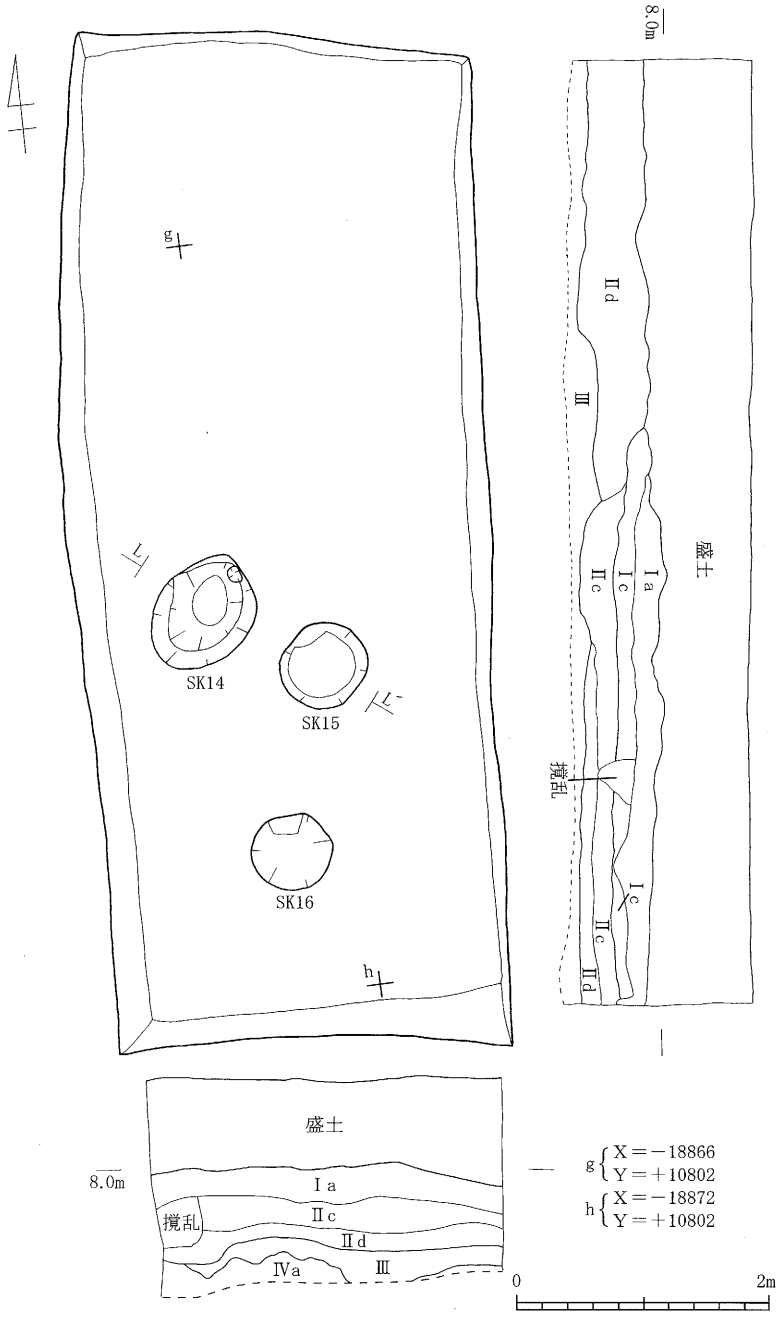
ＳＫ７土坑　拡張区中央に位置し、Ⅲ層上面で検出された。ＳＫ８土坑と重複しており、本遺構が新しく、東側を撹乱によって一部切られている。平面形は長軸212cm×短軸137cmの隅丸方形を呈する。断面形は逆台形に近い形状となる。堆積土は２層で、深さは最大32cmである。遺物は須恵器坏と動物骨を図示し、土師器や常滑産甕がみられる。

ＳＫ８土坑　拡張区中央に位置し、Ⅲ層上面で検出された。ＳＫ７土坑と重複しており、本遺構が古い。平面形は径120cmほどの円形である。堆積土は単層で、深さは最大18cmである。東側底面に被熱して硬化している部分が見られる。出土遺物はない。

ＳＫ９土坑　拡張区東端に位置し、Ⅲ層上面で検出された。東側が調査区外に延びており、全体形は不明であるが、円形を基調としたものと考えられる。堆積土は単層で、深さは10cm ほどである。青磁蓋と常滑産甕が出土している。

ＳＫ10土坑　拡張区南側に位置し、Ⅲ層上面で検出された。平面形は径60cmほどの不整な円形を呈する。堆積土は単層で、深さは最大32cmである。常滑産甕が出土している。

ＳＫ11土坑　拡張区南側に位置し、Ⅲ層上面で検出された。平面形は長軸60cm×短軸50cmの楕円形を呈する。堆積土は単層で、深さは最大10cmである。土師器坏を図示し、常滑産甕、鉄滓、骨片が出土している。



第50図　２トレンチ平面図・断面図

ＳＫ12土坑　調査区南端に位置し、Ⅲ層上面で検出された。南側が調査区外に延びており、全体形は不明であるが、楕円形を呈すると考えられる。堆積土は２層で、深さは８cm 程である。かわらけが出土している。

ＳＫ13土坑　調査区南端に位置し、Ⅲ層上面で検出された。南側が調査区外のため全体形は不明であるが、楕円形と考えられる。堆積土は２層で、深さは最大45cm である。遺物は出土していない。

ＳＫ14土坑　２トレンチⅢ層上面で調査区中央西側に検出された。平面形は長軸100cm ×短軸80cm の楕円形を呈する。堆積土は２層で、深さは28cm である。須恵器片が出土している。

ＳＫ15土坑　２トレンチⅢ層上面で調査区中央に検出された。平面形は径68cm の円形を呈する。中層から焼土塊が出土している。堆積土は２層で、深さは８cmである。出土遺物は鉄釘、銅銭、砥石、骨片が出土している。

ＳＫ16土坑　２トレンチⅢ層上面で調査区南側に検出された。平面形は長軸62cm×短軸58cmの楕円形を呈する。堆積土は１層で、深さは10cmほどあったと考えられる。遺物は出土していない。

３）井戸跡

ＳＥ１井戸跡　調査区南側に位置する。Ⅲ層上面で検出された。掘り方直径は約3.2m、井戸部直径は約1.7mである。湧水が激しく、検出面から１m程しか掘り下げられなかったため、深さは不明である。２層中からかわらけ、常滑産甕・鉢、瓦、銅銭、鉄滓が出土している。３層中から木製品が出土している。土器・陶磁器は12世紀末から13世紀に収まる年代が与えられるが、桟瓦のみ江戸時代以降のものである。堆積土は３層である。井戸枠は確認できなかったが、傾斜の緩い部分（３層中）に有機質の堆積が見られた。

４）ピット

Ｐ１～17　Ⅲ層上面で17基のピットを検出しているが、断面形状や堆積土の観察の結果、柱穴と確認できるものは見出せなかった。Ｐ６で常滑産甕、土師器が、Ｐ８で土師器、Ｐ９で常滑産甕、土師器、Ｐ10で炭化物、Ｐ14で産

基本層	土色	土性	備考
Ⅰa	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	南側下面に黄褐色粘土ブロックを多量に含む。
Ⅰb	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	黄褐色粘土ブロックを少量含む。
Ⅰc	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	黄褐色シルトブロックを多量に含む。炭化物を少量含む。
Ⅱa	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	炭化物を少量含む。
Ⅱb	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	炭化物・黄褐色シルトブロックを少量含む。北壁に落ち込みを形成。
Ⅱc	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	炭化物・暗褐色シルトブロックを少量含む。土壌サンプリング実施。
Ⅱd	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	明黄色シルトブロックを微量に含む。
Ⅱe	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	黒色シルトブロックを微量に含む。
Ⅲ	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	炭化物を微量に含む。
Ⅳa	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	明黄色シルトブロックを微量に含む。
Ⅳb	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	褐色シルトブロックを多量に含む。
Ⅳc	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	暗褐色シルトブロックを多量に含む。
Ⅴ	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	調査区北側に堆積。Ⅵ層ブロックを多量に含む。
Ⅵ	10YR1.7/1 黒色	粘土	調査区北側に堆積。酸化鉄を微量に含む。下層にラミナ状の堆積がみられる。
Ⅶ	灰白色	火山灰	調査区北東に部分的な分布か。
Ⅷ	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	黒褐色粘土ブロック少量含む。
Ⅸ	2.5Y5/3 黄灰色	シルト質砂	調査区全体で確認。酸化鉄を少量含む。
Ⅹ	10YR2/2 黒褐色	粘土	
1トレンチ	土色	土性	備考
SE1－1	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	黄色褐色粘土粒を多量に含む。
2	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	黄褐色の粘土ブロックを少量含む。
3	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	上層がラミナ状を呈する。法面部分が暗灰色を呈し、有機物の堆積が著しい。
SK1－1	10YR1.7/1 黒色	粘土質シルト	藻灰状の白色繊維を多量に含む。
2	2.5Y3/1 黒褐色	砂質シルト	
3	2.5Y2/1 黒色	砂質シルト	
4	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	上面に藻灰状の白色繊維を含む。
SK4－1	2.5Y5/3 黄褐色	砂質シルト	2層のブロックを多量に含む。
2	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	藻灰状の白色繊維・炭化物・焼土塊を多量に含む。
SK5－1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を少量含む。
2	白色		藻灰状の白色繊維。
3	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	
SK6－1	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロックを多量に含む。
SK7－1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	黄褐色砂粒を多量に含む。
2	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	中層に藻灰状の白色藻灰・炭化物を多量に含む。
SK8－1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	黒色ブロック(炭化物)を多量に含む。酸化鉄を少量含む。
SK9－1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	
SK10－1	2.5Y3/1 黒褐色	砂質シルト	炭化物を多量に含む。藻灰状白色繊維を少量含む。黄褐色粘土ブロックを含む。
SK11－1	2.5Y4/1 黄灰色	砂質シルト	炭化物を少量含む。
SK12－1	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	褐色砂粒を少量含む。黒色粘土ブロックを微量に含む。
2	10YR4/2 褐色	砂質シルト	暗褐色砂粒を少量含む。
SK13－1	10YR2/1 黒色	砂質シルト	黒色砂粒を多量に含む。
2	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	
SD5－1	2.5YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	灰白色火山灰ブロックを多量に含む。
P4－1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	
P5－1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	
2	10YR2/1 黒褐色	粘土質シルト	柱痕跡か。
2トレンチ	土色	土性	備考
SK14－1	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む。
2	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	
SK15－1	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	
2	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む。
SK16－1	10YR2/1 黒	粘土質シルト	炭化物を多量に含む。藻灰状白色繊維を少量含む。

第３表　土層観察表

地不明陶器が出土している。

5）出土遺物

調査区全体で土師器196点、須恵器17点、かわらけ19点、古瀬戸陶器１点、東海系無釉陶器(渥美・常滑窯産)344点、在地系無釉陶器１点、中国陶磁器８点、近世陶磁器14点、瓦７点を数える(全て接合前破片数)。その他、銅銭、鉄釘・鉄滓、刀子、魚骨、動物骨・歯、木製品、砥石などが見られる。総量で平箱２箱分の遺物が出土している。

Ⅱ～Ⅲ層上面で出土する中世陶器（壺・甕・鉢）は、中野編年４～６型式（1190～1275）のものが主体的である。かわらけについても破片資料で全体を復元できるものが僅少であるが、佐藤洋の編年(佐藤2003）や中野高柳遺跡出土資料(村田ほか2006）と比較すると13世紀中葉から14世紀前半に収まるものであると判断できる。また白石窯など在地産と断定できる鉢・甕類は僅少で、無釉陶器の中で在地産陶器が半数を占める名取川流域の遺跡（王ノ壇遺跡、小川ほか2000）とは対照的な様相を示している。

鉄製品は刀子と釘以外原型を判別できないが、鉄滓も出土している。木製品は遺存状態が良好なものが少ないが、ヘラ状製品（鋤か）が出土している。銅銭も遺存状態が悪く図化できたのは５点に留まる。推定される初鋳年代は全て11世紀の北宋代である。

土師器・須恵器は山王遺跡出土例(菅原ほか1996）と比較すると第４群(10世紀前葉）に類例が認められる。

6　まとめ

①今回調査地点は中世の館跡の南東に位置し、標高は約９ｍである。

②Ⅲ層上面で井戸跡１基、土坑16基、溝跡4条、ピットが検出された。

③Ⅷ層上面で溝跡１条が検出された。

④各遺構・基本層位出土遺物を検討した結果、Ⅲ層上面は13世紀後半、Ⅷ層上面は10世紀前半以降の年代が与えられる。

⑤出土遺物(中世土器・陶磁器)全体をみると、渥美・常滑系の陶器が大半を占め、かわらけや貿易陶磁は少ない。

註(1)　東北学院大学教授松本秀明氏に実見していただき、ご教授いただいた。

〈参考文献〉

浅野克樹　2006「洞ノ口遺跡第12次発掘調査報告」『前田館跡他』仙台市文化財調査報告書第301集

小川淳一・高橋綾子　2000『王ノ壇遺跡』仙台市文化財調査報告書第249集

菊地逸夫ほか　1996『一本杉窯跡群』宮城県文化財調査報告書第172集

菊地逸夫　2003「Ⅱ陶器２陸奥の陶器生産⑹一本杉窯跡」『中世奥羽の土器・陶磁器』東北中世考古学会編　高志書院

佐藤洋　2003「Ⅰ土器２陸奥のかわらけ⑵陸奥南部２－宮城県―」『中世奥羽の土器・陶磁器』東北中世考古学会編　高志書院

進藤秋輝ほか　1994『宮城県多賀城跡調査研究所年報』

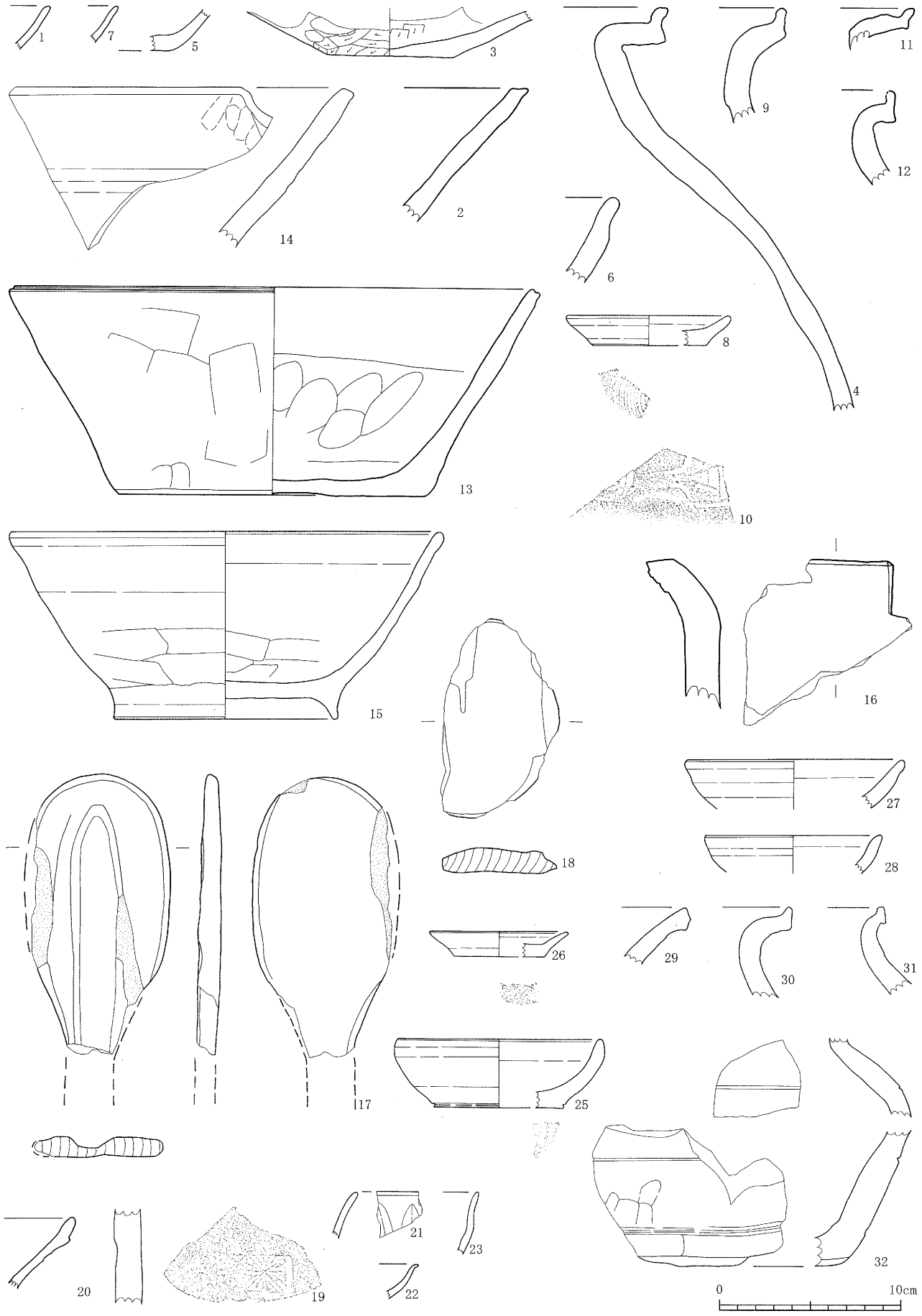
菅原弘樹ほか　1996『山王遺跡Ⅳ－多賀前地区考察編―』宮城県文化財調査報告書第171集

中野晴久　2005「常滑・渥美」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集

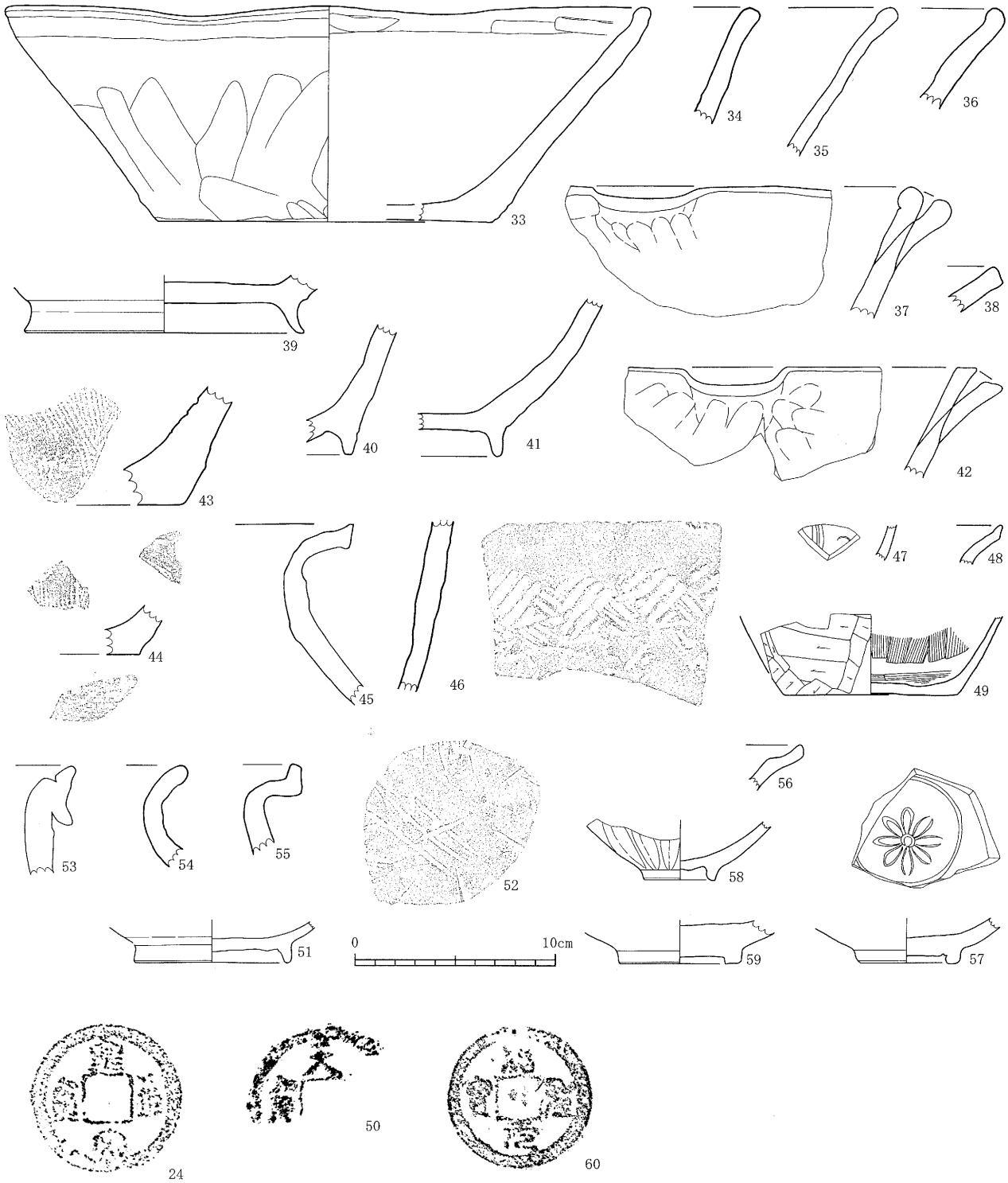
千葉孝弥　1992「武士の館の発見」『よみがえる中世７みちのくの都　多賀城・松島』

平間亮輔　2005『洞ノ口遺跡－第１次・２次・４次・５次・７次・10次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第326集

村田晃一ほか　2006『中野高柳遺跡Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第204集


1
7
5
3
11
9
14
2
12
6
4
8
13
10
15
16
18
27
28
26
29
30
31
17
25
20
19
21
23
22
32
0
10cm

第51図　出土遺物 1


33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
24
0
10cm

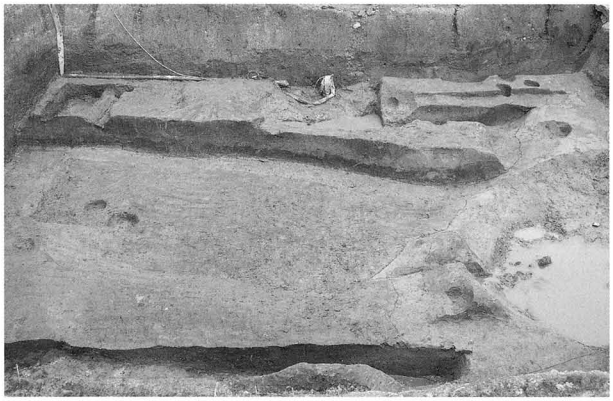
第52図　出土遺物２

図中番号	登録番号	出土地点	分類		法量（cm・g）			特徴・備考（産地・釉薬・文様・時期・その他）			写真図版
		遺構名・基本層位	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・厚	重量	産地	年代	
	Q－1	SD5上面	馬歯	—	—	—	—				22－1
1	C－1	SD5	土師器	坏	(2.4)	—	—				22－2
2	I－1	SK－1　2層	陶器	鉢	(7.5)	(32.0)	—		常滑	5型式	22－3
	N－9	SK－1	鉄製品	不明	(4.3)	(4.2)	(1.8)	重量：12g			22－4
	I－41	SK－3	陶器	甕	—	—	—	押印（簾状）	常滑		22－5
3	C－2	SK－4　2層	土師器	甕	(2.3)	—	(7.0)	外面手持ちヘラケズリナデ内面ヘラケズリ			22－6
4	I－2	SK－5　1層	陶器	甕	(22.1)	(24.0)	—		常滑	4～5型式	22－7
5	E－1	SK－7	須恵器	坏	(2.3)	—	(6.0)				22－8
	Q－2	SK－7	動物骨	—	(9.4)	(5.9)	(5.2)				22－9
	J－9	SK－9	青磁	蓋	—	—	—				22－10
6	I－3	SK－10	陶器	鉢	(4.8)	(28.0)	—		常滑		22－11
7	D－6	SK－11	土師器	坏	(2.1)	(12.0)	—	ロクロ調整内面ヘラミガキ黒色処理			22－12
	N－10	SK－15	鉄製品	釘	(5.7)	1.5	1.9	重量：20g　頭部幅（2.1）cm			22－13
	N－4	SK－15	銅製品	銅銭	—	—	—				22－14
8	I－4	SE－1	土師質土器	皿	1.7	(8.7)	(6.0)	ロクロかわらけ　底部回転糸切内外面被熱　雲母少量含む			22－15
9	I－10	SE－1	陶器	甕	(6.9)	(30.0)			常滑	4～5型式	22－16
10	I－38	SE－1	陶器	甕	—	—	—	押印（意匠不明）			22－17
11	I－8	SE－1	陶器	甕	(4.1)	(34.0)	—		常滑	4～5型式	22－18
12	I－9	SE－1	陶器	甕	(5.3)	—	—		常滑	4～5型式	22－19
13	I－6	SE－1	陶器	片口鉢	11.5	(29.0)	17.0	SK－3出土の破片と接合　常滑		6a型式	22－20
14	I－7	SE－1	陶器	片口鉢	(8.9)	(28.0)			常滑	6a型式	22－21
15	I－5	SE－1　2層	陶器	鉢	10.4	(23.5)	12.2		山茶碗系か	5型式	22－22
16	G－1	SE－1	瓦	桟瓦	(9.2)	(9.2)	1.9	切込幅4.7cm		近世	22－23
	N－1	SE－1	銅製品	銅銭	—	—	—				22－24
	Q－3	SE－1	馬歯	—	—	—	—				22－25
17	L－3	SE－1　3層	木製品	ヘラ状	(15.3)	(7.3)	1.2				22－27
18	L－4	SE－1　3層	木製品	不明	(10.5)	(6.3)	1.3				22－26
19	I－20	Ⅰ層	陶器	甕	(5.3)	—	—	押印（方形菊花）			23－28
20	I－48	Ⅰ層	陶器	擂鉢	(4.9)	(34.0)	—			近世	23－29
21	J－5	Ⅰ層	青磁	碗	(2.6)	(5.7)	—	鎬蓮弁文碗	龍泉窯		23－30
22	J－6	Ⅰ層	染付	皿	(1.9)	(12.0)	—			近世	23－31
23	J－7	Ⅰ層	染付	碗	(3.5)	(14.0)	—			近世	23－32
24	N－7	Ⅰ層	銅製品	銅銭	—	—	—	皇宋元寶（初鋳1039）			23－33
	N－11	Ⅰ層	鉄製品	刀子	12.3	1.8	0.5	重量：8g			23－34
25	I－21	Ⅱ層	土師質土器	皿	3.8	(11.0)	(7.0)	ロクロかわらけ　底部回転糸切後圧痕		13C中葉～14C前半	23－35
26	I－22	Ⅱ層	土師質土器	小皿	1.4	(7.6)	(4.8)	ロクロかわらけ　雲母多量に含む		14C中葉～後半	23－36
27	I－23	Ⅱ層	土師質土器	皿	(2.8)	(11.8)	—	ロクロかわらけ　口縁部ヨコナデ　雲母多量に含む		13C中葉～14C前半	23－37
28	I－29	Ⅱ層	土師質土器	皿	(2.1)	(9.6)	—	ロクロかわらけ　雲母含む			23－38
29	I－13	Ⅱ層	陶器	甕	(4.2)	(24.0)	—		産地不明		23－39
30	I－28	Ⅱ層	陶器	甕	(5.1)	(46.0)	—		常滑	4～5型式	23－40
31	I－30	Ⅱ層	陶器	甕	(4.9)	(22.0)	—		常滑	4～5型式	23－41
	I－52	Ⅱ層	陶器	甕	(2.2)	—	—				23－42
32	I－16・39	Ⅱ層	陶器	三筋壺	(7.6)	—	(10.0)		常滑		23－43
33	I－25	Ⅱ層	陶器	鉢	20.8	(31.7)	(16.3)		常滑	6a型式	24－46
34	I－49	Ⅱ層	陶器	鉢	(5.8)	(38.0)	—	雲母・黒色粒子多量に含む	山茶碗系か	5型式	24－50
35	I－35	Ⅱ層	陶器	鉢	(7.4)	(32.0)	—		山茶碗系	5型式	24－49
36	I－60	Ⅱ層	陶器	鉢	(5.0)	(34.0)	—		山茶碗系	5型式	24－52
37	I－36	Ⅱ層	陶器	片口鉢	(6.5)	(38.0)	—		山茶碗系	5型式	24－45
38	I－57	Ⅱ層	陶器	鉢	(2.3)	(28.0)	—	雲母多量に含む	常滑か		24－51
39	I－26	Ⅱ層	陶器	鉢	(2.8)	—	(13.8)		常滑	3～5型式	24－47
40	I－61	Ⅱ層	陶器	鉢	(6.3)	—	(18.0)		山茶碗系	5型式	24－53
41	I－34	Ⅱ層	陶器	鉢	(7.9)	(12.0)	—		山茶碗系	5型式	24－48
42	I－24	Ⅱ層	陶器	片口鉢	(5.5)	(30.0)	—		山茶碗系	5型式	24－44
43	I－32	Ⅱ層	陶器	擂鉢	(5.9)	—	(12.0)	内面磨滅　条線単位7本	古瀬戸後期～大窯期		24－54
44	I－58	Ⅱ層	陶器	擂鉢	(2.5)	—	—	内面鉄錆釉　外面露胎　条線単位9本		近世	24－55
	N－12	Ⅱ層	鉄製品	刀子	(11.1)	1.9	—	重量：18g			24－56
	N－13	Ⅱ層	鉄製品	不明	3.4	4.7	(2.6)	重量：29g			24－57
	N－14	Ⅱ層	鉄製品	釘	(5.4)	(0.9)	0.9	重量：7g			24－58
	N－15	Ⅱ層	鉄製品	不明	(3.3)	1.2	1.3	重量：10g　頭部幅（2.1）cm			24－59
45	I－40	Ⅲ層	陶器	甕	(9.1)	(26.0)	—		常滑	4～5型式	24－60
46	I－19	Ⅲ層	陶器	甕	(8.6)	—	—		渥美		25－61
47	J－8	Ⅲ層	青磁	碗	(1.8)	—	—	内面画花文	龍泉窯	12C中～後	25－62
48	D－3	Ⅳ層	土師器	甕	(2.0)	—	—	口縁部受口状　ロクロ調整			25－63
49	D－4	Ⅳ層	土師器	甕	(4.0)	—	8.5	外面手持ちヘラケズリ内面ヘラナデ			25－64
50	N－8	Ⅳ層	銅製品	銅銭	—	—		天□□寶（天聖元寶＝初鋳1023か）			25－65
51	D－2	Ⅴ層	土師器	坏	(2.0)	—	7.7	ロクロ調整内面黒色処理			25－66
	G－2	Ⅴ層	瓦	平瓦	(5.4)	(5.1)	2.5	波状のタタキ痕跡			25－67
52	I－12	表採	陶器	不明	—	—	—	ヘラ書き文あり一本杉窯か			25－68
53	I－14	表採	陶器	甕	(5.4)	—	—		在地	常滑6～7型式相当	25－69
54	I－31	表採	陶器	甕	(5.1)	(40.0)	—		渥美		25－70
55	I－46	表採	陶器	甕	(4.5)	(34.0)	—		常滑	4～5型式	25－71
56	J－1	表採	青磁	折縁皿	(2.1)	(20.0)	—				25－72
57	J－2	表採	青磁	碗	(2.3)	—	4.6	内底面印花文	龍泉窯		25－73
58	J－3	表採	青磁	碗	(2.9)	—	(3.5)	鎬蓮弁文碗	龍泉窯	13C中～14C初	25－74
59	J－4	表採	青磁	碗	(2.2)	—	(5.8)		龍泉窯		25－75
60	N－5	表採	銅製品	銅銭	—	—	—	□□元寶（紹聖元寶＝初鋳1094北宋銭か）			25－76

第４表　遺物観察表

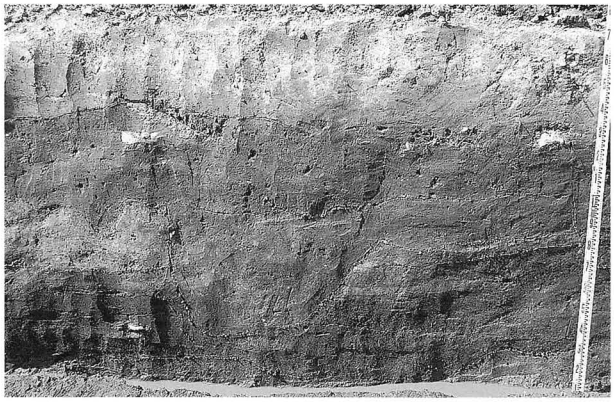
1　トレンチⅡ層上面検出（北から）

2　1トレンチⅢ層完掘全景（北から）

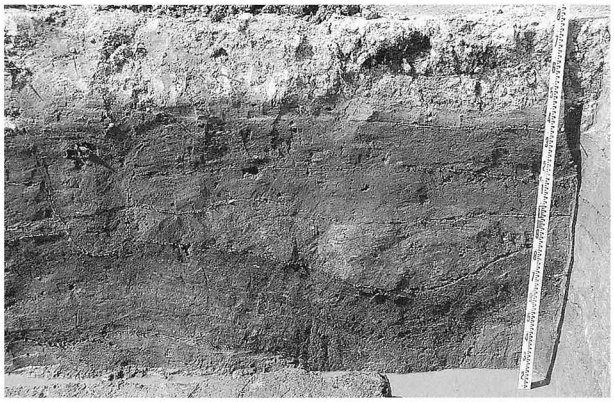


3　1トレンチⅣ層上面検出（西から）

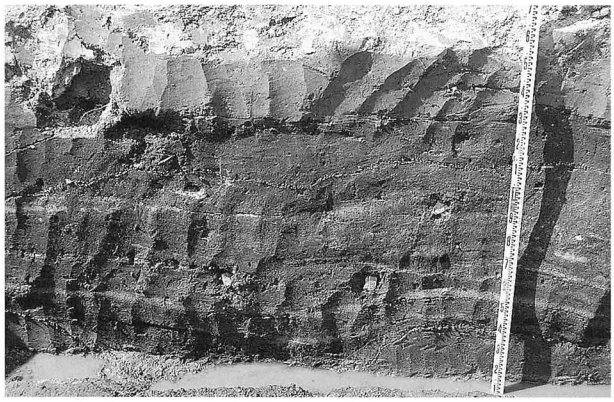
4　2トレンチ完掘状況（東から）



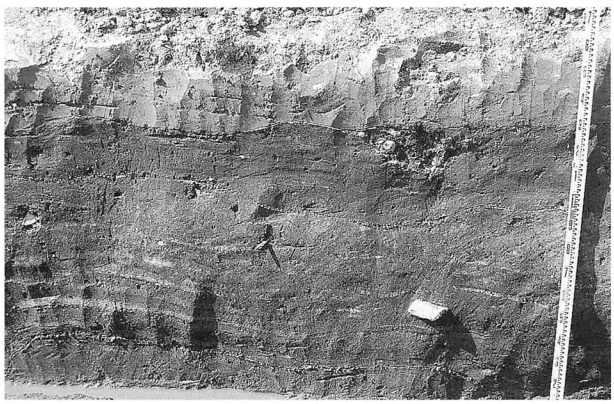
5　1トレンチ西壁北2（東から）



6　1トレンチ西壁北1（東から）



7　1トレンチ西壁南2（東から）



8　1トレンチ西壁南1（東から）

図版20　遺構検出・完掘状況・西壁断面

1　1トレンチ北壁東半（南から）

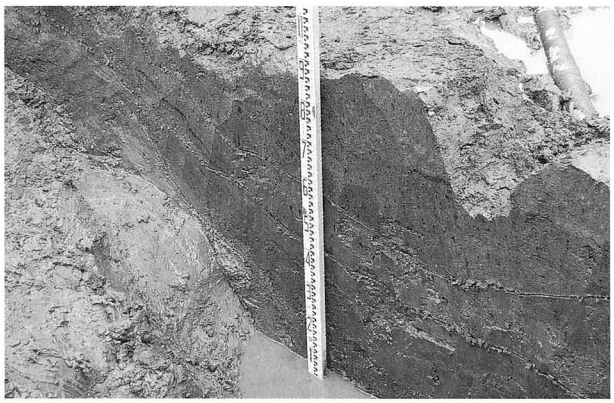
2　1トレンチ下層断面（西から）

3　SD５溝跡断面（北東から）

4　SK１土坑藁灰出土状況（東から）

5　SK５土坑藁灰出土状況（南西から）

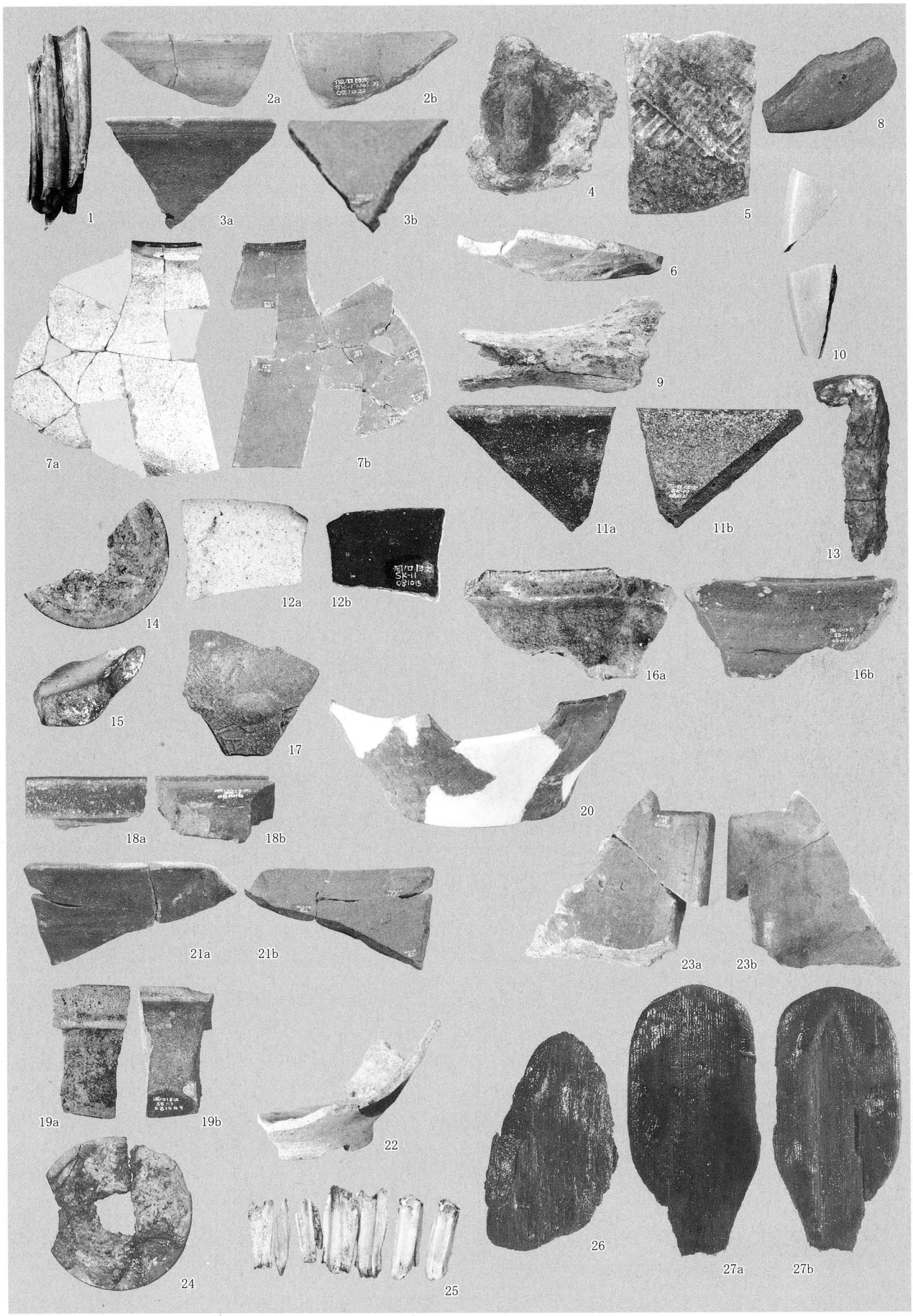
6　SE1井戸跡（南から）



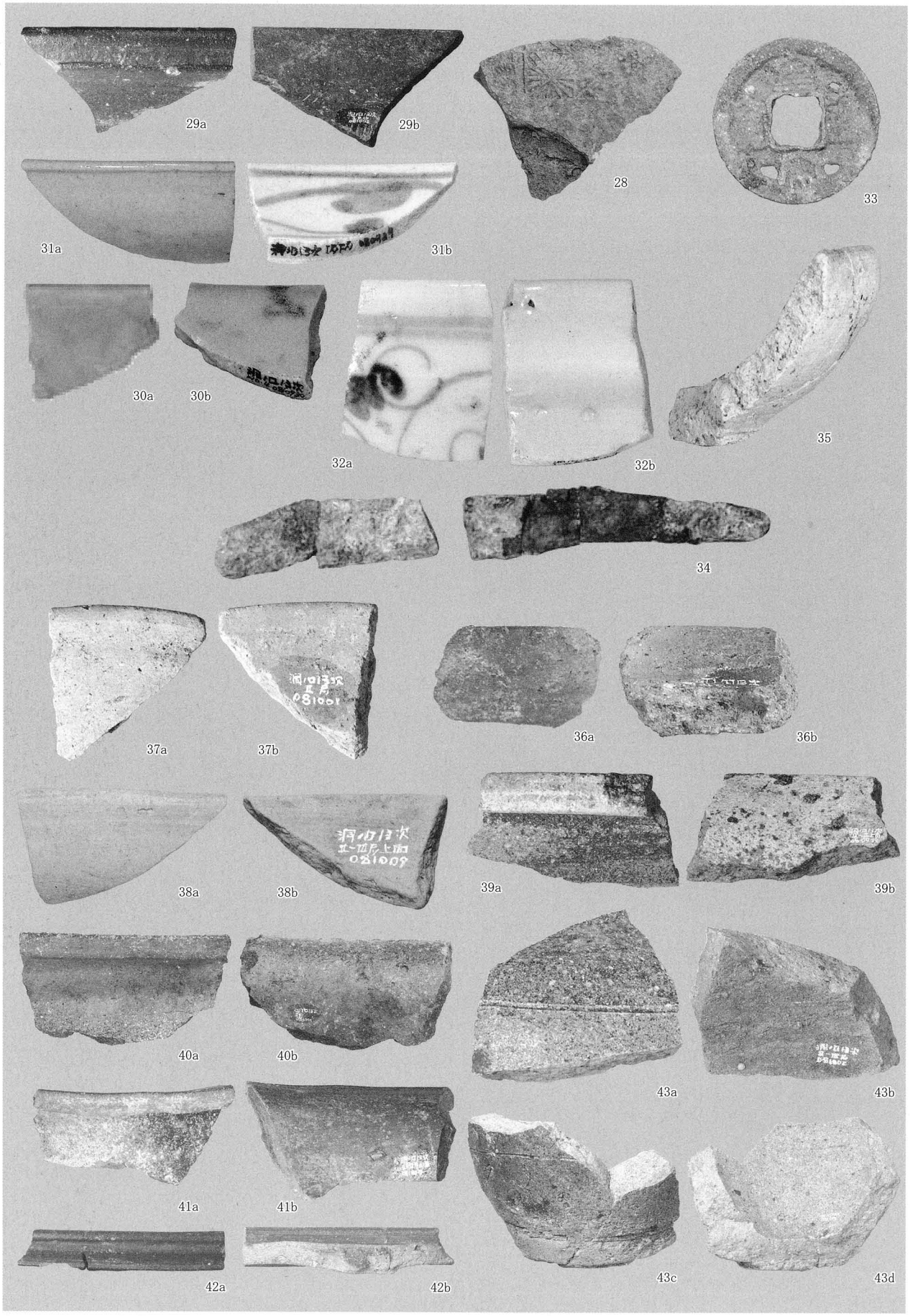
7　SE1井戸跡断面北半（西から）

8　SE1井戸跡断面南半（西から）

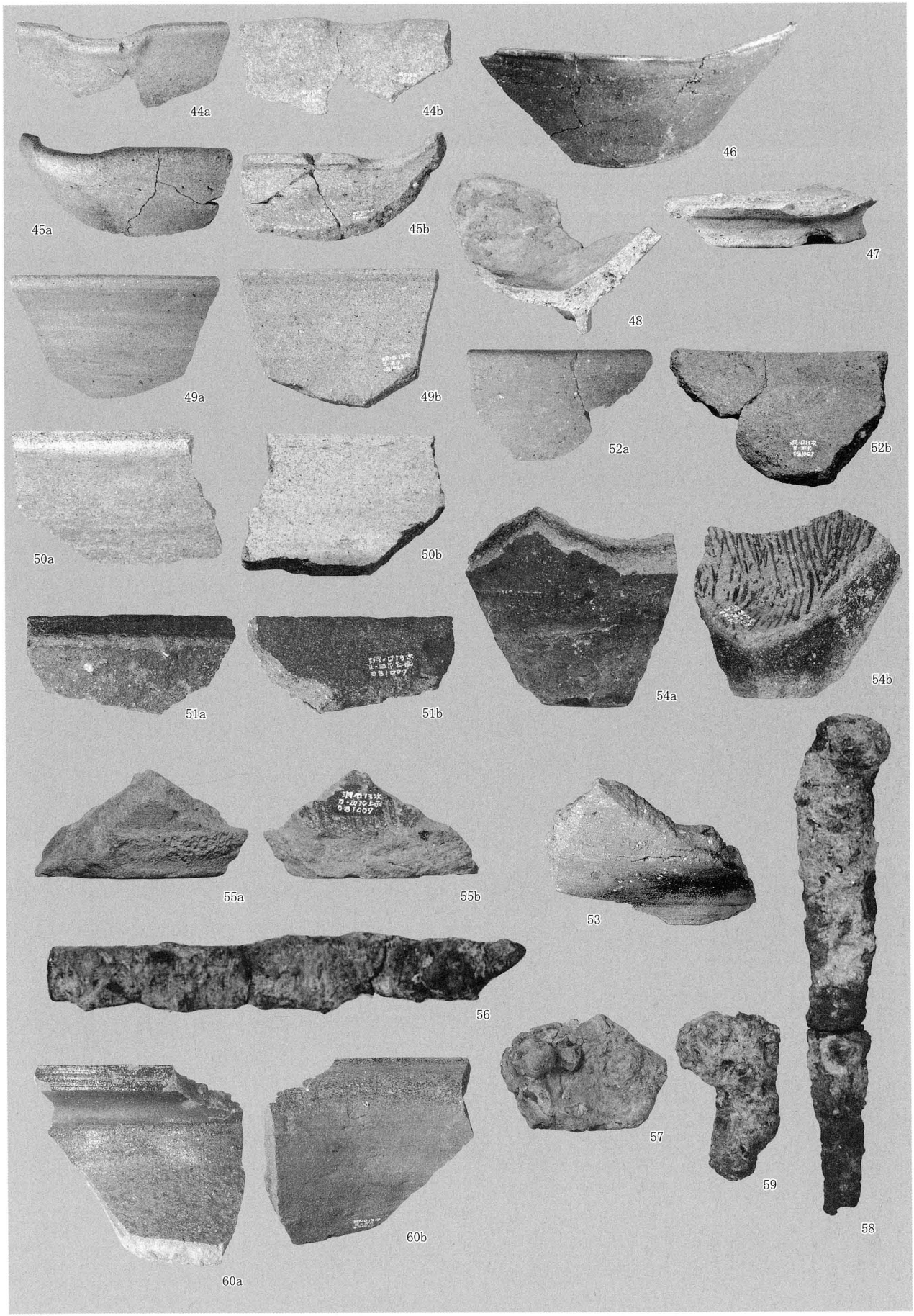
図版21　調査区断面・土坑・井戸跡


1
2a
2b
3a
3b
4
5
8
6
10
9
7a
7b
11a
11b
13
14
12a
12b
16a
16b
15
17
20
18a
18b
21a
21b
23a
23b
19a
19b
22
26
27a
27b
24
25

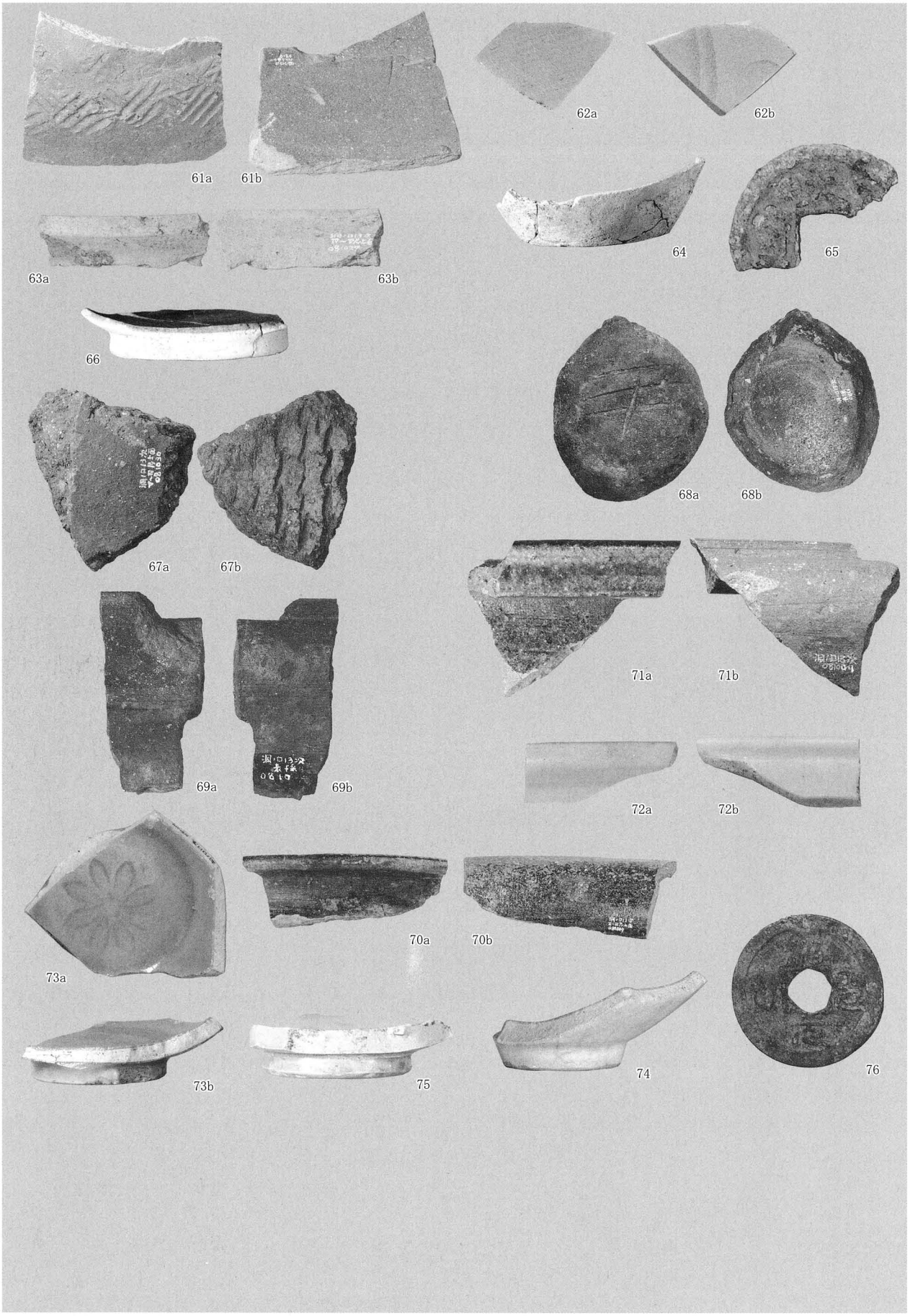
図版22　遺構出土遺物



図版23　基本層出土遺物 1



図版24　基本層出土遺物２



図版25　基本層出土・表採遺物

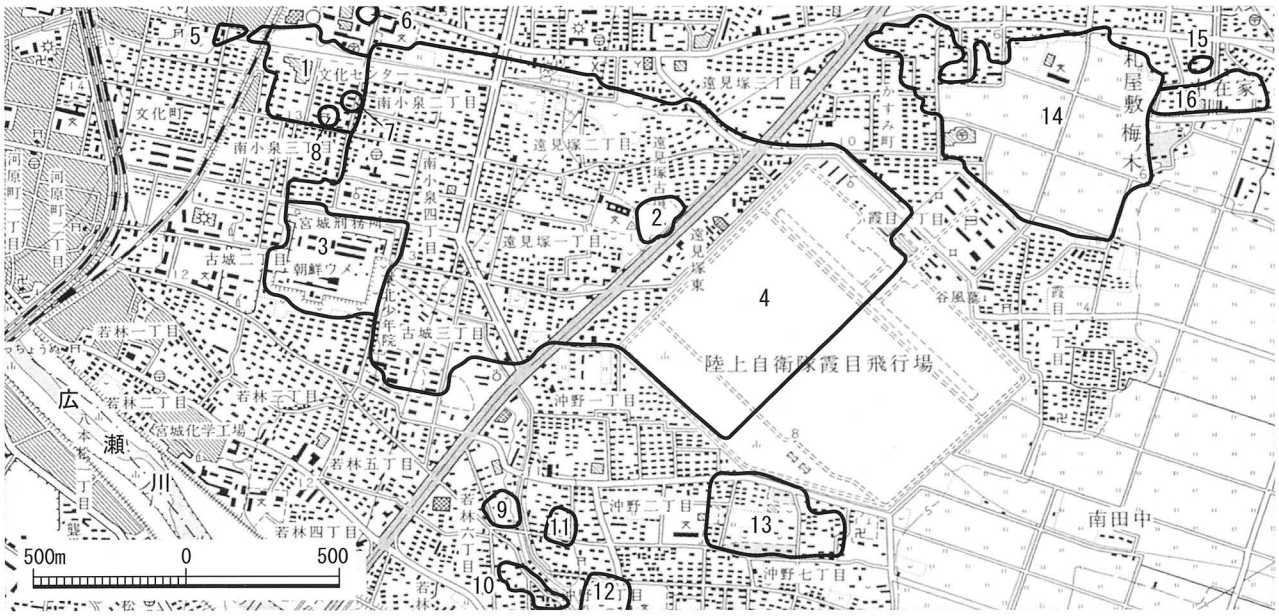
Ⅸ　養種園遺跡第７次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　養種園遺跡（宮城県遺跡番号01346）
調 査 地 点　　仙台市若林区南小泉一丁目６番28
調 査 期 間　　平成20年11月17日～11月20日
調査対象面積　　53.81㎡
調 査 面 積　　21.78㎡
調 査 原 因　　個人住宅建設工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主事　加藤　隆則　　文化財教諭　熊谷　敏哉

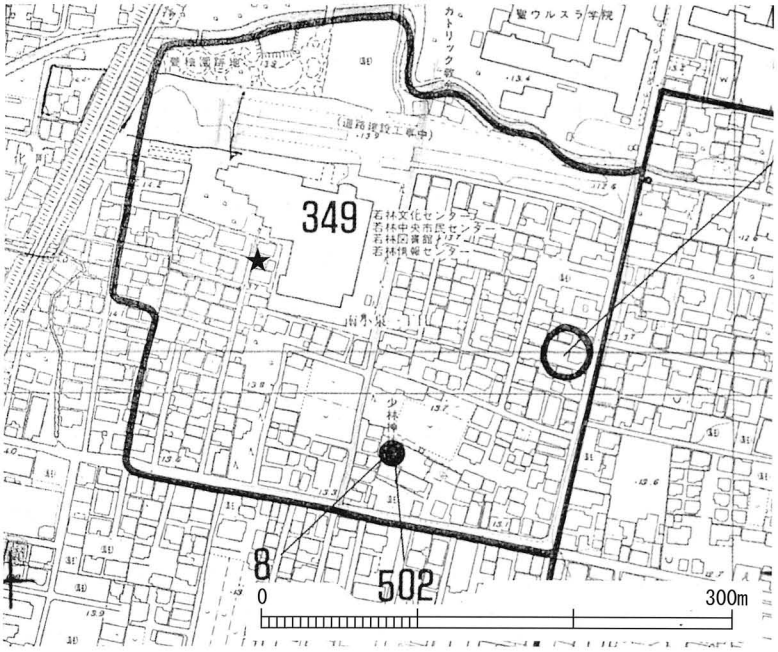
2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成20年９月25日付けで、地権者より提出された建築に係る発掘届（H20教生文184－182）に基づき実施した。確認調査は、平成20年11月17日に着手し、遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。調査区は排土置き場の制約により、はじめ建築範囲東側に１トレンチ（東西3.5m×南北3m）を設定し、Ｉａ・Ｉｂ

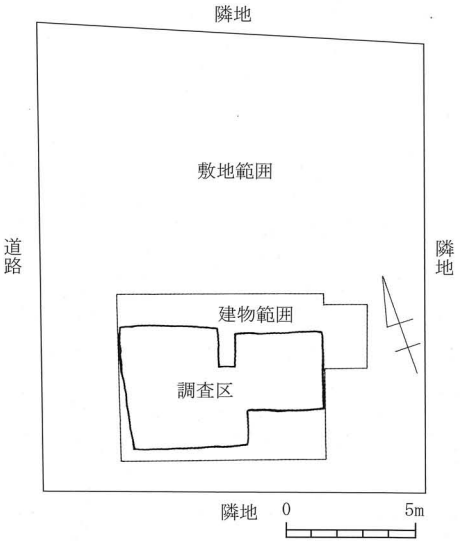


番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	養種園遺跡	集落、屋敷、包含地	自然堤防	縄文、古墳、古代、中世、近世	9	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
2	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	10	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
3	若林城跡	円墳、集落、城館	自然堤防	古墳、平安、中世、近世	11	神柵遺跡	官衙関係	自然堤防	奈良、平安
1	南小泉遺跡	集落、屋敷	自然堤防	弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世	12	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生、古墳、奈良、平安
5	保春院前遺跡	集落	自然堤防	古代、中世、近世	13	沖野城跡	城館	自然堤防	中世
6	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	14	仙台東郊条里跡	条里	後背湿地	奈良、平安
7	蛇塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	15	中在家遺跡	包含地	自然堤防	平安
8	猫塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	16	中在家南遺跡	集落、墓地	自然堤防、後背湿地	弥生、古墳、平安、中世、近世

第53図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第54図　調査地点の位置



第55図　調査区配置図

層を重機で除去した。Ⅱ層上面で人力による遺構検出作業を実施し、ピット９基を検出した。随時写真を撮影しながら平面図・断面図により記録した。その後同トレンチを埋め戻し、建築範囲西側に２トレンチ（東西4.6m×南北4.8m）を設定し、Ⅰ層を重機掘削し、Ⅱ層上面で竪穴住居跡1軒、ピット30基を検出した。

3　遺跡の位置と環境

養種園遺跡はＪＲ仙台駅の南東約2.5㎞に位置し、約300m四方で約9haの規模をもつ。宮城野海岸平野の奥部に位置し、後背湿地南側の自然堤防を占地している。遺跡内では北側と東側へ低くなる特徴があり、特に北側は埋没谷のような地形と予想され、黒色粘土や礫混じりの黒色シルト層が分布している。一方、遺跡南西部は高所となって黄褐色の粘土層・砂層が堆積し、更に下層では砂礫層が認められる。この砂礫層は氾濫原の堆積物と考えられる。

本遺跡は縄文時代から江戸時代の複合遺跡であり、周辺にも今泉遺跡・高田Ｂ遺跡・南小泉遺跡で縄文・弥生時代の遺構が検出されている。古墳時代には、南小泉遺跡の集落跡があり、古墳では遠見塚古墳（前期）・猫塚古墳（本遺跡内）・法領塚古墳（後期、本遺跡の北側）などがある。奈良時代には、本遺跡の北側に陸奥国分寺・同尼寺が造営される。隣接する南小泉遺跡では、９世紀代を主体とする集落跡が発見されている。中世には、南小泉遺跡内の城館跡・今泉城跡（今泉遺跡内）・南目城跡などがあり、このうち南小泉遺跡では12世紀後半に屋敷が成立し、14世紀後半には新たに城館が出現し、15世紀前半頃まで存続した。その後、16世紀後半再び屋敷が出現している。伊達政宗の晩年には若林城とその城下町が形成された。その時期は、寛永４年から同14～15年頃までである。本遺跡や南小泉遺跡の西半部はこの町域に含まれると考えられる。城下町期の遺構は本遺跡では少ないが、南小泉遺跡では５ヶ所で武家屋敷跡が検出されている。今泉城跡では、江戸時代以降屋敷地として再利用されている。陸奥国分寺跡では、寺域内に伊達政宗により薬師堂（慶長12年）が建設され、門前に子院群が形成されている。

4　基本層序

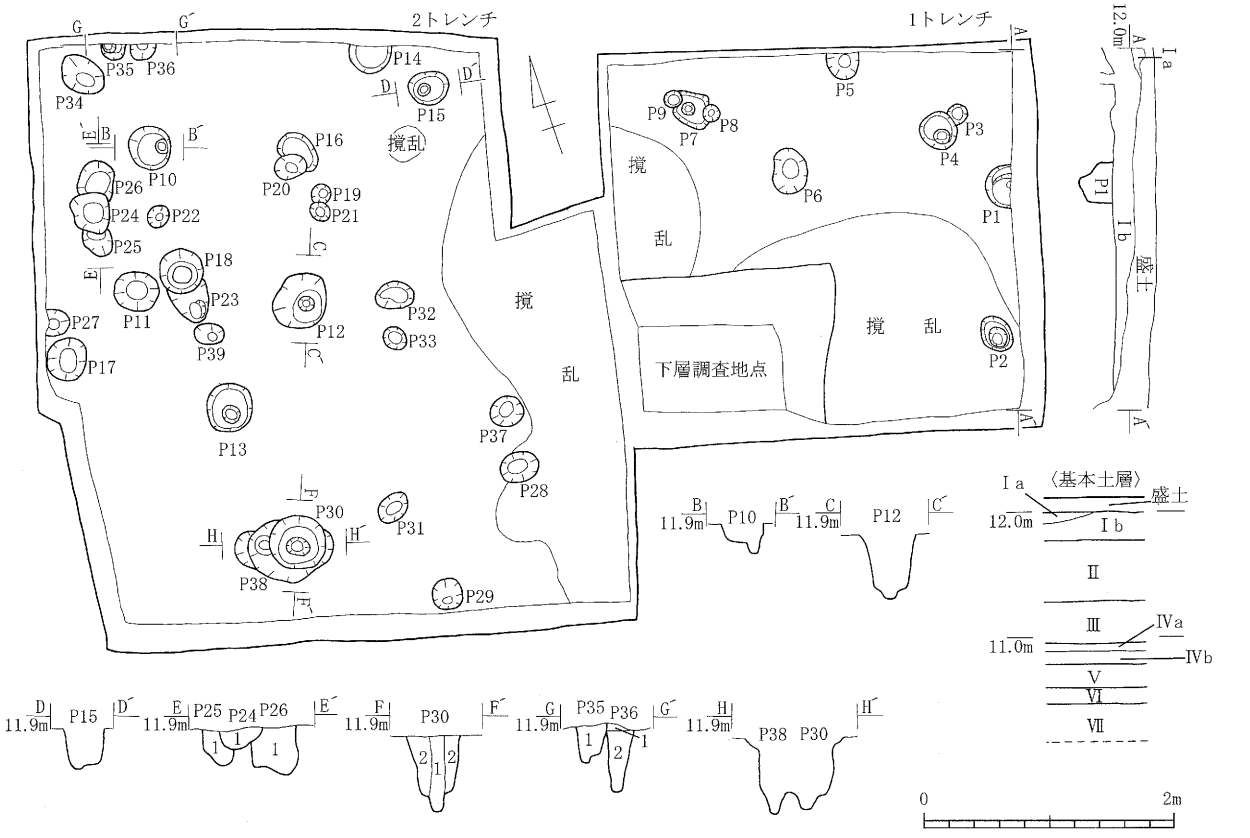
調査地点は約10～25cm 程度の盛土があり、基本層は盛土下に大別７層、細別９層を確認した。Ⅰａ・Ⅰｂ層は褐色砂質シルトで層厚約20cm、Ⅱ層は褐色シルト質砂で遺構検出面である。Ⅲ層以下は１トレンチ南西部を深掘りして土層堆積状況を確認した。Ⅲ～Ⅳｂ層は黄褐色細粒砂、Ⅴ～Ⅶ層は褐色細粒砂である。

5　発見遺構と出土遺物

１トレンチでピット９基、２トレンチで竪穴住居跡１軒、ピット29基を検出した。遺構検出面はⅡ層上面である。

１）竪穴住居跡

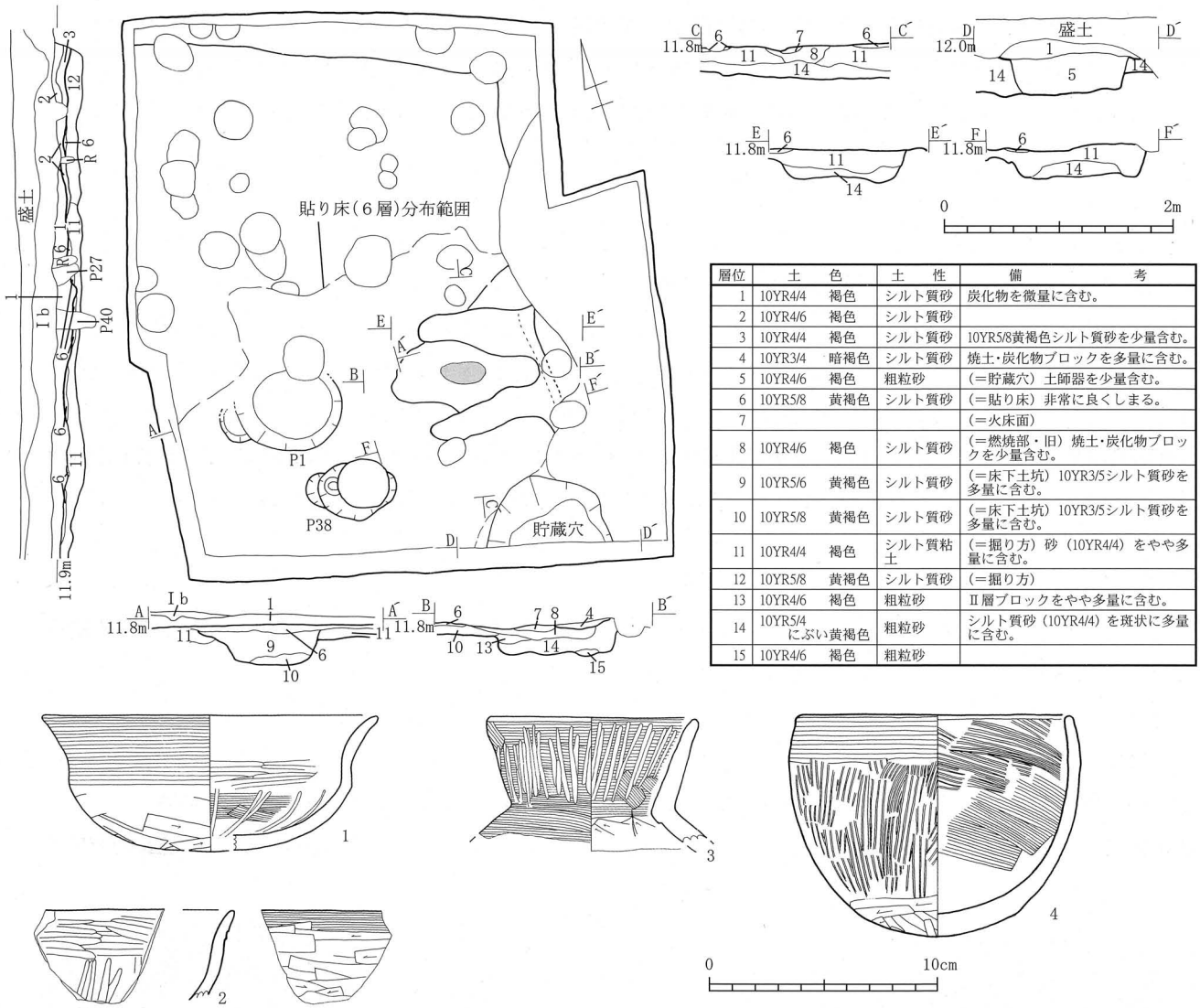
ＳＩ１竪穴住居跡　２トレンチのⅡ層上面で検出した。北壁および東壁の一部を検出したが、南壁および西壁は調査区域外である。また東壁は大部分を撹乱によって壊されているが、東辺掘り方を検出した。平面形は不明であるが、検出した規模は北壁3.7m、東壁4.6mである。掘り方埋土上面を床面としており、カマド前面から住居中央付近にかけて貼り床（６層）を敷設する。厚いところでは６～８cm 程度確認できる。床面までの堆積層は住居跡中央部分で１層、北側で２層残っている。確認面から床面までの深さは、もっとも残っているところで10cm である。カマドは東壁に位置する。遺存状態は極めて悪く、検出したのは燃焼部と火床面のみである。両袖はほとんど残っていない



基本層	土　色	土　性	備　考
Ⅰａ	10YR4/4　褐色	砂質シルト	炭化物を少量含む。Ⅱ層ブロックを少量含む。
Ⅰｂ	10YR4/4　褐色	砂質シルト	炭化物を少量、Ⅱ層ブロックをやや多量に含む。
Ⅱ	10YR4/6　褐色	シルト質砂	
Ⅲ	10YR5/6　黄褐色	細粒砂	
Ⅳａ	10YR5/6　黄褐色	細粒砂	
Ⅳｂ	10YR5/6　黄褐色	細粒砂	炭化物粒を微量に含む。
Ⅴ	10YR4/6　褐色	細粒砂	炭化物粒を微量に含む。
Ⅵ	10YR4/6　褐色	細粒砂	
Ⅶ	10YR4/6　褐色	細粒砂	

層位	土　色	土　性	備　考
P24－1	10YR4/6　褐色	シルト質砂	Ⅱ層ブロックを極多量に含む。
P25－1	10YR4/6　褐色	シルト質砂	炭化物を少量含む。Ⅱ層ブロックを少量含む。
P26－1	10YR4/6　褐色	シルト質砂	Ⅱ層ブロックを極多量に含む。
P30－1	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層ブロックを多量に含む。
2	10YR4/3　にぶい黄褐色	細粒砂	Ⅱ層ブロックを極多量に含む。
P35－1	10YR4/4　褐色	シルト質砂	
P36－1	10YR3/3　暗褐色	シルト質砂	
2	10YR4/6　褐色	シルト質砂	

第56図　遺構平・断面図



層位	土色	土性	備考
1	10YR4/4 褐色	シルト質砂	炭化物を微量に含む。
2	10YR4/6 褐色	シルト質砂	
3	10YR4/4 褐色	シルト質砂	10YR5/8黄褐色シルト質砂を少量含む。
4	10YR3/4 暗褐色	シルト質砂	焼土・炭化物ブロックを多量に含む。
5	10YR4/6 褐色	粗粒砂	(＝貯蔵穴) 土師器を少量含む。
6	10YR5/8 黄褐色	シルト質砂	(＝貼り床) 非常に良くしまる。
7			(＝火床面)
8	10YR4/6 褐色	シルト質砂	(＝燃焼部・旧) 焼土・炭化物ブロックを少量含む。
9	10YR5/6 黄褐色	シルト質砂	(＝床下土坑) 10YR3/5シルト質砂を多量に含む。
10	10YR5/8 黄褐色	シルト質砂	(＝床下土坑) 10YR3/5シルト質砂を多量に含む。
11	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	(＝掘り方) 砂 (10YR4/4) をやや多量に含む。
12	10YR5/8 黄褐色	シルト質砂	(＝掘り方)
13	10YR4/6 褐色	粗粒砂	Ⅱ層ブロックをやや多量に含む。
14	10YR5/4 にぶい黄褐色	粗粒砂	シルト質砂 (10YR4/4) を斑状に多量に含む。
15	10YR4/6 褐色	粗粒砂	

図中番号	登録番号	出土地点 遺構名	出土地点 層位	分類 種別	分類 器種	法量(cm) 器高	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	特徴(形状・整形・調整等)	写真図版
1	C−1	SI−1		土師器	坏	(5.9)	(14.6)	−	【調整】外面：口縁−ヨコナデ、体−ケズリ 内面：口縁−ヨコナデ、体−ヘラナデ→放射状ミガキ	26−1
2	C−4	P38		土師器	坏	−	−	−	【調整】外面：口縁−ヨコナデ、体−ケズリ 内面：口縁−ヨコナデ→ミガキ、体−ヘラナデ→放射状ミガキ	26−2
3	C−5	SI−1・貯蔵穴	5層	土師器	坩	(5.8)	9.1	−	【調整】外面：口縁−ヨコナデ→ミガキ、胴上−ヨコナデ→ミガキか 内面：口縁−ヨコナデ→ミガキ、胴−ケズリ	26−3
4	C−2	SI−1・カマド付近		土師器	鉢	9.5	(12.5)	−	【調整】外面：口縁−ヨコナデ、胴−ハケメ、底−ケズリ 内面：口縁−ヨコナデ→ハケメ	26−4

第57図　SI1竪穴住居跡

状況であったが、炭化物や灰等の分布から袖の輪郭が明らかになった。東壁からの袖の長さは左袖で約100cm、右袖で約115cmである。火床面は燃焼部中央にあり、その中心は東壁から65cmに位置する。

カマド以外の施設では、貯蔵穴と床下土坑（P1）を検出した。この他、P38は柱穴の可能性がある。貯蔵穴はカマド右側に位置し、南側は調査区域外に延びている。平面形は楕円形で、規模はD−D´で104cm、床面からの深さは30〜35cmである。堆積土は1層で、第57図3の土師器坩が出土した。P38はP30により削平されているが、本住居跡の柱穴の可能性がある。正確な規模は不明であるが、床面から底面までの深さは43cmで、底面には径16cm、深さ14cmのピットが見られる。床下土坑は住居跡中央に位置し、貼り床の下から掘り込まれている。北側一部を失ってしまったが、平面形は楕円形で西側に小円形の段がつく。規模はA−A´で107cm、掘り込み面から底面までの深さは25〜30cmである。底面には貼り床類似の黄褐色シルト質砂（10層）が堆積する。

遺物は、カマドや貯蔵穴のほか、堆積土や掘り方埋土から、土師器片約100点（坏約20点、甕70点、坩1点、鉢1点）が出土した。このうち図示した遺物は4点である。1は口縁部と体部の境に稜をもち口縁部が外反する土師器坏

である。口縁部内面は横方向のミガキで、体部内面はナデの後、放射状のミガキが施される。２の土師器坏は口縁部と体部の境がなく、体部内面には放射状のミガキが施される。Ｐ38出土である。３は土師器坩で口縁部の内外面は横ナデ後、縦方向に磨かれる。４は土師器鉢で外面は口縁部が横ナデ、体部はハケメで底部付近のみヘラケズリである。

２）ピット

１トレンチⅡ層上面で９基、２トレンチで29基を検出した。Ｐ２・４・７・10・12・13・15・30・35・36では底面に柱痕跡が確認される。このうちＰ12、Ｐ30は比較的深い掘り方を持っている。それぞれの規模（長軸×短軸×深さ）はＰ12が45×40×44cm、柱痕径約12cm、Ｐ30が45×42×47cm、柱痕径約12cmである。ともにＳＩ１竪穴住居跡の堆積土中で検出しており、住居跡には伴わない。また２トレンチで検出したその他のピットも、ＳＩ１竪穴住居跡の堆積土中で検出していることから、住居跡には伴わないものと思われる。遺物は、以下のピットから出土した。Ｐ10で土師器片５点、Ｐ13で土師器片２点、Ｐ16で土師器片１点、Ｐ17で須恵器甕片１点、土師器片７点、Ｐ25で土師器甕３点、Ｐ26で土師器5点、Ｐ30で土師器７点である。いずれも小片で図示し得るものはない。

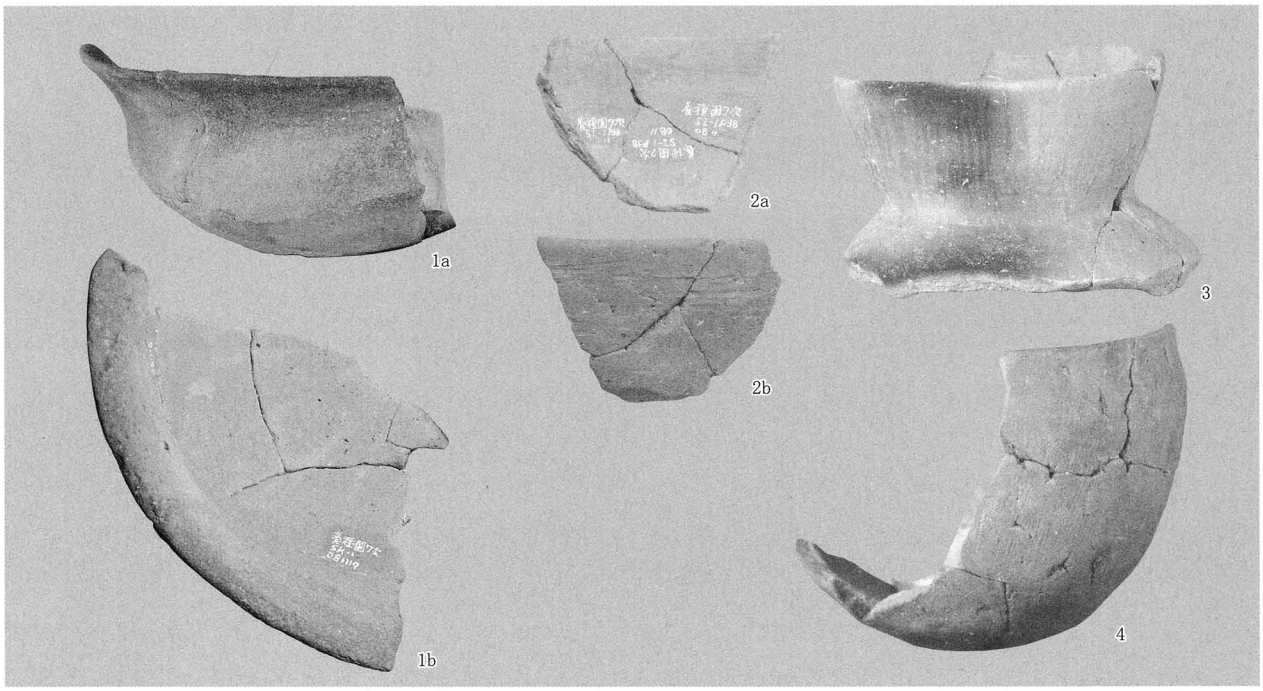
６　まとめ

Ⅱ層上面で竪穴住居跡1軒、ピット38基を検出した。ＳＩ１竪穴住居跡はカマドを持った住居跡である。出土遺物の土師器坏（第57図１）の特徴から、時期は古墳時代後期であろう。

〈参考文献〉

佐藤洋　1997「養種園遺跡　発掘調査報告書－伊達家別荘跡の調査－」仙台市文化財調査報告書第214集

渡辺弘美・木幡賀一　2008「南小泉遺跡第28次発掘調査報告書－都市計画道路「南小泉茂庭線」－関連遺跡調査報告書Ⅰ」仙台市文化財調査報告書第325集



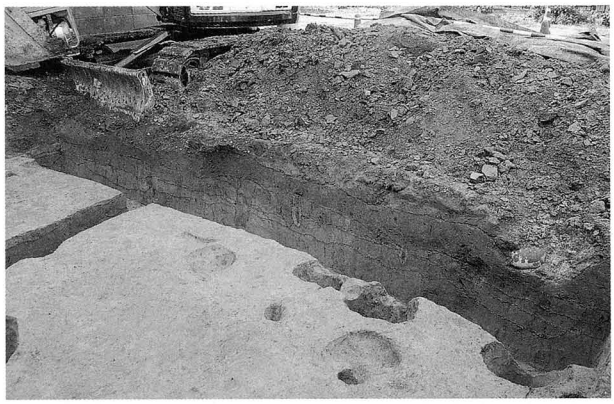
図版26　SI１竪穴住居跡出土遺物

1　Ⅱ層上面完掘状況全景（西から）

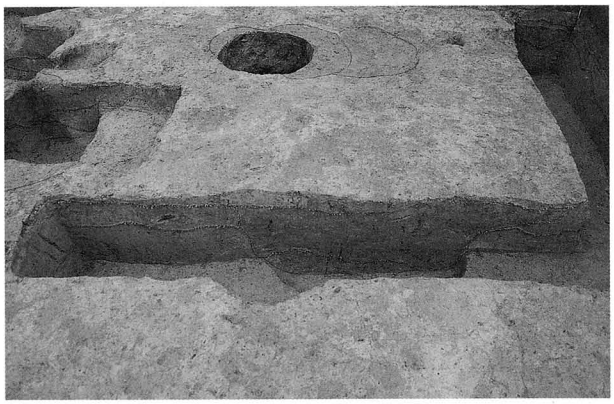
2　東壁断面

3　検出状況（西から）

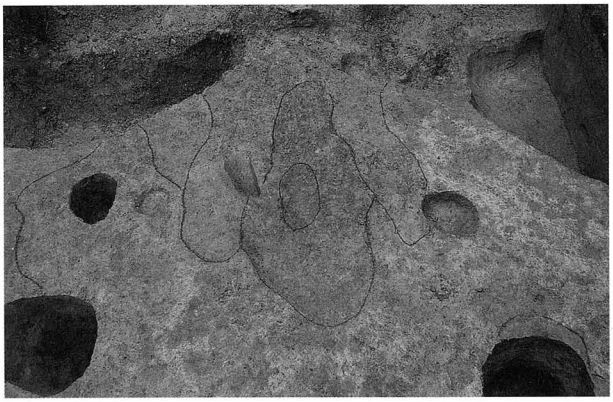
図版27　1トレンチ・SI 2 竪穴住居跡



1　南北断面（西壁）

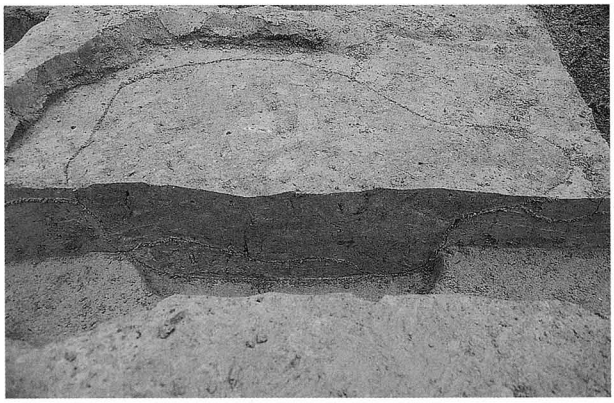


2　東西断面（A－A’）



3　カマド検出状況（西から）

4　貯蔵穴完掘状況（D－D’）



5　Ｐ１断面（北から）

6　Ｐ１完掘状況（北から）

7　２トレンチピット検出状況（西から）

8　１トレンチ南西下層調査地点（南から）

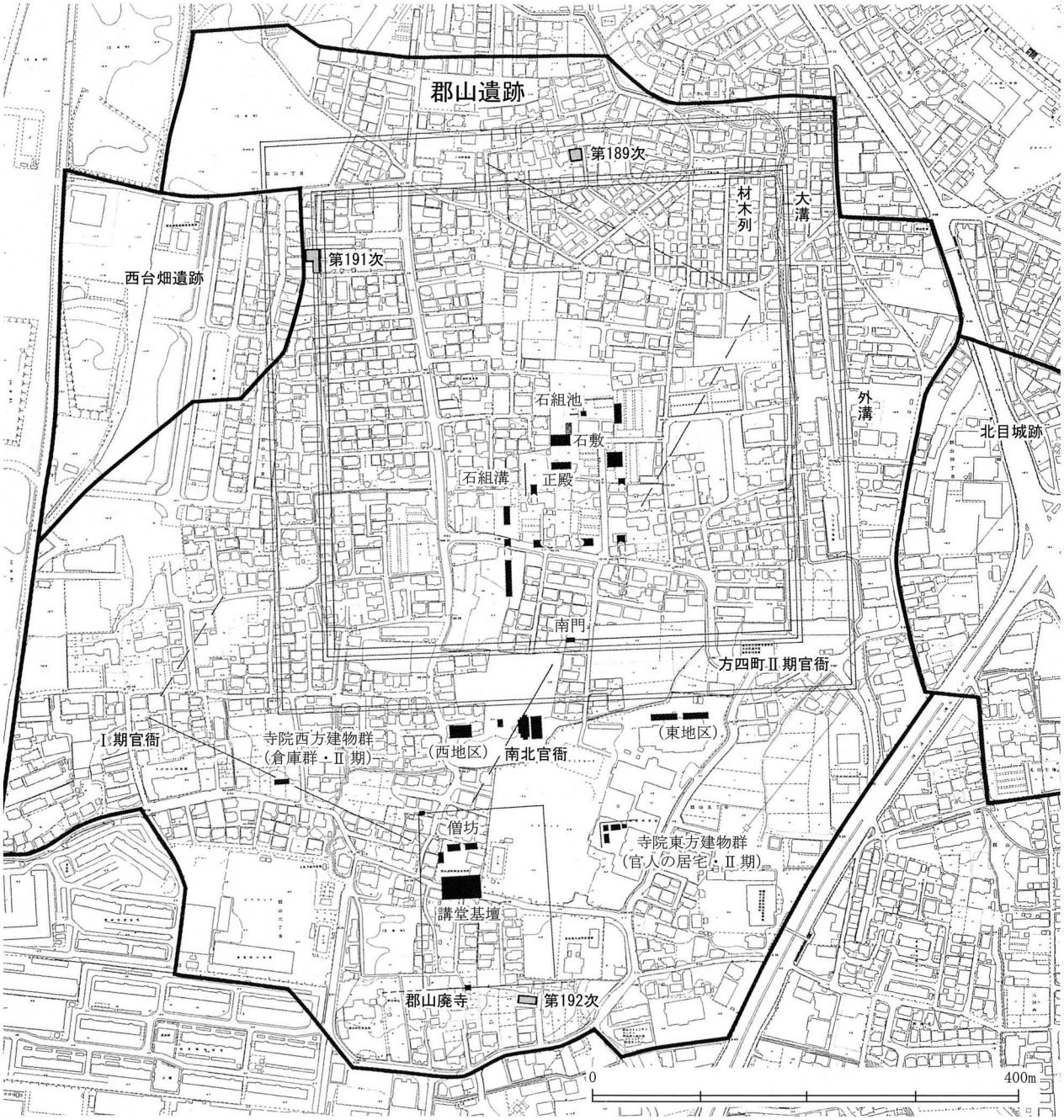
図版28　SI１竪穴住居跡

X　郡山遺跡

平成20年度に実施した個人住宅建設に伴う発掘調査は、第５表第57図の通りである。なお、調査の結果および抄録は仙台市文化財調査報告書第348集『郡山遺跡29』に所収している。

調　査　次　数	調　査　地　区	調　査　面　積	調　査　期　間	調　査　原　因
郡山遺跡第189次	Ⅱ期官衙北部	20㎡	7月7・8日	個人住宅建築
郡山遺跡第191次	方四町Ⅱ期官衙西辺	11㎡	7月22日	個人住宅建築
郡山遺跡第192次	郡山廃寺南辺付近	3㎡	11月25日	個人住宅建築

第５表　調査実績



第58図　調査地点の位置

XI　砂押古墳

1．遺跡の位置と環境

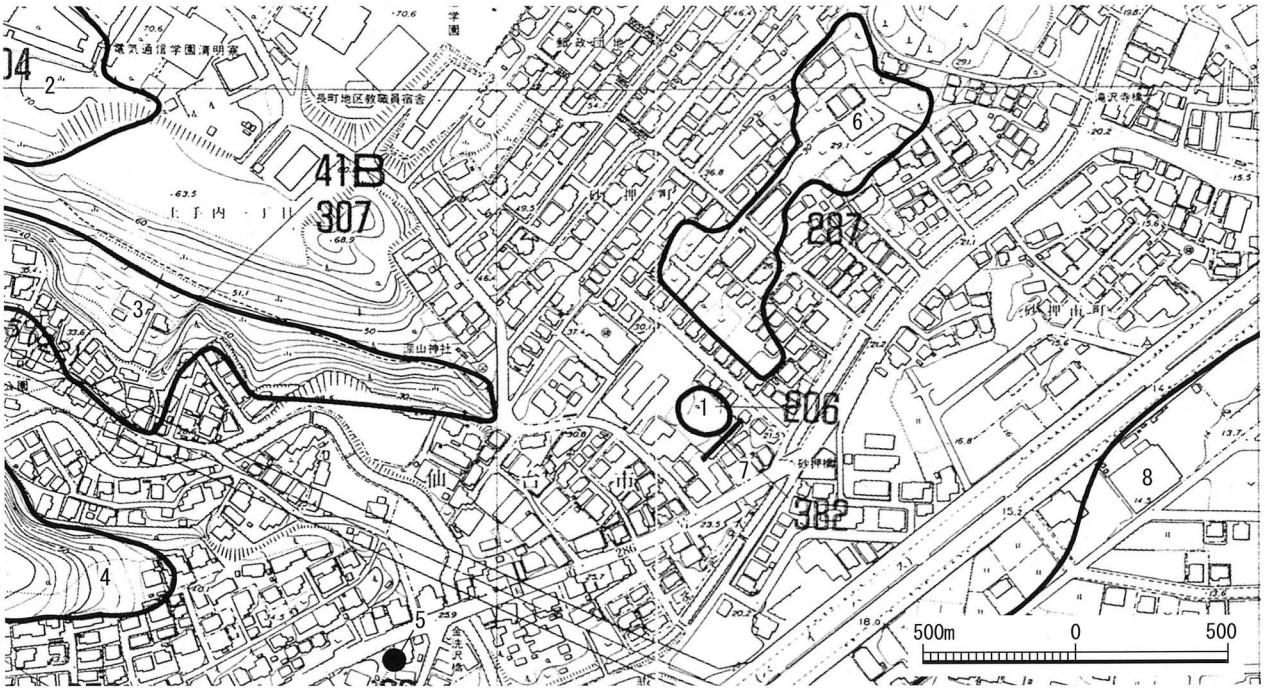
砂押古墳は仙台駅から南西約４㎞、太白区砂押町の住宅地に位置する（図58）。青葉山丘陵から派生する段丘裾の南東斜面にあたり、その南東側には広瀬側、名取川によって形成された沖積地が広がる。周辺の丘陵裾には砂押古墳のほか、裏町古墳、一塚古墳、二塚古墳など主要な前方後円墳、円墳が分布している。

2．調査概要

平成19年６月に個人住宅建築と擁壁工事の「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」が提出された。その後、同工事に伴う発掘届が提出されたため、確認調査を実施した上で必要な保存協議を行うこととした。これを受けて平成19年７月９日から８月30日まで確認調査を行った。古墳の規模が把握されたほか、墳頂部から埋葬施設２基が発見された。埋葬施設から副葬品などは発見されなかったが、石棺内からは赤彩の痕跡が認められた。

その後の協議の結果、個人住宅建築に伴い墳丘を削平することとなり、今回の本調査に到った次第である。本調査は平成20年５月14日から８月８日にかけて行われ、調査面積は約600㎡である。墳頂部の埋葬施設を追加調査し、主体部の構造が判明したほか、墳丘の構築状況を把握した。また、墳丘下からは竪穴住居跡などの遺構が重複した状態で検出された。

調査結果の詳細および抄録は仙台市文化財調査報告書第348集『郡山遺跡』29に所収している。そちらを参照していただきたい。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	砂押古墳	円墳	丘陵麓	古墳	5	金洗沢古墳	円墳	丘陵麓	古墳
2	土手内遺跡	集落	丘陵	縄文、弥生、古墳、奈良、平安	6	砂押屋敷遺跡	散布地	丘陵麓	奈良、平安
3	土手内横穴墓群Ｂ	横穴墓／窯跡	丘陵斜面	古墳末／古墳後、奈良	7	杉土手（鹿除土手）	土手	丘陵、段丘	近世
4	三神峯遺跡	集落	丘陵	縄文前・中、平安	8	富沢遺跡	包含地、水田	後背湿地	後期旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世

第59図　遺跡の位置と周辺の遺跡

報告書抄録

ふりがな	せんだいへいやのいせきぐん
書名	仙台平野の遺跡群
副書名	平成20年度発掘調査報告書　南小泉遺跡他
巻次	XIX
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第346集
編著者名	主濱光朗　鈴木隆　加藤隆則　森田義史　大久保弥生　佐藤正弥　熊谷敏哉
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　宮城県仙台市青葉区国分町３丁目７－１　電話　022-214-8894
発行年月日	平成21年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
南小泉遺跡（第58次）（みなみこいずみ）	仙台市若林区南小泉二丁目105-29（せんだいしわかばやしくみなみこいずみ）	04100	01021	38°14′27″	140°54′24″	2008.5.12 2008.5.16	48㎡	個人住宅建築
南小泉遺跡（第59次）（みなみこいずみ）	仙台市若林区遠見塚一丁目35－1の一部（せんだいしわかばやしくとおみづか）	04100	01021	38°14′10″	140°54′40″	2008・7・22 2008・8・6	55㎡	個人住宅建築
南小泉遺跡（第60次）（みなみこいずみ）	仙台市若林区遠見塚二丁目292－2（せんだいしわかばやしくとおみづか）	04100	01021	38°14′23″	140°54′50″	2008・9・24 2008・9・26	10㎡	個人住宅建築
鴻ノ巣遺跡（第11次）（こうのす）	仙台市宮城野区岩切字三所北124－5（せんだいしみやぎのくいわきりあざさんじょきた）	04100	01034	38°18′3″	140°56′53″	2008・5・19、21	15㎡	個人住宅建築
今泉遺跡（第７次）（いまいずみ）	仙台市若林区今泉二丁目85－10（せんだいしわかばやしくいまいずみ）	04100	01235	38°12′37″	140°55′39″	2008・6・2、4	15㎡	個人住宅建築
沖野城跡（第３次）（おきのじょう）	仙台市若林区沖野七丁目40－70（せんだいしわかばやしくおきの）	04100	01234	38°13′42″	140°55′13″	2008・8・4 2008・8・7	20㎡	個人住宅建築
洞ノ口遺跡（第13次）（どうのくち）	仙台市宮城野区岩切字洞ノ口100－1、188－6（せんだいしみやぎのくいわきりあざどうのくち）	04100	01372	38°18′08″	140°57′12″	2008・9・29 2008・10・30	86㎡	個人住宅建築
養種園遺跡（第７次）（ようしゅえん）	仙台市若林区南小泉一丁目6－28（せんだいしわかばやしくみなみこいずみ）	04100	01349	38°14′33″	140°54′2″	2008・11・17 2008・11・20	21.78㎡	個人住宅建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南小泉遺跡（第58次）	集落跡・屋敷跡	弥生～近世	溝跡、土坑、ピット	土師器、須恵器、瓦	
南小泉遺跡（第59次）	集落跡・屋敷跡	弥生～近世	竪穴住居跡、溝跡、土坑、小溝状遺構群	土師器、須恵器、陶器、鉄製品、石器	
南小泉遺跡（第60次）	集落跡・屋敷跡	弥生～近世	溝跡、土坑、ピット	土師器、弥生土器	
鴻ノ巣遺跡（第11次）	集落跡・屋敷跡・水田跡	弥生～中世	溝跡	土師器、陶器	
今泉遺跡（第７次）	集落跡・城館跡・包含地	縄文～近世	溝跡	陶磁器	
沖野城跡（第３次）	城館跡	中世	溝跡、土坑、性格不明遺構	陶磁器	
洞ノ口遺跡（第13次）	集落跡・城館跡・屋敷跡、水田跡	古墳～近世	井戸跡、土坑、ピット	陶磁器	
養種園遺跡（第７次）	集落跡・屋敷跡・包含地	縄文・古墳・平安～中・近世	竪穴住居跡、ピット	土師器	

※郡山遺跡・砂押古墳の抄録については、仙台市文化財調査報告書第348集『郡山遺跡29』に所収している。

仙台市文化財調査報告書第346集

仙台平野の遺跡群XIX

発掘調査報告書

2009年３月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目７－１
文化財課　TEL 022（214）8894

印刷　株式会社 建設プレス
仙台市青葉区折立三丁目2－10
TEL 022（302）0177